

『人生地理学』補注」補遺（第7回）

齋藤正二

解題

前号に引き続き、思想家・齋藤正二の畢生の大事業と言うべき『牧口常三郎全集第2巻 人生地理学（下）』「補注」の未公刊部分を〈補遺〉として掲載する。遺稿の掲載を御許可下さった齋藤氏の御遺族にはこの場を借りて胸奥より深く感謝を申し上げる次第である。

第二十章以降の補注は『牧口常三郎全集第2巻 人生地理学（下）』には収録されていない。前号（第12号）では、「第二編 地人相関の媒介としての自然／第二十章 植物」の〈補注1〉から〈補注142〉のうち、〈補注10〉から〈補注23〉までを掲載した。本号では〈補注24〉から〈補注36〉までの原稿のなかから、齋藤がほぼ完成させていたものを番号順に掲載する。一覧にすると以下の通りである。

補注24 甘藷（九一ページ、注12）

補注25 馬鈴薯（九一ページ、注13）

補注26 テーン（九一ページ、注14）

補注27 タンニン（九二ページ、注15）

補注28 本邦に於ける重要輸出品の一にして……及び加奈陀地方なり。（九二ページ、注16）

補注29 茶は元来湿潤にして温暖なる地方に……最も主要なる産地なり。（九二ページ、注17）

補注30 煙草（九二ページ、注1）

補注31 藍（九二ページ、注2）

補注32 綿（九三ページ、注3）

補注33 麻（九四ページ、注8）

補注34 黄麻（九四ページ、注10）

補注35 苧麻（九四ページ、注11）

補注36 亜麻（九四ページ、注12）

以上は「第二十章 植物」の「第二節 栽培植物と人生及地」（上掲書、八四～九六頁）に付

けられた補注となる。残りは次号以降に掲載予定である。

斎藤正二の『人生地理学』補注』また「第二十章 植物」の「補注』については既に伊藤貴雄氏の解説があるので、詳細はそちらを御覧いただきたい（『創価教育』第5号、第10号に掲載の〈『人生地理学』補注』補遺〉の解題を参照のこと）。第10号、第12号、そして本号に掲載された「第二十章 植物」の補注を読むと、解題で伊藤氏が述べているように、このチャプターこそが、『人生地理学』全巻中、注釈者の斎藤正二にとって最も思い入れの深い部分であったということがまざまざと実感できる。「植物」をめくって縦横無尽に展開される斎藤の注釈によって読者は牧口常三郎の『人生地理学』という思想空間の奥行きと広がり思い致すことが出来るだろう。かく言う本解題者も斎藤の補注に触れるまでは、「ジャガイモ」を通じて牧口の教育論を理解したり、「茶」を通じて牧口の国家観に論及できるなどとは思ってもよらなかった。ひとえに注釈者の該博と学問的情熱のおかげといえる。この渾身の注釈を、ぜひ御味読いただきたい。

（岩木勇作 記）

凡例

- ・表記は基本的に第三文明社刊『牧口常三郎全集第二巻 人生地理学（下）』の補注に準拠する。たとえば、「1 社会てふ語（一九三ページ、注1）」は、同書一九三ページに見える「社会てふ語」に付された〈脚注1〉のための〈補注1〉を意味する。
- ・原稿は縦書きだがそれを横書きに直した。それ以外は原稿の指示を極力反映してある。文中の引用形式は『全集』補注に準拠し、引用原典（縦書き）の右・左傍線は下線に統一した。
- ・字体は新字に統一してある。旧仮名遣いはそのままとした。
- ・おどり字の表記は次のように改めた。くの字点は「々々」あるいは「ゝゝ」にした。漢字は「々」、かなは「ゝ」「ゞ」、カナは「ゝ」「ゞ」で統一している。
- ・明治時代まで慣用された「と」「井」「子」「牝」などの仮名表記は「こと」「み」「ね」「とき」などに改めた。変体仮名（「ゑ」など）は現代仮名遣いに改めた。（編集部）

補 注

第二篇 地人相関の媒介としての自然

第二十章 植物

24 甘藷（九一ページ、注12） カンショ（甘藷）は漢名で、日本名ではサツマイモ。ヒルガオ科の多年生蔓草。茎は地上匍匐、葉は尖卵形で長柄あり、夏日淡紫色の朝顔そっくりの花を開く。塊根の形や質は品種によってさまざまであり、球形・紡錘形・円筒形はたまた不定形のものがあり、肉の色も白・黄・褐紅・紅・紅紫などいろいろである。植物学的には、いもの中央の大

部分は木部が異常肥大したものと考えられ、蒸したとき剥がれ易いところから外の部分は節部に当たると考えられ、ともに澱粉や糖類を多量に含んでいる。皮はコルク層であり、品種によっていろいろに着色している。澱粉も品種によって差異が大きく、平均二〇パーセントであるが、多いものは三七パーセントを超えるのに、少ないものは八・三パーセントにも満たない。熱帯地方のサツマイモの澱粉は少なく一〇パーセント内外であるが、糖分の点では熱帯地方のものの方が遙かに多い。以上、カンショ（サツマイモ）に関する基礎知識の復習をおこなっておいたが、もうひとつ、過去人類がどんなにかこのサツマイモのお蔭で凶作・飢饉・餓死から救われたものだったかという食物文化史の概観を、基礎知識に付け加えたい。さいわい、手頃なコラム記事を『万有百科大事典 19・植物』（一九七二年十月、小学館刊）のなかに見出したので、紹介しておく。

サツマイモと救荒植物

サツマイモは肥料の吸収力が強く、乾燥に耐える力が強いので、やせ地や干害の起こりやすい地帯でも栽培できる。また、開花と稔実を経なければ収量が決まらない穀物とは異なって、根がふとるだけのいもでは、早掘りの収穫もでき、遅植えも可能であり、また茎葉は地面をはい、地中にいもができるので台風害も受けない。このようにサツマイモは、悪い環境条件の下でも比較的安全確実に収穫が得られる。しかもサツマイモは一定面積当りのカロリー生産量は作物の中で最も高い。

一七世紀ごろまで、日本の各地では稲のかんばつによる凶作がたびたび起こり、そのたびに大飢饉に見舞われた。この救助策として、当時長崎や薩摩に伝来して栽培され始めたサツマイモが、凶作の際の救荒作物としてすぐれていることに着目した幾人かの先覚者たちは、献身的な努力によってサツマイモの普及伝播につとめた。たとえば、石見（島根県）の代官井戸正朋は、一七三二年（享保一七）の大飢饉のときに、薩摩から苗を取り寄せて栽培を指導し、後にいも代官様と仰がれた。また幕府の学者青木昆陽は一七三五年『蕃藷考』を著わして、上書し、救荒作物として関東地方への普及につとめ、甘藷先生と称された。こうして、やがて暖地におけるかんばつの際にはサツマイモが救荒に大きく貢献をするようになった。

また、近年においても、第二次世界大戦中および戦後の食糧不足時代に、サツマイモは大増産され、これが危機を切りぬける大きな力となったことは見のがすことができない。日本のみならず、インド、中国などアジア各地においても、一七世紀以降のサツマイモの普及の歴史をみると、多くの場合、穀作物の凶作と飢饉の際の救助者としての役割を果たしている。しかしながら、今日のように食糧事情が安定すると、救荒の性質をもつサツマイモは、食料用としては、ほとんど栽培されなくなり、でんぷん原料用、野菜、間食用など、用途も異なったものとなってきている。

救荒作物としては、サツマイモのほか、ジャガイモ、キビ、アワ、ヒエ、ソバなどがあり、これらはいずれも短期間で、また比較的悪い環境条件下で収穫が得られる特性をそなえたものである。

（星川清親）

——サツマイモのことになんぞ斯んなにまで冗々と長い補注を加える必要は無いではないかと、あるいは迷惑がられる読者がいるかも知れない。だが、本稿筆者としては、サツマイモが中南米で紀元前から広く栽培されており、それがコロンブス時代にヨーロッパに運ばれ、やがて十六世紀ごろ中国に伝えられ、十七世紀初めに日本に将来された、という、人類史的歩み、ないし、世界史的足どりを、敢て再確認したかったのである。地理学とか、栽培植物史とか、いや、すべ

て科学とか思想とか歴史研究とかいった学問が日本国内の自然現象や社会事象を研究するだけでは全く「用を濟さない、事態に立ち到ってしまった文化状況は、なにも茲数年間に日本社会の顯著急激なる《国際化》が進行した所為ばかりではなく、正しくは、昔から然うだったのだ、ということを確認したかったのである。それと、もうひとつ別に、民衆の置かれた悪条件を憂え且つこれを救済しようとした先覚者（この場合は、いも代官様、甘藷先生をさす）の風貌を思い描こうとするとき、なんとなく牧口常三郎の写真肖像が臉に浮かぶので、本稿筆者としてはどうしても若干の言及をせざるにいらなかったのである。

25 馬齡薯 (九一ページ、注13) 脚注の個処で言及したように、「馬齡薯」という表記は、通常は「馬鈴薯」と書く。それならば、馬齡薯と書くのは完全な誤りかという、必ずしも然うとはばかりは断じ切れない。なぜかといえば、馬鈴薯と書こうと馬齡薯と書こうと、いずれ「バレイショ、という呼称そのものに正当性（正しさの根拠、と言い替えられようか）など包含されておりはしないからである。げんに、小倉謙監修『増補・植物の事典』（一九七四年五月、東京堂刊）の「ジャガイモ」の項目を覗くと、南米アンデス山脈地方原産の、このナス科多年草の根茎は「古くから原産地で食料とされていたが、ヨーロッパに伝わったのは一六世紀のなか頃でその後二～三世紀の間に世界中に広まった。日本に渡ったのは割合はやく慶長三年（一五九八）で、ジャワのジャガタラ（今のバタビア）からオランダ船がもってきたのがはじまりであるという。ジャガタラからのでジャガタライモがもとの和名、それがつまってジャガイモになった。これをバレイショ（馬鈴薯）というのは誤りであるといわれる。漢字で書くなら洋芋または陽芋がよく、英語で Potato である。日本に渡った当時は観賞用につくられるにすぎなかったが、食用として、盛んに栽培されるようになったのは、明治になってアメリカからよい品種が入ってからである。／ジャガイモは世界の重要な食物なので、各国で品種改良につとめたので、品種の数も多い。」とみえる。つまり、この専門学術項目の執筆者は、「バレイショ（馬鈴薯）というのは誤りであるといわれる。漢字で書くなら洋芋または陽芋がよく」と極め付けてしまって、バレイショなんぞという呼称は誤用ゆえ今後使わぬようにせよと言わんばかりである。本当に然うだとするならば、どだい最初から誤用でしかないバレイショの呼称に対して、漢字を宛てる場合に「馬鈴薯」と表記しようと「馬齡薯」と表記しようと、いずれ誤用に終わるしかないのだから、『人生地理学』著者が「馬鈴薯」と書かずに「馬齡薯」と書いた表記法を「揚げ足取り、の材料に据えるような真似は止めたほうがよい。本稿筆者の貧しい推定（けっして断定ではない）によれば、どうやら、馬鈴薯（もしくは馬齡薯）は「マレー群島産の薯 Malaysian Potatoes」というほどの意味であり、マレー群島（アジア大陸とオーストラリア大陸との中間に在り、両大陸を飛び石状につなぐ島群をいい、フィリピン諸島・スダ列島・モルッカ諸島から成り、時としてニューギニアを含めて言う場合もある）のなかには当然ジャワ Java（東インド大スダ列島東南部の主島）も含まれるから、近世中国人か近世日本人かが軽い気持で《宛て字》を試みたものだったと見做して差し支えないのではないか。『増補・植物の事典』の「バレイショ（馬鈴薯）というのは誤りである

といわれる。漢字で書くなら洋芋または陽芋がよく」という極め付けも、それほど根拠あつてのことではないだろう。それに直続するセンテンス、すなわち「日本に渡った当時は観賞用につくられるにすぎなかった」うんぬんも、随分と乱暴な極め付けでしかないから。すなわち、世界じゅうで重要な食料とされ、各国において品種改良の努力の対象となったジャガイモが、日本の場合にかぎって、わざわざ「渡った当時は観賞用につくられるにすぎなかった」などという悠揚かつ鈍感なる受け入れられかたをしたはずないから。指導的立場にある国立科学博物館第一研究部長のS博士が斯んな乱暴無茶な断定を公表して済ましていられたのは、やはり時代の所為であり、S博士個人を譴めるには毫も当たらない。(本稿筆者が偉そうな顔して他人様の学説を批判し得るのも、ひとえに学問水準の進んだ新時代のお蔭を蒙っているのであり、S博士より後代の社会に生まれ合わせたという偶然の所為であるに過ぎない。)それは兎も角として、茲に使われている「馬鈴薯」という表記は、このまま(つまり、印刷所の誤植とか、著者牧口の勘違いとかと見做さずに、原文を尊重して、の意である)許容して差し支えないとおもう。

またまた、牧口弁護ないし牧口鼈頂の注釈をおこなったことになるが、本稿筆者としては、あくまで公平厳正なる科学思考に根ざして発言している所存である。

前補注24においてサツマイモの日本への輸入＝普及を少々詳しく跡づけた以上、本補注25においてジャガイモの本邦移入のありさまに全く触れずに置くことは、叙述のバランスじょう、片手落ちに墮するとの譏りを招きかねない。たまたま、手許に一冊の好著が在る。山口彦之『作物改良に挑む』(一九八二年十一月、岩波新書版)の「IV 導入された作物」というチャプターのなかに、此方の望むどおりの素晴らしい記述がある。

凶作で普及したジャガイモ

不思議な魔力 コロンブスが誤ってインド人と呼んだインディオは、トウモロコシ、ナンキンマメ、カボチャ、トマト、キノア(アカザの仲間)、タバコなどのほか、根栽類としてジャガイモ、サツマイモ、キャッサバ、ヤム、オカ、アヌウ、ウルコなどを栽培していた。南米のジャガイモは、一五三二年ごろスペイン人の手によって船内の食糧として持ち出されたと想見されている。スペイン人がジャガイモをババあるいはパタタと呼ぶのは、インディオの言葉に由来する。

ジャガイモは種子がなくても新しい植物体を作っていくので、ヨーロッパに渡来したときは不思議な魔力があると思われた。地下部で繁殖する作物なんか見たこともなかったから、ジャガイモは松露という食用キノコの仲間ではないかと考えてしまった。ジャガイモは、スペインからイタリアへ、イタリアからドイツへ、ドイツからロシアへとヨーロッパ中に広まった。イタリアでは、ジャガイモをタルツフォリと呼んだが、これは松露という意味である(現在はパタタという)。ドイツ語のカルトツフェル、ロシア語のカルトシカは、いずれもイタリア語のタルツフォリに由来するという。
.....

日本への渡来 コロンブスのアメリカ発見後一〇〇年ほどたって、日本にジャガイモがお目見得する。白井光太郎氏によれば、天正四(一五七六)年に南京芋の名前で長崎に渡来したと「長崎両面鏡」という書物に書かれていると言う。ジャガイモは、サツマイモと異なり、寒冷地にもよく育ち、冷所で保存でき、また栽培の容易な作物であったから、長崎からしだいに全国に広まり、サツマイモ栽培の困難な飛騨、信濃、越後、奥羽の地方に普及した。

享保一七（一七三二）年、天明二一七（一七八二一八七）年、天保四一一〇（一八三三—三九）年に起こった飢饉を江戸時代の三大飢饉と呼ぶが、その都度ジャガイモは多くの人たちの命を救い、救荒作物としてしだいに作付面積を伸ばしていった。つまり、日本でもフランスでも大飢饉がジャガイモを人びとに認識させたのであった。

天保の大飢饉の折、高野長英は「救荒二物考」（一八三六年）という書物を著わし、その中でソバとともにジャガイモを推奨した。この書物には、ジャガイモの長所として、「その一は、砂土石田、穀類熱せざる地に好んで繁茂するなり。その二は、烈風暴雨、久霜にあうて害を受けざるなり。その三は、繁殖容易にして人力を労することなし。寸地に耕し尺地の穫あり。ゆえに八升いもの名あり。まことにもって荒年の善糧というべし」をあげている。そのほか、ジャガイモの栽培、貯蔵、調理の方法を詳しく述べた。このために、飢饉の年にジャガイモのおかげで助かった人たちは多い。

しかしながら、日本でジャガイモが寒地畑作物として大規模の栽培が本格的に始まったのは、北海道に開拓がおこなわれた明治以降のことである。明治に至って開拓使は欧米から各種のジャガイモを導入試作し、北海道の開拓に重要な役割を果たした。明治から大正へかけてジャガイモの生産量は大いに伸びたが、これは北海道の開拓の進展とともにジャガイモの栽培面積が増加していったためである。

男爵いも ジャガイモの有名な品種「男爵いも」は、明治四〇（一九〇七）年に英国のサットン父子商会を通じて輸入した疫病に強い「アイリッシュ・カブラー」品種を川田竜吉男爵の農場で試作したことにちなむ。イモの肥大が早く、疫病に罹らなかったために栽培がしだいに広まった。原品種名のカブラーは靴直しの意味であるが、これは「アーリーローズ」品種の畑から変わりものを発見し選抜し栽培した人が米国に住むアイルランド系の靴直し屋だったからである。

現在では、日本のジャガイモの生産量は三〇〇万トンを超すが、この用途はでん粉原料に約四割、市販食用に約二割、農家自家消費、種いも用などに約四割となっている。でん粉原料として大量に使用され、水産練製品など食品加工用に約半分、そのほか糖化原料、繊維工業などに用途がある。

これまで述べてきたように、ジャガイモが食用作物として本格的に普及するまで優に三〇〇年も経過している。このことは、人間がいかに旧弊で新しい食物に対して警戒的であることを示している。導入作物については偏見をもつことがしばしばであり、その普及は困難を伴う。

ジャガイモの場合、飢饉や戦乱に見まわれて初めてその有用性に気づいたのである。人間は、昔から致命的な大打撃をうけて初めて悟ることを繰り返してきた。食糧供給の見とおしが厳しい現在、ごく少数の種類の植物に依存することはきわめて危険であり、人類が食物に対する頑迷さを捨てて、ほとんど人に知られていない有用植物を探索したり、忘れ去られた作物を再発見すべき時期が近づいている。（傍線個処は、引用者に拠る）

——このように追尋してくると、ジャガイモの導入＝普及が日本のみならず世界＝地球レベルで飢饉時に^{はじ}初めて認められるに到ったというプロセスに、あらためて気付かされる。この『作物改良に挑む』の著者山口彦之（東京大学農学部教授で、育種学および放射線生物学の講座担当者だった）は、殊更に「ジャガイモが食用作物として本格的に普及するまで優に三〇〇年も経過している。このことは、人間がいかに旧弊で新しい食物に対して警戒的であることを示している」と「警鐘」を鳴らし、今後の（つまり、一九九〇年代から二十一世紀以降に向かったの「未来の、の意である）人類の食糧対策の基本条件として「ごく少数の種類の植物に依存することはきわめて危険であり、人類が食物に対する頑迷さを捨てて、ほとんど人に知られていない有用植物を探索したり、忘れ去られた作物を再発見」したりすべきであると忠告している。まことに至言と申

すべきであり、食糧問題に関してさえも、人間がいかに偏見と先見主とに^{わざわ}禍いされて^{みずか}自ら不幸に陥り易い危険状態に在るかということを知らされ、愕然とせざるを得ない。

若き牧口常三郎が『人生地理学』の筆を進めていた一九〇三年ごろの植物学および地理学の発達水準を考慮に入れた場合、よくもまあ斯れ程に高度の叙述内容を押さえ得たものだなあと、特にこの「第二十章植物」の「第二節栽培植物と人生及地」を読みながら改めて感心させられる。牧口の資稟でもある《百科全書家》encyclopedist さながらの旺盛なる、知的興味に動機づけられて「なんでも見てやろう、式に有用植物のことに首を突っ込んだ結果と見て差し支えないであろう。一方、ひとり人間としての十全なる幸福実現のための物質条件（この場合、価値創造のプロセスに近似するものという意義で言っているのだが）を整備すべき第一歩に「人類の祖先が無数の歳月の間に徐々たる経験を積みて之を発見し、之を栽培し、後世に伝へ、以て現今の吾人に遺し」てくれた栽培植物に関する知識をば修得する必要ありとの冷徹なる思想発展史的展望（あるいは、より正しくは、生活探究的問題意識と言うべきか）が自己内部の奥深い次元に据えられてあったればこそ、斯かる高度の叙述内容を押さえ得たのではないかとおもう。牧口の学問探究が最初から生活に役立つものを目指し、それが晩年の《価値論》思考につながることは、自身で述懐するとおりである。じっさいに、牧口は、後年になって『創価教育学体系・第二卷—第三編価値論—』（一九三一年三月、創価教育学会刊）のあの有名な「序」のなかで「尚ほ不思議なのは拙著『人生地理学』との関係である。人生地理学は地人関係の現象を研究対象と為し、その間に於ける因果の法則を見出さうとしたもので、全く価値現象を研究して居たのである。それは今本書に於て価値概念を分析し、遂に其の本質を評価主体と対象との関係力なりと定義したのによつても判然しよう。即ちその当時は価値といふ名称にまでは至らなかつたとはいへ、既に薄膜一重の所に接近して居たのであるが、之を意識しなかつただけに過ぎない。今から見ると真に馬鹿らしい事であつたのである。」と言ひ、語を継いで「価値の追求が人生であり、人生の歴史が無価値の事件を伝える理由がないからである。／歴史の対象が価値であると同様の意味に於て地理学の対象も価値である。されば価値問題と余との因縁は三十余年を超えて居る。」と言ひ、また「何故に斯くも難解の価値問題に没頭しなければならぬ程に因縁が深いのであらうか。それは余の学問の対象が常に生活を離れないからであらう。『人生地理学』は人間の生活現象の地理的分布を対象とし、それに於ける因果の法則を見出し以て社会の空間的各方面の連帯性を闡明せんとするものであり、『創価教育学』は又被教育者の生活を指導する方法上の因果法則を探求せんとするにあるからである。人生が価値の追及であるとは又繰返す必要はあるまい。従つて人生と離れ得ざる科学の研究にあつては何人でも価値問題は回避の許されない前提であらねばならぬ。然らば如何に難解であらうとも実生活に縁遠い哲学者などに委任して呑気に其の解釈を待つて居られるものではあるまい。是れ即ち余が敢て難題と知りつゝも没頭せざるを得ずして茲まで引摺られて来た所以であつて、同じ理由に依て読者諸君にも之を強みざるを得ない所以である。」と言ふ。本人述懐するごとく、『人生地理学』における探究は、まさしく『価値論（創価教育学体系・第二卷）』の探究に対して「薄膜一重の所に接近して居たのである」。そして、若き牧口が栽培植

物に関する記述に熱心であったのも、「之を意識しなかつただけに過ぎない」が^{しか}而も「全く価値現象を研究して居たのである。」

——本稿筆者は、牧口『価値論』序が言っている「人生の歴史が無価値の事件を伝える理由がないからである。／歴史の対象が価値であると同様の意味に於て地理学の対象も価値である。」との重要テーゼをつねづね頭の中に置いて研究生活を送ってきているが（^{てら}銜って言うのではないが、本稿筆者個人の研究生活など殆ど取るに足らぬものでしかないことを自覚しているむね付言しておく）、いま、牧口『人生地理学』のこの章この節^{チャプター}この節^{セクション}の脚注・補注を書き進める途上で、突如、『思ひ出』のなかから、ジャガイモに関する名文章、が飛び出してきて、これをこの場所で紹介すべきか否か、たいへん迷っているところである。

——そして、迷いに迷った^{あひく}挙句、御紹介申し上げることにした。た^たか^かがジャガイモのことにそんなに騒ぎ立てる必要なんか無いじゃないか、との声も聞こえぬではないが、た^たか^かがジャガイモのことだから、どうしても言及しておかなければならないのである。まさに、若き牧口は、た^たか^かがジャガイモのことに斯んなにも熱心に執着し、当時としては入手困難な数字的データを引用し且ついちいち正誤^{たしか}を^{たしか}検めつつ筆を進めたのではなかったか。斯く牧口が熱心に記述したジャガイモ関係記事に対して敬意を払わざるを得ないわれわれは、もはや、ジャガイモそのものに対して冷淡な態度を採ることが出来なくなってしまった。

——以下に示すジャガイモ関係文献は、アメリカの植物学者・園芸改良家として世界的規模の貢献を成し遂げたルーサー・バーバンクの大著『いかにして植物は人のために働くように訓練されるか』Burbank, Luther: *How plants are trained to work for man*, 8 vols., 1921. からの抄録である。バーバンク（一八四九～一九二六）はマサチューセッツ州ランカスターに生まれ、少年時代から園芸や植物栽培に関心を抱き、特にダーウインの著作に触れて《変種》というものの重要性を学んだ。一八七〇年に種苗業を始め、まもなく、僅かな土地でジャガイモの品種改良に成功をおさめ、これは、たちまち「バーバンクのジャガイモ」として内外に令名を轟かせることとなった。一八七五年には、兄とともにカルフォルニア州サンタ・ローザに移って広大な園芸農場を経営し、世界各地から夥しい数の品種を取り寄せ、品種の有する唯一最優良の形質を選び出して抽出し、交配によって優良形質をもつ品種を合成するという方法で、じつに広域かつ多数の種類^の果樹および農作物の改良をおこなった。理論的にいえばラマルクの唱えた《獲得形質遺伝》（語積を加えると、獲得形質とは、遺伝的要因によって規定されるのではなしに環境要因によって変化を生じた形質をさす）に近似する考え方にバーバンクは立ち、環境を変えることにより植物に変異を起こさせ、人間のがわの思い描く目的に応じた性質のものを選び出すという方法で《品種改良》が為され得るとした。実際の改良にもそのような方法を多く用い、交配技術もまた環境変化の一部に過ぎないと考えていた。カリフォルニア州での五十年間にモモ、サクランボ、プラム、リンゴ、ベリー、クルミ、クリ、トウモロコシ、サボテン、バラ、デージーなど多数の植物改良を成功させ、^の植物の魔法使い、とまで賞讃された。植物学じょうの業績として、前記大著のほかに『植物改良——その方法および発見』Burbank, L.: *Methods and discoveries*, 12 vols., 1914

～15. という別の名著をも刊行している。

さいわい、一九二〇年刊行の八巻大著のほうには、中村為治による翻訳『植物の育成(一)～(八)』(一九五五年二月～一九六二年六月、岩波文庫版)が完成されており、三十数年後に全巻復刻セットも出されている。本稿筆者は、第一巻が訳出されたころ、勉学意欲に燃える大学院院生であり、叙述内容の面白さに魅せられた所為もあり、ひと晩徹夜して一気に三百ページを読み切った《思い出》を持っている。そして、その《思い出》のなかの「バーバンクの馬鈴薯」が、牧口『人生地理学』のなかのジャガイモ関係記事に触接することにより、突如、鮮烈によみがえってきたのである。バーバンクに言わせると、植物にあっても、遠い過去の《思い出》が突如よみがえる場合があり、そういう場合に《改良》や《新種》が齎されることが多いという。ともあれ、その素晴らしいチャプターである「二十三粒の馬鈴薯の種子とその種子の考えたこと—遺伝の影響への瞥見—」をごらん頂こう。

……遺伝は鎌やレーキ以上に植物改良における要因なのである。植物の中における様々な傾向の戦いについての知識は、実に凡ての植物改良の土台なのである。植物改良の仕事が、附随的に、これらの力についての知識をもたらすのだと人は思うかも知れないが、それはそうではない。寧ろ、植物改良を可能とするのは、これらの力についての知識なのである。

つまり、どの個々の生えているものの特徴を変化しまたは制御するためにも、私たちが指図しなければならぬ主なる力は、本当はほんの二つしかないのである。

その第一は環境である。

雨、雪、霧、早魃、暑さ、寒さ、風、昼夜の気温の変化——土地、日蔭であるか日向であるかの位置——食物、光、空気を得ようとする競争——隣人、それが植物の隣人であろうと、動物の隣人であろうと、人間の隣人であろうと——これら凡てのもの、またこれら以外に挙げ得る無数の要因が環境の要素なのである——そのあるものは植物を一方へ引こうとし、他のものは他の方へ引こうとする。だがそのどれも個々の植物に、時には殆ど認められない程であるが、明確な影響を与える。

そしてその第二は遺伝である！

それは最初まで戻る複合した先祖の凡ての環境の総計である。

熊における場合も植物における場合も全く同じなのだ。作り出されるどの種子の中にも先祖の幾百世紀にわたる傾向が貯えられている。種子は全く傾向の束である。

変らぬ環境が長い間続くことによって、これらの傾向にうまく均衡がとれている場合には、子は大方親に似るものである。

だが、環境の変化により、または交配によって、その均衡が破れた場合には、何が飛び出して来るか分ったものではない。

それでこのような種子が播かれた時には、二十世紀の傾向が支配するか、または長い間忘れられていた傾向が突然強く現れて、その特質のある点で、その植物を遠い過去の時代に連れ戻すか、誰にもしかとは分らないのである。

「どうして種子は先祖の傾向を貯えておくことができるのか、」とある人がきいた。

「どうしてあなたの心はその受ける印象を貯えておくことができるのか、」と私たちは答える。

日に日にそこに記録された幾十万の、多分幾百万の印象が、私たち自身の脳髓の褶の中に隠し込まれており、ある適当な条件が適えられると、それがはっきりと呼び起されて来るのだ。

幼い子供の頃に泥棒が来ますよといっておどかされたことが、中年になって私たちを夜の物音に

過度に敏感にするのだ。

母の愛と優しさの拭い消すことの出来ない思い出が、四十年の後に、まさに口から出ようとした荒々しい言葉を押しとどめるのだ。

他の人々との一千の経験の結合した印象が混り合って、私たちがこれから交ろうとする一人の人に対する私たちの判断を形造るのを助けてくれるように見える。

週が廻って月となり、月が溶けて年となり、新しい印象が押し合って古い印象を押し出す。強い印象が弱い印象に取って代り、大きな印象が小さな印象を押しつけてしまう——だが古い印象は無くならずにもいつもある——いつも私たちの判断、私たちの野心、私たちの欲求、私たちの理想の中に混っている——そしていつも、明らかに、条件の適当な結合が起り次第、華々しく私たちの目の前に飛び出そうと待ち構えて待っているのだ。

種子においても、また、その通りである。

その先祖の非常に苦しんだ早魃は、一つの傾向としてその種子の中に記録されている。

その先祖に大豊産をもたらした好条件は、一つの傾向としてその種子の中にある。

あらゆる霜も、あらゆる雨も、あらゆる日の出も、その先祖の系統にその印象を残し、植物から植物へと伝えられる傾向を作る手助けをしたのである。

種子の木のような堅い鞘の覆いの下に、傾向の束が封じ込められているのである——それは無限の束である——そしてそれ以上に生えて来る植物に性格を与えるものはないのである。

一つの傾向は他の傾向よりも多分強いのだ——よい傾向が悪い傾向に勝っていたり——またはその逆だったりするのだ。直接の両親から受けつがれた傾向があり、二十世紀もまたはそれ以上も昔の影響から惹き起される傾向もあるのだ——潜在している傾向は彼らを甦らせる条件の適当な結合のみを待っているのだ。複合した先祖の凡ての傾向——そのあるものは眠らされているが、一つも消えて無くなってはいないのだ。それが一つの種子なのである。

植物の全生涯の歴史はその種子の中に貯えられているのである。

もし私たちが非常に沢山の種子を播くならば、私たちに多少なりと明らかに、私たちの目の前に現された、その植物の生涯の歴史とその変異、その出会った艱難、その進歩と退歩とを読むことができるであろう。

どんな些細なことが経歴を変えるか誰が知っているか。またはどんな不意の出来事が理想を変形させるか誰が知っているか。または、普通のことから生れる、どんな詰らぬことが新しい真理の発見に導くか誰が知っているか。

馬鈴薯の種子の球は取るに足らぬ外観をした果であり、普通の実験的な農夫なら誰でも言うであろうように、全く何の役にも立たぬものである。

馬鈴薯の歴史を遙か昔に遡ると、荒涼たるチリーの山腹で、馬鈴薯はその再生を塊茎にはなくて、殆ど全然その種子によらなければならなかったのだ。それで健康な馬鈴薯は皆非常に沢山の種子の球をつけた。そして現在でも高いアンデス地方や、下のチリーの峡谷や谷間ではその通りなのである。野生の馬鈴薯は最悪の雑草の一つである。但し時によっては可なりより小さな薯をつける。

だが長年の栽培が馬鈴薯から種族保全のために種子を生らす必要を無くした。馬鈴薯は今や切った塊茎から己を再生することに確信をもっており、その繁殖については全く人に頼りたのんでいるので、人が馬鈴薯をこの重荷から解放する前に、その祖先たちが永續のために主として頼りたのんでいた、種子の必要は殆どないのである。

それで普通の馬鈴薯栽培者は、翌年の収穫はただ今年の塊茎によるということだけを知っているので——そして、残念なことには、それを改良しようというよりも、一定の収量を確保しようとして考えているので——時たま種子の球が生るのを見てもその意味を知らず——またはその可能性を

はっきりと^き覚りもしないのだ。

.....

一八七二年の五月に、この小さなニュー イングランドの町で、私は手に一つの種子をもっていた。それは十粒合しても普通のピンの頭ほどもない小さなものであった。この小さな種子から「バーバンク」馬鈴薯が生れ出たのだ。過去四十九年間に六億ブッシェル以上のこの薯が作られた。それは一ぱい詰った馬鈴薯列車が一万四千五百マイル、言いかえれば地球のまわりに半分以上続くに充分な量である。

ここに特記するべき興味あることは、この種子の球から二十三種の新しい馬鈴薯が作り出されたということである。

これら二十三種の馬鈴薯は銘々異った個々の特徴を備えていた。それは長い間忘れられていた遺伝と数多くの自然の交配とに対する各自の解釈によるのである。

その一つは美しい長い紅馬鈴薯であったが、掘り出すと殆ど直ちに腐ってしまった。他の一つは紅皮で白い眼をしていた。他の一つは白くて紅い眼をしていた。二つの白馬鈴薯と他の幾つかのものとは、とても深い眼をしていた。それでそれらのものは実用に不向きであった。そして二十三種全部がどれもこれも皆ひどく異っていた。

これら二十三の変種は、実際、馬鈴薯族の歴史における二十三の異った段階を代表していたのかも知れない。そして彼らに均衡を保たせる現代の環境を欠いていたので、どれもこれも今まで栽培されていたどの馬鈴薯とも多かれ少なかれ異っていたのだ。

だがその中に他のものより優れた一つの変種があった——それはまた今までであったどの馬鈴薯よりも優れたものであった。この変種が東部マサチューセッツ州の有名な種子商ジェー・ジェー・エッチ・グレゴリー氏によって「バーバンク」と命名された。

同じ労力で——いや実により少い労力で——彼自身の生活を支えるために馬鈴薯を作る開拓者も、また商業的基礎の上でその作物を作っている馬鈴薯専門家も、今やその生産高を大いに著しく増すことが出来るようになったのだ。

そして世界のどの他の食用作物の生産量よりも馬鈴薯の生産量が一番多い今日、ただ一年の収穫においてなされる増収は——それに相応する何等の投下資本の増大または生産費の増大なしに得られる増収は——幾百万ドルという驚くべき金高にのぼるのである。

多分この国の歴史の中で一番好都合な時期にバーバンク馬鈴薯は世に現れたのである。

それはシカゴが遙か西方の都市であり、その先の大地域は開拓者の家郷であった時代であった。

馬鈴薯は特別に開拓者のために工夫された野菜である。

馬鈴薯は植えるにも収穫するにも別に準備はいらない。それは開拓者によって起された肥沃な新しい土壤に急速に育つ。栽培に僅か手をかければ必ず成長する。薯が出来ればそのまま地面に入れておいて、必要な時用いることが出来る。霜が下りるようになれば、たやすく穴の中にいけて冬用にされる。

世話のいらぬこと、費用のかからぬこと、たやすく料理して食用に供されること、これらのことが馬鈴薯を、開拓者がその新しい家に落ちついた時に、先ず第一に作る作物の一つとする。

さてこの一つの成功が成長する合衆国に及ぼした影響を跡づけて見よ。それは一八七二年であった。それは成功と失敗との間の線が——饑餓と気楽な豊富さとの間の線が——開拓者にとって実に見事に引かれた時であった。それで極く僅かの助けでさえもその本来の値打ちに釣合わぬほどの価値をもったのである。

.....

その馬鈴薯の与えた最大の値打ちは——その成し遂げた最大の奉仕は、世間に改良された植物の

値打ちを知らせるのに役立つということである。その改良された馬鈴薯は、何一つ余計な費用はかけずに、その収量を増すことが出来たのである。

馬鈴薯の眼を植えて見よ、そうすればあなたはその親に似た馬鈴薯を得る——その育った現在の環境に従って少しくよくなったり悪くなったりして。

だが馬鈴薯の種子を播いて見よ、そうすればあなたは遺伝の鉱山を叩くのだ。その不確かさにおいても無限であるが、またその可能性においても無限であるのだ。

過去二十五年間において私はパーバンク馬鈴薯に劣らぬほどの値打ちのあるものであるという約束を与える百種かそれ以上の新植物を作り出して世に紹介した——その大部分は既にそうであることを証明した——但しまだパーバンク馬鈴薯ほどに広く知られ作られてはいないが。そしてまた私はまだ世に紹介しないこれらに劣らぬほどの極めて貴重な数百種の新植物をも持っているのである。遺伝は最初まで遡る無限に複合した先祖の凡ての環境の総計である。

（傍点は岩波文庫本に拠る。傍線個処は、引用者に拠る）

——傍線を付したパラグラフ（もしくは、センテンス）は、このままで、牧口教育学理論と重なり合い且つ呼応し合う重要命題を提示しているとおもう。教育とジャガイモとを一緒くたにするなぞ怪しからんと言って憤慨する向きには、牧口『創価教育学体系・第一巻』第一編教育学組織論、第四章教育学の研究法のなかの「第二節 教育学研究の対象と其の考察」というセクションを繙いてくださるようお願いしたい。牧口は、すべての教育事実を科学的に研究しなければならないとする立場から「教育の対象の考察の手續を詳説し、真理探究の一般過程を分析すれば左の如くなるであらう。」（初版本八一～八三ページ、第三文明社版『牧口常三郎全集・第五巻』七二～七三ページ参看）とテーゼ四箇条を提示してみせる。「(一) 生活の学問化——特殊事実よりの帰納的研究。」「(二) 学問の生活化——演繹的考察即ち、概念の特殊的還元——即ち法則の実験的証明——総合的研究。」「(三) 進化論的考察——以上によつて確認された真理を、古来より発達変遷した過程の、歴史的考察をして、その点よりその妥当性を論証すること。」「(四) 真理の批判的考察——目的観念より観たる真理の判断。それが果して生活上に何程の価値を有するかを批判し、更に確實性の自信を確めること。」——そして、この四つの「順序過程はすべての真理の探究に欠くべからざるもので、この過程を経ることによつて初めて、真理の確實性が得られるのである。そしてこれ丈けの手續を経て、確定した真理ならば、それまでの過程に於ては、最早それ以上何人も疑深く、其の真理を承認することに躊躇逡巡すべきでないと思ふ」と述べる。簡潔に要約すれば、真理探究の方法およびプロセスには①帰納法、②演繹法、③進化論的考察、④批判主義（もちろん、カント的意味での「批判主義」Kritizismus、すなわち書物や学説の是非を判定することではなく、経験から独立に成立する認識に関して「理性の認識能力を明らかにすること、を以て批判 Kritik と考える立場をさす）的考察という四つの手續が枢要不可欠であり、この四つの手續をきちんと履んで獲得した真理であるならば必要以上の疑いや逡巡は却って無用となる、と牧口は述べるのである。そして、そのさいに、殊更に『進化論』evolution theory ; transformisme 的な思考方式の必要性を強調したことは、昭和年代に入ってから進化論者の立場の危うさ（じっさいに、生物進化論や社会進化理論を唱える学者は、過激な右翼国粹主義者か

ら攻撃の標的に据えられ、山本宣治暗殺事件のような極端な出来事も起こっていた)を考慮に入れる場合、それ相応に、身を張った(といおうか、兎も角も勇気の要る選択であった)学問的主張をおこなったものと見るべきである。そういうとき、牧口が若年時に手がけた植物学上の探究と、その探究をとおして習得し畢せていた生物進化論的知見=素養が、大いに論拠(つまり、該主張を一貫して支える理論的根拠をさす)を為しており、自分のほうが正しいのだから如何なる政治的抑圧ないし妨害にも屈服などさせられて堪るかとの理性的気概に満ちていたろう、というふうに推測させる。結局、牧口教育理論の科学的根拠を構成する四本柱のうちの第三の柱をなす「進化論的考察」とは「古来より発達変遷した過程の、歴史的考察」をおこなうことを意味しているものであり、ラマルク Lamarck, Jean Baptiste Pierre Antoine de Monet (1744 ~ 1829) の《獲得形質》caractère aquis の理論を採用するにせよ、ダーウィン Darwin, Charles (1809 ~ 1882) の《自然淘汰》natural selection の理論を採用するにせよ、スペンサー Spencer, Herbert (1820 ~ 1903) の《最適者生存》survival of fittest の理論を採用するにせよ、基本文脈に生物学、植物学、動物学、そして育種学(栽培植物や飼育動物を品種改良するための技術や理論を体系化しようとする応用科学をいう)を据えている点で、人間みずからの努力や改良を合理的=科学的に押し進めることをめざす「創価教育学」とは必ず一致点=協約点を見出すはずであった。本補注が、バーバンク『植物の育成』ちゅうの環境・遺伝・品種改良に関する記事を、敢てながながと紹介したゆえんである。

26 テーン(九一ページ、注14) テインは、茶の葉・コーヒーの実や葉・カカオの種子などに含まれるアルカロイドの一種で、一般にはカフェインの術語のほうを多用する。無色無臭の白色針状結晶をなし、これを少量用いる場合には神経中枢を興奮させるが多量用いる場合には麻痺させるので、医薬目的をそれぞれ考えて強心剤・利尿剤・興奮剤として使用する。いま、『岩波理化学辞典・第4版』(一九八七年十月刊)の「カフェイン」の項目をひらくと、斯う見える。

カフェイン [英 caffein 仏 caféine 独 Koffein 露 кофеин] $C_8H_{10}N_4O_2$ テインともいい、1,3,7-トリメチルキサンチンにあたる。コーヒー豆、カカオの種子、チャの葉などの中に含まれるアルカロイドで、構造上プリンアルカロイドに属する。無水物の融点 236℃、ふつうのものは一水和物で、絹糸光沢のある結晶。冷水、アルコールにわずかに溶け、苦味がある。興奮剤、利尿剤、強心剤として医薬とする。チャの葉を熱湯で浸出し、塩基性酢酸鉛を加えてタンパク質、タンニンなどを沈澱させ、過剰の鉛を硫酸で除去し、その濾液からクロロホルムで抽出、蒸発結晶させて得る。合成はジメチル尿素とマロン酸からトリメチル尿酸をつくり、これを五塩化リンで処理し、ヨウ化水素で還元する。キサンチン、テオプロミンなどのメチル化によってもカフェインを生ずる。

ついでだから、『岩波生物学辞典・第3版』(一九八三年三月刊)の同一項目を抄出しておくことにする。――

カフェイン [英 caffeine] $C_8H_{10}O_2N_4 \cdot H_2O$ アルカロイドの一種。茶素、テイン (theine)、ガラニン (guaranine) などともいう。融点 $238^{\circ}C$ 、 $178^{\circ}C$ で昇華。水に溶けて苦味を呈する。プリン誘導体に共通なムレキシド反応を呈する。コーヒーの種子・コーラの果実・カカオの種子・茶の葉などに存在する。中枢神経系に対する興奮作用、利尿などの作用を生ずる。また心筋に対する興奮作用や、平滑筋とくに気管支・冠状血管に対する抑制 (弛緩) 作用もある。環状 AMP を加水分解する環状燐酸ジエステラーゼの阻害がその作用の一部と考えられている。

斯く同一項目を執筆しても、化学者の記述と生物学者の記述との間にはすこしずつ差異が生ずる。そして、このすこしの差異をも^み見逃さないようにすることの出来る感受性と思考力とを身に着けるのが《教養》ないし《教育》というものの^{いさおし}功業である。

27 タンニン (九二ページ、注 15) ひろく植物界に存在 = 分布し、なかんずく五倍子 (ふし)・櫨 (かしわ) 樹皮・柿渋・茶の葉に多く含まれる物質。いわゆる「渋」の成分で、水に可溶、収斂性の味がある。加水分解すればタンニン酸とぶどう糖とを生ずる。鞣皮剤、インク製造、媒染剤、医薬に使用される。漢字表記では「单寧」と書かれ、また、時として「タンニン酸 tannic acid」と同義に用いられる。前項 (補注 26) と同じく、『岩波理化学辞典・第 4 版』に掲載された必要見出しを、三つほど引用しておくことにする。――

タンニン [英 tannine, tannin 仏 tanin, tannin 独 Tannin, Gerbstoff 露 таннин, дубильное вещество] 植物界に広く存在する物質で、加水分解によって主として没食子酸などの多価フェノール酸を生ずる混合物の総称。収斂作用をもつ。ふつうのタンニン、すなわち没食子や五倍子から得たものは、加水分解により没食子酸のほか少量のグルコースを生ずる。ほとんど無色の無定形物質で、水に溶けやすく、水溶液は酸性を示し、鉄 (Ⅲ) 塩によって黒色の沈澱を生ずる。この性質を応用してインキをつくる。タンニンはタンパク質、ゼラチンを水に溶けない物質に変えるので、なめし剤としても、また媒染剤、医薬としても用いる。

タンニン酸 [英 tannic acid 仏 acid tannique 独 Gerbsäure 露 дубильная кислота] $C_{14}H_{10}O_9$ 没食子酸のデプシド*で、m-ガロイル没食子酸ともいう。ふつうのものは二水和物の結晶。融点 $268^{\circ}C$ (分解)。苦味をもち、コロイド溶液を沈澱させるなど、性質はタンニンに似ている。タンニンの加水分解で生ずる。

デプシド [depside] 数個のフェノール酸が、一方のカルボキシル基と他方の水酸基とでエステル結合をした化合物の総称。構成するフェノール酸分子の数により、ジデプシド、トリデプシドなどという。E・フィッシャーが与えた名称。地衣酸およびその誘導体に例が多く、タンニン酸もデプシドである。

28 本邦に於ける重要輸出品の一にして、全国に於ける産額八百五十万貫目に達し、其輸出額は八百万円に上れり。其販路の主要なる北米合衆国及び加奈陀地方なり。(九二ページ、注 16)

まず、あとのほうのセンテンス「其販路の主要なる北米合衆国及び加奈陀地方なり」は、丁寧な言い方としては当然「主要なる^は」とすべきであろうし、またそのほうがわかり易いが、主語 (ないし主題提示) を殊更に強調しようとするときに「は」を省略する表現修辭法は所謂「美文

調、華やかなりし時代（さしあたっては、明治前期・中期の時代をさすが）にはごく普通に用いられたものだった。なんであれ、このセンテンスを誤法や誤植と解さないよう、茲でも《原文尊重》という読者の誠実性に悖らぬよう、自戒したい。

さて、本注（脚注）に触れた『人生地理学』第十三章海洋、第一節現勢に於ける海洋、のなかの「茶の輸出、に関する記述を、再確認しておこう。牧口がこのパラグラフで主張したかったことは、近代国家成立の基本条件をとことん凝縮＝集約してしまうと国家^{イクオール}即貿易団体というに帰着する、という、アダム・スミス流の自由主義経済理論および平和主義文化理論の提示である。そして、その^{パラダイム}paradigmの中で「日本茶輸出」の客観事実の持つ意味が正しく且つ鋭く把握されているのである。牧口の言に聞け。――

……此時勢に当り、世界列国と対峙して国するもの、自主と云ひ、独立と云ふも、是れ唯々政治上に於てのみ、経済上に於ては等しく此の大市場の隅々に羅班し、互ひに相ひ協力するによりて全軀の生活が進捗せらるべき一部の職能を分担し、其分業の産物を販売する店舗たるに過ぎざるに至りぬ。夫の経済学者が「国」なる語に代ふるに「通商団体」なる術語を用ふるも、畢竟此意味を表はさんとするもの。此点に於て文明国と云ひ、未開国と云ふ、単に上級の製造品を販売すると、下級の粗製品を販売するとの差のみ、行商と居商との別のみ。されば我大日本帝国の如きも此経済上の大市場に於ては、僅に太平洋通り北二十一条より五十一条に、東百二十丁目より百五十六丁目に跨る、二万七千余坪の凸凹多き細長き場所に、見すほらしき商店を構へたる、而して端坐店頭の火鉢を守り、呑気に煙草を薫らして来客を待つ、四千万の番頭を有する桜印の濃簾下げたる生糸屋、御茶屋兼雑貨商店たるに過ぎずなれり。然り而して海洋は実に此の市場に於ける至便の通路たり、唯一の公道たり、世界の大市場も畢竟此通路の開通によりて生ぜしなり。

（初版本、二七四～六ページ。／本全集第一巻、二一八～九ページ）

29 茶は元来湿润にして温暖なる地方に適する植物にして、亜細亜の東部及南部にのみ繁茂す。清国、印度のアッサム、セイロン及び我邦は世界に於ける最も主要なる産地なり。（九二ページ、注17）

茶はツバキ科の常緑樹。学名 *Thea sinensis* L. でもわかるとおり、もともと中国西南部山岳地帯のうち霧の多いところを自生地とした植物がヨーロッパに伝えられ、特に十七世紀以降オランダ人およびイギリス人によってヨーロッパじゅうに広められ、現在にあっても、紅茶といえどイギリス製のものが世界一と目されるようになっているけれど、これとて、その生育地（＝生産地）ないし栽培地・加工地は南アジアおよび東南アジアに限られているから、そこで、われわれとしてはあまり《一般化》を急ぐべきではないとおもう。むしろ《個別》や《具体》を尊重すべきだとおもう。それほどに「茶の歴史」は遙か遠古の時代から始まって、連綿として長大極まるプロセスを繰り返し、エレクトロニクス時代の今日にまで及ぶのである。

そこで、まず、原産地の中国における「茶の歴史」を概観しておかなければならないが、ほんとうは、その《始まり》beginning からして、あまりにも茫洋としており、容易には認知しがたいのである。いくつかの神話的・伝説的説き明かしが昔から今に伝えられているが、それらひとつひとつに目配りを加えてゆかねばならないとしたならば、それこそ^{めくら}きりも^はて^も無いことにな

ってしまう。現代のわれわれが考えてこれならばあまり非合理でなかろうと考えて受容可能なる起源説を採用するとすれば、だいたい西暦紀元前一世紀ぐらいから紀元ゼロ年前後にかけての時期に(すなわち、前漢の時代に)四川省で生産され商品化された茶が中国全土(といっても、漢の帝国の勢力が及んだ範囲という意味にとどまるが)が普及するようになり、煎じ薬として病者の治療に用いる段階から始まって次第に嗜好品として味覚的な楽しみを複数人間のあいだで分かち合う段階へと進んでいった、というふうに摘要して以て満足すべきか。

名著『年表・茶の世界史』(一九八五年九月、八坂書房刊)の著者松崎芳郎は丹念綿密に中国文献を調べ上げてゆき、われわれに納得を与える明快^{このうえ}此上なき好記事を示す。やや長文に亘るが、^{あえ}敢て引用に踏み切りたい。――

1 漢代

漢代以前の伝説

喫茶の風習は中国に始まる。すでに漢の時代には喫茶の風習が行なわれていたことは、ほぼ間違いない。しかしそれ以前のいつの頃から喫茶が始まったのか、については確証することが難しい。後年著わされた諸文献からの推測にとどまらざるを得ないのである。

ここに喫茶の始まりと考えられる記事をいくつか紹介しよう。

「茶の飲たるは神農氏に発し、魯の周公(紀元前七五三年に没す)に聞こゆ」。これは唐の時代(六一八年～九〇六年)に陸羽の著わした『茶経』の一説である。

神農は、漢代(紀元前二〇二年～紀元前二〇〇年)の班固の『白虎通義』によれば、古代狩猟採集時代に、人びとに農耕を教えたので、この名があるといわれる。紀元前三四〇〇年頃にいたとされる伝説上の人物で、茶を発見し、且つ利用した最初の人として引き合いに出される人物でもある。かれは、百草(数多くの草)を嘗めて、一日に七十二の毒に遭ったが、茶によって解毒したと伝えられる。

『茶経』によれば、神農は『食経』を著わし、そのなかで「茶茗久しく服すれば、人をして力あらしめ志を悦ばしむ」と記載したという。ただし『食経』は今に伝わっていない。

伝説上の神農氏について、実在していた人物で喫茶ということをもっと早く知ったのは、『爾雅』の著者、周公旦と、『晏子春秋』の著者、晏嬰の二人とされている。それは『爾雅』に「檟は苦茶なり」、『晏子春秋』に「齊の景公は茗葉を用う」と何れも茶に関することを記しているのを根拠とするからである。

ところがこの『爾雅』と『晏子春秋』の両書ともその成立に不確実な点の多い書物なのである。『爾雅』の著者、周公は紀元前一一一五年に没したとされているが、この書物は、そのはるか後、秦漢時代(紀元前二二一年～紀元二〇〇年)又は、後漢のはじめ(紀元三〇年頃)の著作で、旧文を綴り合わせて作られたと考証されている。『晏子春秋』も晏嬰の著ではなく、後世の人が書いたものとされ、実際には著作年代も不詳なのである。ただ晏嬰は、紀元前五三〇年頃、齊の国の宰相であったことは明らかになっている。

こういうわけで、喫茶の起源を求める資料としては、この辺りまでは、まだ伝説の域を出ていないようである。

.....

「茶」は「茶」か

ところで、これまでに出てきた漢代以前の文献『食経』や『爾雅』など、すべて「茶」という文字は使用されて居らず、茶と思われる文字「荼」が使われている。「荼」は「茶」であろうかという

疑問が残る。

実はこのことは、古くから問題になっているのである。そこで、このあとにも出てくる文献のこともあつし、喫茶の起源を探る上で避けて通れないことでもあろうと思うので、ここに主な諸説を紹介して、判断の材料としておきたい。

このことについては、「茶」は「荼」に非ずとする否定説、茶であるという肯定説、その中間説の三通りの説がある。

先ず否定説としては、『爾雅』の積草篇に「荼は苦菜」なりという。宋の邢昺^{ケイヘイ}はこれを『爾雅疏』で、「苦菜とは味甘く、食すべき菜」と解説している。明の李時珍は、その著『本草綱目』で「茄^カでるべき草木」の菜の中に分類し、「積名は茶、音は塗（ト）」として、挿絵を入れている。牧野富太郎の『日本植物図鑑』によって照合してみると、その挿絵は和名の「ノゲシ」である。

.....

いまこうした諸説を併せ考えると、にわかには判断はし難いが『爾雅』が漢末にできたとされるので、当時、積木篇と積草篇の両方に「荼」を入れているところを見ると、陳椽説のごとく、茶は木本と草本の二種の植物名をあらわし、木本の植物とするときは、茶をあらわしたものと考えられなくもない。陸羽の『茶経』では、「茶」もすべて「荼」として使用している。このため陸羽を「茶」字の創始者と想定し、明の楊慎のように『茶経』以後に「荼」は「茶」の意味になったとするものもある。なお『唐韻』も同様な見解をとっている。

ちなみに茶の原音はト(塗)のようで、漢時代にはタ(定加の反)と発音したらしく、唐の顔師古は「丈加の反」として、チャに近い発音だとしている。

漢代の喫茶

さてこれまでのところ、まだ喫茶の風習があつたことを確証するには至っていない。信憑性の高い文献が見当らなかつたからである。それが『僮約』という書物が著わされたことで、ようやく漢時代に喫茶があつたと、ほぼ推測されることになる。

『僮約』は紀元前五九年(神爵三年)に、王褒が著わした。著者王褒は、前漢時代(紀元前二〇二年～紀元八年)四川省資中の一学生であつた。成都(四川省)で行なわれる試験を受けるため、楊家に寄宿していた時、楊家で王褒に専用の家僕を売ってくれた。そこで取り交わした雇傭契約書をもとに著わしたのが『僮約』とされる。

この中には、毎日従事すべき労役の規定をしるしてあるが、茶について「武陽茶を買う」「烹茶、具を尽くす」の字句がある。武陽はいまの四川省彭山県にあり、漢代では同地方の政治、経済、文化の中心都市であつた。ちなみにその附近を流れる岷江^{ミン}の兩岸は今日でも茶の産地である。「武陽茶を買う」とは武陽から茶を買うことを規定し、「烹茶、具を尽くす」とは、茶を煮たり、盛ったりする器具を洗滌したり、整理することを定めたことである。

このわずかではあるが、茶についての記事によって、喫茶の風習はもとより、四川省には茶を生産し、武陽では茶が商品となつてゐたこと、また労働者を雇傭する立場にある者は、茶具などを取り揃えていたなどの事が推察される。『四川通志』でも漢の時、蒙山に茶を植えたという記録があるから、この頃四川に茶の生産があつたことは、先ず考えられる。

2 三国時代

漢代は前記の『僮約』でもうかがわれる通り、地方には豪族が栄え、かれらは奴婢などを公然と売買してきた。しかしやがてこれら豪族に対し、黄巾の賊など農民の大規模な反乱が起こるなかで、軍閥として台頭したものが天下を三分して魏、呉、蜀の三国鼎立の時となる。

茶についての記事を文献から求めると、『三国志』に呉の韋曜(二〇四年～二七三年)が、呉王孫皓^{ソウ}から茶を賜つたとある。『三国志』は、陳寿(二三三年～二九七年)の選述するところで、著者

現存時代のことを含んで記述していることを考えると、信憑度の高い書物である。

ところで呉王の居た都は、建業、すなわち今の江蘇省南京である。茶はここまで流通していたのであろうか。考えてみると、茶の産地四川省の成都の近く岷江を経て揚子江を下れば、一路南京に達することがわかる。したがって産地からの茶は揚子江を下って都に運ばれたと思われる。だがそれは製品としての茶であってこの都の附近で生産されていたものが帝王の手に入ったかどうかは明らかではない。『続搜神記』に、晋の武帝（在位二六五年～二八九年）の時に「宣城の人、山に入って茗を採る」とある。宣城はいまの安徽省である。安徽省で山に茶を生じていたとすると、これに隣接する江蘇省に茶が生じていたのではないかとする説（陳椽の説）も無視することはできない。揚子江は茶の伝播にきわめて重要な役割をもっていたという考えに立っているのである。

3 晋代

三国の魏に仕えていた司馬氏が、軍事、内政面で功績をあげ、三国の一つ蜀を滅ぼして魏帝から禪譲をうけて晋王朝を建て（二六五年）、さらに呉を滅ぼして天下を統一したのは、二八〇年である。このころ漢族の大規模な南進があり、水稲作農業が江南地帯に新経済圏を形成しつつあった。

この時代、文献によれば、茶の産地の拡がりや茶の利用法、貢茶のこと、仏教との関係などを推測するに足る内容をもっている、いくつか見逃せない記事を拾うことができる。

二九三年、大司馬（大將軍）の孫楚が没しているが、かれは「薑、桂、茶、菴は巴蜀（四川省）に出ず」といっているから、茶の産地は、なお四川省であることがわかるが、三二二年、元帝の時に「宣城、毎年貢茶多し」という記事があり、安徽省の宣城は、すでに茶の生産地というばかりでなく、天子に貢進するような貢茶が製造された事実がしられる。

また二九四年に没した司隸校尉（警視總監のような役）傅咸は、その教布書で「茶粥」という語を使用している。これは明の陸樹声の『茶寮記』に「晋宋以降、呉人葉（茶葉）を採り、之を煮て茗粥という」とあるのが、これに当るものと思われる。茶葉をよく煮て、これを食べる茶としたことを想像させるものである。いま中国西北辺境の遊牧民がこれに似た飲み方をしている。

また三四六年に、禪僧單道開が禪室を造り、茶を飲んで睡眠を防いだとある。この二十年後に敦煌の千仏洞が初めて開かれている通り、この頃仏教が普及しているから、仏僧が茶を利用したことも考えられる。

4 南北朝時代

晋は四二〇年、劉裕に国を譲って、揚子江以南の地に宋朝が建てられ、一方華北は、五胡十六国に分裂していたのを四三九年、魏の太武帝が統一し、南北朝対立の時代を迎える。

北朝は、君主権を強化して強力な支配構造を確立し、南朝は三国時代に呉や東晋王朝が江南を本拠地としていた関係上、江南の開発を進め、華北の畑作に対抗し、稲作農業経済が発達しつつあった。

このころの茶の生産について、『呉興記』は「浙江烏程（いまの呉興県）以西二十里、温山あり。産する所の茶、専ら進貢の用に作る」と記している。してみると、安徽、江蘇から揚子江を更に下って、浙江省に茶の生産が拡まってきたと思える。このころ興隆してきた仏教寺院の勢力、経済力を強めてきた南朝の官僚や大地主の手によって、茶の生産も開発が進んだのではなかろうか。

しかしまだ揚子江以北の北朝の地では、喫茶の風は拡まっていなかったようで、北方出身の遊牧民の王公貴族は、乳やバターを日常の飲料としていて、茶を飲むものは貧しい階層の人のすることとしていたと『洛陽伽藍記』にしるしている。

これまでのところでは、茶の製造方法や飲み方について、具体的にしるした文献は無かったが、このころに著わされた『広雅』によってはじめて明らかにされる。

『広雅』は、四七七年北魏の博士になった張揖が著わした。それによれば「荆巴の間（四川省から湖北省にかけての地）、葉を採りて餅を作る。葉老いたるものは、餅に米膏（米油）を以てして粘り

を出す。煮て飲まんと欲すれば、先ず炙^{アブ}って赤色ならしめ、搗^{トウツ}末して瓷器の中に置き、湯をもって澆^{ソウ}いで之を覆う。葱、薑、橘子を用いて之にあしらう。その飲は酒を醒まし、人をして眠らざらしむ」と。これによれば、茶の産地は揚子江に沿って湖北省にも拡がったと推定されるが、何よりも茶の製造法、喫茶方法についてのべられていることに注目したい。茶の製法は、先ず茶葉を摘み、これを蒸し、圧力を加えながらよく揉んで、葉汁を表面に出し、揉まれた葉とともに練りかためて餅状とし、乾燥させる方法で、出来上がったものは、いまわれわれの使う茶とは異なり固形の茶であった。この場合最初に茶葉を蒸すとは記載していないが、茶葉を放置しておく、酸化酵素のはたらきで発酵し、紅変してくるため、蒸すか、強火で炒って酵素を殺す、中国でいうところの殺青過程が必要であるため、ここではそれを蒸すと解釈した。したがって、強火で葉を炒ったと解釈することもできるので、このことは後考を俟たなければならない。仕上がった固形の茶、餅を炙^{アブ}って、搗き碎いて、磁製の器に入れ、湯を注いで飲んだ。場合によっては、葱、生姜、蜜柑などを之に加えたという。

5 隋代

北周の宣帝が没して、左大丞相の楊堅が譲りを受け、文帝として隋を建国し、南北に分れていた中国を統一したのは五八一年である。

文帝は茶を愛飲した。このため多くの野心家たちは、盛んに茶を飲んで帝に迎合し、このことがまた、一般社会に喫茶の流行を齎したとも伝えられている。

文帝の皇城は黄河沿いの長安にある。隋は質実剛健の風がつよく、武力は充実し、一方で農業も奨励したので、経済力を強めていた。わずか三十七年の王朝であったが、その間に首都長安をはじめ、洛陽、南京、杭州、成都などの都市が発達し、これに伴って大運河の開削など道路交通も整備された。茶の流通を考えると、四川省を起点としたとすれば、ここから陝西省へ通じる古来からの川陝大道によって北上し、長安に達するコースによって茶が運ばれたのでなかろうか。製品のみでなく、陝西省南部は秦嶺山脈が寒気の流入を防ぎ、気候が比較的温和で茶の生育に適しているので、茶樹も陝南地方に移入されたのではないかと考えても、不自然ではないかもしれない。

6 唐代

喫茶風習の固定化

隋は短い治世ながら、秦漢時代のような中央集権国家を再現したが、煬帝^{ヨウテイ}の大運河開削など大規模な土木事業などにより、経済が破綻し、之に代って、唐が天下を統一して律令体制をしいたのは、六一八年である。唐は武道を奨励する一方で、農業を重視したこともあって、茶の生産は飛躍的に向上した。さらに太平無事の時期には、学問芸術も盛んになり、かれら文人、学者によって喫茶の風習は、より普及し、茶は文化、経済的に重要な役割を果たす。

この時代には、揚子江流域地方から進行してきた茶樹栽培の拡まりと呼応するかのよう、首都長安を始めとする華北の都市には、隋の文帝以来流行のきざしを見せた喫茶の風習も定着してきたのか、茶の店舗も出現した。

その頃書かれた封演の『封氏聞見記』によれば、唐王朝成立後約一〇〇年、開元の年（七一三年～七四一年）には、山東、河北両省の地区から、首都長安（今の西安）にかけて、「城市多く店舗を開き、茶を煎じて之を売る。道^{ドウ}（僧）俗^{ソク}（庶民）を問わず、銭を投じて飲をとる。その茶は江淮（江蘇、安徽両省の地域）より来たり、舟車相継ぎ、到る処に山積し、その種類、金額甚だ多し」と伝えている。山東、河北というから、今の北京、洛陽を含む地域から、長安にかけて、黄河北岸地帯の都市に、喫茶が浸透してきたことがわかる。さらに同じく開元の年、安祿山が謀反し、張巡、許遠が河南の睢陽に籠城したとき、樹皮、紙布を切ってこれを煮て、茶汁を加えて食い、なお意気旺盛であった（『資治通鑑』）というから、茶は軍糧としても利用されていたと思われる。

茶の需要はさらに東北進し、朝鮮半島にも及んでいる。「新羅善徳女王（在位六三二年～六四六年）

のころ茶の初伝あり」と、『三国史記』は伝えている。また別の方面では、回紇^{カイコフ}が入朝したとき「馬を以て茶に易う」と『茶経』に記している通り、西域新疆省方面に茶の需要があったことがわかる。.....

茶書の登場、『茶経』

茶の生産、消費の拡大が進行しつつあるとき、茶生産地湖北省の人、陸羽が『茶経』を著わして、茶について始めて科学的な観察を試みた。かれはこの書によって、それまで断片的に伝えられていたであろう茶に関する情報を系統づけ、集大成した。この書は、当時のもとより、現在にいたるまで幅広い読者を得、聖書的存在ともなって高い評価を受けている。この著によって陸羽は後世茶神と称されている。.....

『茶経』は、上元のころ茗溪^{チヨウケイ}にいたとき書かれたというが、その巻中、風炉の条に「聖唐、胡を滅ぼし明年鑄す」と風炉の脚に銘したことが記されているから、胡（安祿山の同類）が絶滅され、唐中興の成った翌年、七六四年（広徳二年）以降に成立したことは明らかである。

この書は三巻十項から成っており、その内容は次に示す各項の要約によってほぼ知ることができる。すなわち、上巻「一の源」の項では、茶樹の性状、茶葉の品質と土壌との関係について述べ、「二の具」で、茶の製造用具。「三の造」で、茶の種類と摘採方法。中巻「四の器」では、喫茶器具や各種茶具の使用法、それに茶具の茶品質に及ぼす影響をのべ、下巻「五の煮」では茶のいれ方の技術。「六の飲」では喫茶の起源やその応用の知識、「七の事」は唐朝以前の喫茶に関する記事や薬方。「八の出」は唐朝の茶の産地と、それら品質の比較分析。「九の器」は全書の要約、補遺、「十の図」は茶席の掛け物などについて述べている。

とくに八の出の項によれば、これまでにわかっている生産地のほかに、更に広東、貴州、福建の各省が加わっていることが知られる。広東、福建へは南京から陸路経由で移入したか、或は南北朝の頃、すでに海上交通が発達し、広東は貿易港として栄えていたから、揚子江下流から海路、広東、福建へ移り茶区を形成したのではないとも考えられている。貴州は四川から揚子江を下り、重慶附近で支流の黔江^{ケンコウ}へ入り、南下して婺州^ムを経て貴州に達し、茶区を形成したと推測され、また別に雲南省から隣接する貴州に通じる陸路も考えられている。雲南省は現在でも野生の大茶樹が少なからずあり、茶樹原産地に擬せられている点からすればこれも考えられないコースではないであろう。こうして唐代に於ては、現在の産茶地域と殆ど変らない生産地を形成していたようである。

茶の産業化

『茶経』が著わされた以後、急に茶に関する専門書が引き続き刊行された。例えば張又新の『煎茶水記』、温庭筠^{オンテイケン}の『采茶録』、蘇虞の『十六湯品』などがそれで、これらは偶然というより『茶経』によって刺激されたと見られ、『茶経』の影響力の大きさを示すものと受けとれるかもしれない。.....

茶の製法と飲み方

このころ、茶とその利用方法はどの様であったかについては、一般庶民の間に用いられた茶については知るべき文献に乏しいので、明らかにすることは困難である。おそらく南北朝時代の『広雅』の記述にあるような、簡単な製法による餅茶^{ヘイチャ}を砕いて粉末として飲んだのではなかろうか。貴顕紳士の間には用いられたものは、『茶経』が最も詳細に記述しているので、それをもとにして順序だててみよう。

先ず茶の芽葉を摘み、これを竹製の負籠^{カゴ}に入れ、山から持ち帰って蒸す。それには予め、竈^{カマド}に釜をかけ、甌^{コンキ}を置いておく。蒸したところを甌から取り出して、熱いうちに臼で搗き、芽、葉の区別ないまで碎き、茶汁を浸出させ、これに米糊などを混ぜる。次いで鉄製の型に入れて打ち込み、

籠の上に拵げて乾燥させる。これを団茶という。ここまでは『広雅』にいう餅と同じ工程だから、団茶は餅茶ともいったと思われる。

更に団茶を一つ一つ錐で孔をあけ、竹に通して内部まで乾燥させるため、焙炉にかける。これを竹縄又は、藁で孔を通してまとめ、一串とする。一串ごとに若葉か笹で包み、更に外側を紅や黄色の絹糸でしばり、封をして出来あがる。

団茶は茶団、鳳餅とも呼ばれた。できあがったものは、型によって球体、平円盤状、あるいは立方体、五弁、六弁の花形などもあり、またその表面に竜腦（樟腦）や珍菓、香草の類を加え、膏を塗ったものもあった。この団茶は「葉のように」高価なもので、庶民の容易に手に入るものではなかった。

次にこの飲み方、入れ方（煎出方法）について述べよう。まず団茶を炙り、冷えて香気を失わないよう紙で包む。紙の中で冷えたところできり出して、木製の茶碾（葉研）にかけて粉末にする。ただしあまり細粉とはしない。次いで、篩にかけて米粒大のものを選ぶ。これを蓋付きの容器に入れる。別に風炉に釜をかけ、水を沸かす。一沸ていどで若干の塩を加え、二沸ていどでかき廻し、三沸としてぐらぐら煮る。そこに茶の粉末を茶匙で分量をはかって入れる。しばらく煮て、茶湯を汲みとって飲む。飲むときは瓷（磁）製の茶碗を用いる。というところである。味は上茶は甘く、下茶は甘からず、中茶は「啜って苦く、飲んで甘し」とされたようである。

7 宋代

権茶法の成立

宋の太祖趙匡胤が、後周の恭帝の禪譲を受け、宋を建国し、都を河南省の東京開封に定めたのは九六〇年である。

宋朝も唐代に引き続き農業を重視したので、農業生産の発展には目覚しいものがあった。山地の農民は階段状の田畑を造成し、これに適合する作物をとり入れたが、その中に茶樹を包括したこともあって、茶園面積はより拡大した。また手工業も発達し、農村地帯にも小工場ができ、茶は生産量でも製造技術上でも唐代をはるかに超す発展をとげるようになって来た。

農業と手工業の発展は、都市経済と対外貿易の発展を促進し、広州や明州（寧波）などの都市では、南海諸国や日本、高麗などとも交易が行なわれた。首都開封は、二〇万戸を擁する商業都市に変貌してきたのである。こうした都市では商店や茶館などもふえ、唐代では日没まで制限されていた営業も、夜間営業が許されるまでになっていた。

この時代、茶は米、塩とともに、生活の必需品化してきたようで、王安石（一〇六六年～一〇七八年、大臣）も「茶の民用たるは、米塩と等し」（『臨川集』）といっている。

茶の生産地区は、行政区域に応じて、湖南北路、江南東西路、両浙路、淮南路、福建路、成都府路（四川省）、利州路（陝西省）とそれぞれ大別された地区を形成し、これらのうちでも、生産量の最も多いのは、成都府路、次いで江西省の江南東西路、安徽、江蘇、湖北各省にまたがる淮南路というところであった。

当時北方のツングース系の季元昊が、夏国を建て宋に侵入してきた。仁宗は之を討ったが失敗し、和を結んだとき（一〇四四年）宋は毎年夏国に七万両の銀、一五万匹の絹とともにおよそ一八トンの茶を歳賜とすることを約定している。茶が政治的にも利用されてきたのである。

宋朝は、茶を利用することについては、唐朝に引き続き貢茶や課税政策を継承したが、これに加えて新たに、茶を専売する権茶法を施行した。

建国直後の宋は、領地としては周の旧領をそのまま受け継いだため、国内の産茶地は当時の淮南西路（安徽省西部）を除いては殆ど国外にあったため、宋にとっては茶は一種の輸出品であった。宋の太祖は、かねてから茶が経済的、政治的に利用度の高いものであることに着目していたので、建国と同時に茶の自由交易を禁じ、専売の制度をしいた。これが権茶法である。この法律は、違反

者に対する罰則として最高は死刑という厳しいもので、唐代の茶税より更に収奪的なものである。

この法律を施行するに当たり、先ず国内の産茶地である淮南西路に官吏を派遣し、栽培製造に従事する茶業者の監督に当らせた。そして生産された茶を一旦全部官に収め、改めて商人に払い下げて売るという手段をとった。これを管轄する機関とし「山場」を、淮南西路に十三ヶ所（時には増減があった）設けた。

揚子江以南の茶、すなわち輸入茶に対しては、揚子江沿岸に貿易機関として置かれた「榷貨務」が、揚子江以北に密輸入される茶を監視し、また密輸者に対しては重刑をもって臨み、榷茶の円滑な推進をはかる役目をもになった。榷貨務は、江蘇省の真州や湖北省の無為軍などに置かれた。

九八三年（太平興国八年）、江南の李煜が宋に降服して、茶の主産地をすべて宋の主権下におくようになってからは、国内茶、輸入茶の区別は実質上は存在しなくなったが、山場や榷貨務はそのまま残り、榷茶法の強化手段に利用することが図られた。しかし九八八年（端拱元年）頃より、元来貿易機関たる榷貨務はその意義を失ったとして廃止論が起り、九九三年（淳化四年）に一旦廃止した。ところが実際は榷貨務で取扱われた物資の殆どは茶であり、榷貨務は多分に専売業務遂行のための機能をもつようになっていたので、貿易機関としてより榷茶機関としての意義を評価する者が多く、同年中に再び設置されることになった。

それ以降、一〇五九年（嘉祐四年）榷茶法の廃止にいたるまでの約七十年間、榷貨務は山場とともに榷茶の中核機関として存続することとなる。

こうした状況の下、茶は当時の宋朝経済を支える大きな財源の役目を果たした。というのは膨大な軍糧の多くは揚子江以南の地からの供給にたより、その補給には殆ど商人の手に依存していた。かれら軍糧の納入者は榷貨務に持参し、榷貨務は、この代価や労力費を金銭の代りに茶（又は塩）で支払ったからである。

茶の密売

当時、茶の販売利益は非常に大きかった。これを西北辺境に転売すれば、数倍の利益を得る（『宋史』食貨志）ほどであったから、厳重な榷茶の諸規定にも拘らず、「私販」、「盗販」（いずれも無許可の販売）が横行した。

私販、盗販茶に対する刑罰は、茶を隠匿して官の買い上げに応じない者は、その茶を没収。その価格百銭以上に相当する者は、杖（杖刑）七十。主吏で官茶を貿易し、その価格五百銭以上の者は、二〇〇〇里の流刑。武器を所持し、私茶を売る者は死刑と定められていた。例えば太平興国の初（九七六年頃）張永徳という役人は、太原に於て近親の者にそそのかされて茶を私販し、あばかれて位を移されたり、潘昭緯という安徽省天長郡の長官は、勝手に茶価をつり上げて官の茶を売り、反って商人に密告され発覚し、官を奪われたとか、私販摘発のため九七四年（開宝七年）、監察吏が太祖の命を奉じて商人を装い、廬州、舒州（ともに安徽省）などの民家に行き、茶を買い求めようとし、疑わずに茶を差し出せば、直ちに捕えて刑に処したといったように、取締りに峻厳なものがあつたようである。

榷茶法によって利益を得た者は、一部の豪商たちのみに過ぎなかった。かれらは商人が軍糧などを納め、その代価として受けとった茶交引を自ら有する財力によって、低廉な価格で買い占め、茶の出廻りを鈍らせ、価格のつり上ったところで茶交引を高く売りつけるといったように茶相場を操作し、莫大な利益を収めたのである。軍糧などを茶で支払う政府も多大な利益を得たが、それでもかれら悪辣な豪商たちの収める利益には遠く及ばなかったといわれている。

宋朝は、その建国以来の国是として、茶法の完備をはかったが、反面その弊害を伴うことも多く、きわめて複雑な茶法を制定し、そして又何度かそれを改変するなどの苦心を払った。その過程をた

どってみると、主なるものでも、権貨務ならびに山場の設置（九六四年）、権貨務の廃止（九九三年）、同再設置（同年）、^{チヨウシヤ}貼射法、^{ケンセン}見銭法及び^{サンセツホウ}三説法の施行（一〇三三年頃）、見銭法、貼射法の廃止（一〇二五年）、同法の復活（一〇三六年）、権茶法の廃止（一〇五八年）、通商法の実施（一〇五八年）、建州、南劍州（共に福建省）の蠟茶を権す（一〇八五年）、福建の権法を廃止（一〇八六年）、蠟茶の権を廃す（一一一二年）など幾多の変転を重ねている。

ところで、今挙げた「貼射法」とは、茶の生産者（「園戸」という）に茶を租税として官に納入させ、残りの茶は山場で買い上げる。その買い上げ法は、予め官から銭を園戸に給し、茶を納入させる。山場の役人は、予め園戸の茶樹の本数を査定し、納入すべき量、および給すべき基本額（「本銭」という）を定める。園戸は、茶を自由に販売することは勿論、許可なく茶樹を抜いたり、茶園を廃止することはできない。といった厳しいものである。「三説法」とは「貼射法」と似ているが軍糧などの納入者に支払う代償を、現金、香葉又は象牙をもってする方法であり、「見銭法」とは、高い利息付きの金を園戸に給して茶を納入させるといった方法で、何れも官にとっては、入ること重く、出ること軽いという点では同様な方法である。

当時、政府は、税収としては、官田から徴収する小作料、民田から米、綿の両税を徴していたが、それらの重要性は次第に失われ、権茶による茶のほか、塩や酒の専売収入が重要性を増し、現物よりも現金収入が重きをなしていた。したがって、これらの増収を図るためには、綿密、且つ巧妙な策が研究されたのである。しかし権茶を見る限りでは、良質の茶は豪商などの手に入り、粗悪な茶を官が買い上げることになり、結局官は売れ残る粗悪茶の滞貨の山を築く結果となったようである。一〇二五年（天聖三年）のとき、これを調べた調査官孫奭^{ソンセキ}の報告でも、その年の滞貨、約三六七八トンとっている。

.....

10 明代

茶馬交易

元は強大な軍事力を抱え、庶民に差別待遇や重税をもって臨んだが、やがて不満分子が反政府勢力を強めてきた。その集団から朱元璋が、華中に興り他を制して、天下を統一して、一三六八年（洪武元年）、金陵（南京）を都として大明国皇帝となった。

朱元璋太祖帝は、明朝の経済力を強化するため、荒地の開墾、移民の屯田および水利の興修などにいち早く着手した。不完全な統計ではあるが、建国二十年で各地の土地開闢は二七万ヘクタールに達したという。農業の発展は、江南の紡績や景德鎮の磁器にみるような手工業の発展をもたらし、それがさらに商業の発展を促した。茶業もこれらに伴って生産、流通面に大きな発展をとげたのである。

太祖は即位すると直ちに茶の税収をもって、西域の馬を購入する法律を定めた。これが後年茶について明の政策上もっとも重視される茶馬貿易に発展する。明の茶馬貿易はのちに茶と馬との直接交易に変わるが、しかしそのことは、明に限ったことではなく、古来から中国では、良馬の補給には非常に力を入れており、つねに西域や、西北辺境の地から馬を輸入していたのである。

たとえば『竹書紀年』に、紀元前九世紀のころ西戎が馬を献じたとか、太原の戎を討って馬千匹を得たなどの記事があるというし、また漢の武帝（紀元前一四〇年～前八七年）の時代には大宛国（パミール高原の中にあつた王国）遠征に先んじて、烏孫は一千の馬を以て漢女を招いたと伝えていることなどが、そのことを物語っている。

ただ明は特別に蒙古軍から軍事的に馬の重要性を学びとったために、馬の必要性を痛感している時であり、一方で茶の増産が予測される事情にあるので、茶と馬との交易に力点をいいたというわけである。

ここで中国における茶馬交易の経過をたどって見よう。茶と馬との交易については、馬を必要とする中央政府、茶を必要とする西域諸国という、互いの利益につながることを考えると、交易は早くから行なわれて然るべきことと考えられる。しかし記録としては『新唐書』に七七五年（唐の大暦一〇年）「回紇（ウイグル）赤心、馬万匹を市せんと請う。有司は財乏しきをもって、ただ千匹を市う」とあるのが最も古いかもしれない。これは茶と馬とを交易したとは言っていないが、後の『封氏聞見記』や明の丘濬の『大学衍義補』などの記事によって、これは茶又は茶の税収によって馬を買ったのではないかと、推測されている。

宋代に入って、九七六年（太平興国元年）秦州の上奏に「茶絹を以て蕃部（西北地方の異民族）来献の羊馬の価に給せん」。同じく九八三年（太平興国八年）「吐蕃、回紇などより購う馬の代価を、銅銭を以て支払っていたが、その銅銭を鑄潰して兵器にする危険ありとして、布帛、茶をもって他の物と交易することとす」などの記録があり、九九四年（淳化五年）、夏国（蒙古）から馬駝の献納があったのに対し、茶、薬、衣類などを賜わっている。

このようにして、茶馬の交易は、実質的には宋の時代から行なわれて居り、一〇七〇年（熙寧三年）になると、茶馬法による専門の機関たる買馬司の設置へと進んだ。

こうして一〇九九年頃、宋の哲宗の時代には「馬至ること万匹、茶課を得ること四百万緡」（緡は最低貨幣単位文の一千倍）、一一八二年頃、南宋淳熙の年には「蕃夷の馬、二千九百余匹を得、すべて良馬」という実績をあげるようになった。

明が茶馬貿易に力を注ぐのは、こうした歴史的な背景があったればこそであろう。

明初には、東に三つの馬市（又は馬司）があった。そしてこれらは辺夷を馭し、辺防の費用を省く目的をも兼ねていたという。三馬市のうち、開原南関にあるものは、対女真族用のものであった。この馬市では、当初絹布や米で馬と易えていたというから、当時の女真族には茶の需要が無かったようである。

一三七二年（洪武五年）頃には、馬市茶市を併合して茶馬司とし、四川や河州（陝西）など、六茶馬司に増設した。同じく洪武の年に李景竜という者を西域に派遣して、茶を求め、代りに馬を納入する辺境の部族に、金牌を与えるなど、茶馬交易の奨励措置をとっている。

この措置は、一旦廃止されたが、廃止によって馬の入手が困難になったと伝えているから、金牌の奨励策は効を収めたようである。

明末になってくると、一時効果を収めた茶馬法も、私茶、私販の蔓延を防ぎきれなくなる。その上、正引（正規の貿易許可証）以外に由票などという一種の私引も濫発され、蒙古方面を含む西域の蕃民に私販を助長する結果も生じた。かれらは官許の茶を買うことをしない為に納馬も承知しない。承知するとしても下等馬に限られ、上等馬は茶馬司を通すことなく、結果として殆ど奸商の手に委ねられるようになったようである。

こうして、一四九五年（弘治八年）茶と馬との交易を中断することとなり、一五一五年（正徳一〇年）四川の茶をもって、蕃馬と交易する制度は破れることになる。

そして一六二五年（天啓五年）「茶法、馬政並びに国境の防衛ともに壞る」（『学菴類稿』明食貨志茶法）と、ついに破局を迎えた。太祖以来三百余年近く続いた、明の茶馬交易制度は、国自体の崩壊に先だって、全くその機能を失ってしまったのである。

明は茶馬政策のほか、宋代の榷茶法を陝西、四川両省に限定して踏襲し、その他の省には茶課税を実施していたが、末期にはこれらの収入や外国貿易による利益の大部分は、国家や官僚の独占するところとなり、反税運動が組織化し、ついにはそれが滅亡へとつながるのである。

11 清代

茶馬交易からヨーロッパ貿易へ

十七世紀、満州人によって樹てられた清朝は、統治の具体面においては、明朝の諸制度を踏襲しつつ、重要な官職には、満漢併用の制を用いたほか、明朝の支配階級^{エンバクザツ}の存在をそのまま認める方針をとった。

茶法についても、明の茶馬政策の破綻を知りつつも、それを受け継いだ。茶馬政策が西域諸国を懐柔する有力な手段であることを、なお信じていたからである。その事情を『簞曝雜記』^{センバクザツキ}はこう記している。「前明より茶馬司を設け、茶と馬とを易え、わが朝これを以て撫馭^{フギョ}の資とす。西方諸域はその仰がざるは無し」と。

ところが前時代から依然として続く、茶の密貿易は跡を絶ったわけではないので、茶馬政策の円滑な遂行は苦心を要することであった。一六四五年(弘光元年)には私販茶を帯びて出境を図る者を、巡察が発見した時は、直ちに罪科を問い、その茶を官に没収することを、更めて命令し、また各西域諸国との茶馬交易促進のため、煙草や酒を与えて懐柔をはかるなどの工夫をしている。

十七世紀も半ばに入ると、茶の生産は一層増大し、茶馬交易にも余裕が見られるようになった。一六五六年(順治一三年)には、安徽の新茶で馬との交易は充足できたので、古茶の価格を下げて飼料用に払い下げるほどである。また一六六五年(康熙四年)には、雲南の茶馬司は、商人が交易によって生じる利潤の多いのを見て、かれらに取扱い金額の三割に及ぶ課税さえ行なった。ただしこのことは為政者はこれを内政面への寄与と満足したが、商人にとっては苛酷なもので、取扱い意欲の喪失から、ひいては茶の生産発展を阻害する要因となることが憂えられたのであった。

この頃から清は、江南一帯の農村地帯に木綿、絹を中心とする繊維工業、その他の手工業を明代にまさる大規模なものとし、道路も大きく整備し、清の基本的経済を支える一方で、その領域も拡大し、一大帝国を形成する勢いにあった。

茶馬政策も、すでに蒙古は敵ではなく、その目的とした西域地方の懐柔という点では、その存続の意義を失ってきた。しかもそれを存続することによる私茶の取締りの労力や、諸経費の割には、馬を得ることも少なくなってきたので、一七〇五年(康熙四四年)ついに茶馬司の廃止を決定した。こうして中国における永い茶と馬とのかわり合いは、終末を告げる。そして貿易の重点を、北西のロシア、さらに対ヨーロッパに向けるのである。

この頃には、明末にひき続いて海外との接触は、急に強まり、すでにイギリス東インド会社は一六三七年(崇徳二年)広州から五〇キロの茶を買付けたのを契機とし、続いて厦門^{アモイ}に商館を開設(一六四四年)して、イギリス国内に高まりつつある茶需要の気運に乗ずべく体制を整備してきた。またロシアとは、一六八九年(康熙二八年)ネルチンスク条約を締結し、同国への茶輸出が軌道に乗ろうとしていた。清が茶貿易の主力を、西域からヨーロッパ方面へと置き変えたのは当然であろう。

ところが清としては、外国貿易については未経験であるため、最初から輸出手続などが順調に進められたわけではない。封建社会を守る基本として依然鎖国政策がとられていたためである。そのため外国貿易は、ロシア向けを除いては、広州一港のみに限定し、外国人は取引や交渉のすべてを、この地の公行(官許の貿易仲買)を通じなければならないという、不便な手続を甘受しなければならなかった。貿易港についても他に増設することをしなかった。たとえば乾隆帝(在位一七三六年～一七九五年)のいうように「中国は物産が豊富で、国内に無いものはない。ただ中国に産する茶や絹などは、西洋各国の必需品であろうから、広州のみ貿易を許可し、必需品を与えるわけである」という尊大な態度が堅持されていた。

こうした貿易手続上の障害があるにも拘らず、清の茶が一たび海外に輸出されると、急速にその量を伸ばし、イギリスを始め、オランダ、ロシア、アメリカへと次第に、茶を知らない国々の門

を開くのである。

（Ⅱ 茶の世界小史／第一章 中国、二一九～二四九ページ）

——この松崎著『年表・茶の世界史』の必要部分を、本全集所定の大型原稿用紙に書写しはじめたとき、校注者の念頭に描かれてあった《予定紙面^{スペース}としては、せいぜい十枚前後（三ページ分）の分量を超えることはないだろう、との見通ししか立てられなかった。ところが、作業を開始してみると、ああこの事項も省略するわけにはゆかない。いやこの引用文献も無視するわけにはゆかない、そうだこの政治経済的背景に触れないくらいなら最初^{はじめ}から補注の記事に加えようなどと思わなければよかったんだ、というふうに、あれも斯れも必要であるように考えられてきて、^{とう}到頭、ごらんのごとく過剰引用という《非常識》を犯す仕儀に立ち到った。（たしかに《非常識》の罪は犯したが、補注担当者個人としては、これによって二歩も三歩も『人生地理学』完全理解に近付き得たとの確信がある。しかし、それはあくまでも個人心理に属する問題であり、もしも大方^{おおかた}の読者諸賢^{わづら}が煩わしい五月蠅^{うるさ}い我慢^{がまん}ならぬというふうにお感じになるとしたら、このことに対しては低頭陳謝するほかない。）

さて、「茶の世界小史、第一章 中国」の叙述に戻るが、執筆者松崎芳郎は、大東文化学院を卒業した直後から本格的に（というより、^{人生そのものの中身として}）中国茶業史研究と取り組んだ人物で、斯かる人物が半世紀を費やして書き上げた年表および世界小史だったればこそ日本随一の作品を公刊し得たのだとおもう。『年表・茶の世界史』開巻第一ページ「まえがき」をみると、こうある。「私が戦前東京にあった茶業組合中央会議所に入所したのは、日独伊三国協定を結んだ年であったから四十五年も前のことになる。当時同会議所は今上天皇御大典記念事業の一つとして、茶に関する出版物の収集整理を行なっていた。私^私がその整理を担当したころは四千部一万冊以上に及ぶ、和、漢、洋の蔵書があった。この整理に当たっているうち気のついたことをメモしておいたのである。そのメモは私が出征している間に一部は戦災で焼失してしまった。だがメモのうち恩師角田健三氏の指導で浩瀚な古今図書集成から抜粋しておいた部分が手許に残ったのは幸であった。もう一つ幸なことは茶業組合中央会議所の蔵書の大半は戦災を免れていることを復員後に知ったことである。／この蔵書は農林水産省の書庫から現在、日本茶業中央会に保管されており、今は整理中で一般の閲覧はできないところを、特に同会荒井藤光専務の御好意によって閲覧の便宜を与えられたことも幸なことであった。そこで私は曾て茶業組合中央会議所に在職中に編纂した『支那茶業文献目録』を足がかりにして、再度自らのメモの継続に挑戦し、何等か茶と茶業の発展に一つの寄与をなし得ないだろうかと思ひ直すことにした。このようにいくつかの幸運にも恵まれて私自身のメモは、かなり充足することができた。」——なるほど、松崎の仕事が、^{よじん}余人の趣味的・知ったかぶりの・自己顕示欲望^{かくぜん}的なる茶関係歴史書と比較して劃然と一線を画^{かく}して聳え立つ理由は、こういう個人史的（自分史的とさえ称しても差し支えないが）軌跡を踏まえたものであったかと、あらためて納得し且つ腑に落ちる思いを味わった。

中国における茶の歴史（厳密には、近世以前にあっては、茶の歴史は中国以外の地域において

は存在し得ようもなかったのであるが)は、遠古の神話伝説の時代を別にすれば、だいたい紀元前二～三世紀ごろ、四川省の岷江上流の山岳地帯で`栽培、され`商品化、されたことによって第一歩を^{しる}印す、と言ってよい。それ以後、時間をかけて揚子江流域地方(安徽省や江蘇省に当たる)に広まり、茶の栽培および摘採の方法の普及や、茶の製造技術の進歩や、喫茶風習および茶器茶具の美学の樹立が、南北朝から隋朝にかけての時代、全国レベルで次ぎ次ぎに現実化されていた。大唐帝国の時代に入ると、広大な国内で茶の生産および消費が盛んに行なわれたばかりでなく、ついに西北辺境のウイグル族にも喫茶の風習が伝えられ、一方また朝鮮半島やインドシナ半島にも伝えられた。ただし、この段階に達しても、茶を嗜好するのは依然として権力を持つ貴族や一部豪族に限られており、窮乏農民たちは茶というものの存在さえ知らず、かりにもし茶というものの存在を知っている農民がいるとしても「貢茶」(毎年新茶の時期に定期的に帝王に茶を奉進する制度)の強制=徴発の苛酷さに堪えかねて他へ流亡する者か、「茶税」(茶を売却したり購入したりするたびに税率一〇パーセントないし一五パーセントの従価税を課する)の重たさに呻吟する者かに限られていた。殊に茶の歴史を通観して驚かされるのは、唐代以降、宋といわず元といわず明といわず、歴代王朝が茶というものの^{ないほう}内包する政治的・経済的・財政的効用性に着目して、^{げんしゆん かこく}嚴峻苛酷を極める法律を以て徹底的なる《茶の管理》を徹底的に押し進めた点である。松崎の言葉を^{あえ}敢てそのまま^{はんすう}反芻すれば、「宋の太祖は、かねてから茶が経済的、政治的に利用度の高いものであることに着目していたので、建国と同時に茶の自由交易を禁じ、専売の制度をしいた。これが榷茶法である。この法律は、違反者に対する罰則として最高は死刑という厳しいもので、唐代の茶税より更に収奪的なものである。」斯かる^{ごん ことうだん}言語道断の悪法・悪政・悪税が^{まか}罷り^{とお}通ったのでは人民のほうは^{たま}堪ったものではないが、王朝支配者のほうでは、茶(それから、塩の場合もそうだが)を徴税の対象としたり、茶を以て国家財政支出に当たったの現金代わりとしたり、輸出品として莫大なる付加価値を手中にしたり、外国使節との修交儀礼用として最大限に利用したり、ようするに、茶といえは`無くては^{かな}能わぬ、重要な生産物であり且つ消費財であった。その間^{かん}にあって、辣腕の茶商人や茶賊(これと紙一重の茶商軍)が暗躍したことは言うを俟たない。明代に及んでは、宋の中期ごろから西域諸国を相手方として盛んになっていた茶馬交易を法制化し、これを柱にして国家収入の増大化を図る。このことの推移を、再び松崎芳郎の叙述を使って要約させてもらおうとすると、「(明の)太祖は即位すると直ちに茶の税収をもって、西域の馬を購入する法律を定めた。これが後年茶について明の政策上もっとも重視される茶馬貿易に発展する。」「明は茶馬政策のほか、宋代の榷茶法を陝西、四川両省に限定して踏襲し、その他の省には茶課税を実施していたが、末期にはこれらの収入や外国貿易による利益の大部分は、国家や官僚の独占するところとなり、反税運動が組織化し、ついにはそれが滅亡へとつながるのである」ということになる。このように国家を滅亡にみちびくものであることを承知のうえで、清もまた茶馬政策を受け継ぐが、それは茶馬政策が西域諸国を懐柔する有力手段だと信じていたからである。しかし、まもなくこれを廃止する時が来る。松崎の言葉どおり繰り返しておくと、「茶馬政策も、すでに蒙古は敵ではなく、その目的とした西域地方の懐柔という点では、その存続の

意義を失ってきた。しかもそれを存続することによる私茶の取締りの労力や、諸経費の割には、馬を得ることも少なくなってきたので、一七〇五年（康熙四四年）ついに茶馬司の廃止を決定した。こうして中国における永い茶と馬とのかわり合いは、終末を告げる。そして貿易の重点を、北西のロシア、さらに対ヨーロッパに向けるのである」ということになる。「清が茶貿易の主力を、西域からヨーロッパ方面へと置き変えたのは当然であろう」ということになる。新しき強力なる貿易相手国として登場したヨーロッパ諸国のうち、最初に中国の茶を商品として輸入したのは十七世紀オランダであり（喫茶の風習をヨーロッパに伝えたというだけなら、十六世紀ポルトガル人およびイタリア人のほうが先であるが）、一六二三年以降、オランダ東インド会社が茶の輸入を独占した。まもなくヨーロッパ上流社会で健康飲料として歓迎されることとなり、フランス、ドイツ、イギリスの諸都市に喫茶店が出現した。一六六九年以降、イギリス東インド会社がオランダに代わって茶貿易の独占権を握るようになり、年とともに貿易量の飛躍的上昇を遂げるすさまじさといったら、ついにはやがてあのアメリカ独立革命の導火線となることで歴史的に著名な「ボストン市民のイギリス茶ボイコット事件」を惹き起こさずにはおかなかったほどであった。イギリスが清国から輸入した茶の数量を逐ってみると、一七一五年三一トン、一七六〇年二七〇〇トンと、一八三四年一万四〇〇〇トン、一八四六年二万五〇〇〇トン、一八六五年四万五〇〇〇トン、一八八〇年～一八八八年の年平均七万二〇〇〇トンとなり、十九世紀後半になってからのこの数字は中国茶総輸出量の七〇パーセントに該当するから、これは、まことに驚駭すべき社会文化現象が生じたとしか言いようのないものである。なぜ斯様な社会文化現象が起こったかを考えなければならないが、粗っぽい答えを思い描くとすれば、イギリス社会全体の急激なる経済発展の歩みに伴って、いまや、茶が（むしろ、喫茶の嗜好が、と言い直すべきであるが）嘗ての上流階級占有物という限られた性格を脱して、産業革命によって都市の工場を中心に誕生した労働者階級の必需品という性格へと変質を遂げたことこそ、その最大原因になっている。だが、斯んなに厩大量の茶を毎年々々輸入したのでは、いかに最大速力で経済成長の街道をひた走っている大英帝国といえども、貿易の収支決算に破綻を来たすのは当然の理である。そこで、イギリスの政治経済指導者は、事態打開のために、とんでもない卑劣な手段を思い付き且つ実行し、いわゆる阿片戦争（一八四二年）なる非人道的事態にまで突入することを辞さなかったのである。

近代イギリス指導者らがどのように茶貿易を利用して国内的にも対外的にも力と富とを手中にしていったか、という歴史的過程について、横浜市立大学で東洋史を講ずる気鋭の学者、加藤祐三『イギリスとアジア—近代史の原画—』（一九八〇年一月、岩波新書版）が、まことに眼の醒める解析の作業を提示してみせてくれている。加藤のまなざし、の素晴らしさは、みずからが東洋史学者でありながら、わざわざイギリスに滞在＝留学し、向こうがわから（すなわち、イギリスに残されている一次資料をとおして）近代アジアが植民地化されてゆく歩みを凝視し直そうと意志した点に在る。「それでもまだ私は、中国史や東アジア史に固執して、イギリスの近代そのものにぶつかることをためらった。おそらくイギリス滞在が半年をすぎた頃からだったである

う。東から西を見る方法をしばらく中止して、おもに西から東を見てみよう、イギリスに中心をおいてアジアとの関係を考えてみようというふんぎりがついた。私の抱いていたイギリス近代のイメージが、一つ一つこわれて、再構成を余儀なくされたからである」(あとがき)。一定の政治イデオロギーに乗かって、はじめから諸悪の起源はイギリス帝国主義植民地搾取に求められると決めてかかり、公式論的に近代イギリスの諸政策を片っぱしから弾劾する、といった、これまでの単純=乱暴な論法ではなしに、加藤は、ひとつひとつ、社会経済的事象を《社会史》的に検証し直していった、まず産業革命そのものがアジアの先進的文物との接触から点火され燃焼してゆくプロセスを克明に論証していく。「中国から輸入した茶は、一八世紀末にすでにイギリス人の生活を変えるほどに定着し、インドと中国から輸入されていた綿布は、イギリス人のファッションを変えた。この綿布を自国で生産しようということで、産業革命を主導する綿工業が一八世紀後半にイギリスに勃興する。／茶の取引は、イギリスから中国へ売りこむ商品を必要とする。そこで考えついたのが、インドで栽培したケシからアヘンをつくり、これを中国へ売りこむことだった。本来なら綿工業の製品をそれにあてようとしたが、中国の在来の綿布が固い市場をつくっていて、期待どおりに伸びない。アヘン貿易が、一九世紀のアジア三角貿易の鍵になった。それはアヘン戦争で終わるのではなく、逆にそこから急増して一八八〇年にピークに達する」(序章点描)。このプログラムに則って展開される「第4章 紅茶と綿布」の章の叙述を紹介しよう。

東から西へ

商品がたくさん往来するようになる。外国のものが入ってくる。いわゆる「舶来品」である。外国へもイギリス産のものが出ていく。イギリスで舶来品への好奇心がめざめる。舶来品への好奇心はなにも鎖国時代の日本でのみ特殊であったわけでは決してない。好奇心の強さは、自分の側に、その舶来品を欲する欲望があることを意味する。

ヨーロッパ人による東方貿易の欲求を商品別にいえば、よく知られているように、まずコショウなどの香辛料、絹・生糸、ついで茶とコーヒーがあげられる。茶とコーヒーは砂糖の需要を呼びますが、砂糖は主に西インド諸島やアフリカ産で、アジアとはあまり関係がない。重要な役割をはたしたものといえば、なんといっても茶とコーヒーであろう。貿易という面で大切であることはいうまでもないが、イギリス国内にコーヒー・ハウス文化(最初のコーヒー・ハウスは一六四八年にオクスフォードに、五〇年にロンドンに現われた)やティー・ハウス文化を生みだした。人びとが集まり、商談が行なわれ、郵便局の役割をはたし、ときには陰謀がねられるという場所になった。これは都市に新しい雰囲気をつくりだした。一八世紀末になれば、これまで高価だった茶が関税引き下げなどの理由によって、安くなり、庶民の家庭に入り、生活に根をおろした。コーヒーのほうは需要があまりのびなかった。茶は、こうして嗜好品から、食生活の必需品にかわった。茶の供給国は、その貿易の出発点である一七世紀から一八六〇年代にインド・セイロン茶が登場するまでの約二百余年のあいだ、中国だけであった。よく紅茶といえばインドが思いだされるが、これは一八七〇—一八〇年代(日本の年号では明治になってから)以降に本格化する。それまでは中国が唯一の輸出国であったといっよい(図6)¹。

¹ 図6の図版は省略。以降、図7、8も同様。

首都ロンドンのコーヒー・ハウスが、異国趣味の豪華なインテリアで大変な人気を集めていた。地主貴族たちは、六月に田舎の本宅へ戻るまで、ロンドンの「別荘」に住み、金と時間をもてあまして、このコーヒー・ハウスに集まった。ここでは、茶も酒も、あるいは店独特のカクテルなども出された（B. Lillywhite, 1963）。茶のばあい、いわゆるミルク・ティーは紅茶だが、こういう店でも出される高級茶は、ウーロンなどの中国茶で、ミルクも砂糖も入れずに飲まれた。

.....

茶の歴史

茶の歴史、これをイギリス側から見たばあには、中国茶の歴史である。正確には、中国産の茶の歴史というべきであろう。一八七〇年代からインドやセイロン産の紅茶が多量にでまわるまでは、中国産の茶がすべてだといってよいからである。

茶の分類法はいくつかあるようだが、一九世紀に確立し、現在でも通用する分類は、次の四つである。(1) 緑茶（醗酵させずに乾燥させたもの）、(2) 紅茶（醗酵させたもの）、(3) ウーロン茶（緑茶の非醗酵と紅茶の醗酵の中間で半分醗酵させたもの）、(4) 茶塊（団茶。茶の屑をかためたもの、歴史的には海上貿易ではなく陸路貿易としてロシア、中央アジアに出されていた）、このうち(4)はこれらの変型であるから、原則的には三分類でいいことになる。

イギリスの茶貿易は、一八三四年までは、東インド会社の独占事業であった。それだけに密輸が激しかった。それ以降は自由貿易になる。東インド会社による独占時代の茶貿易について、英議会议文書は統計をだしている（B.P.P. 1845 XLVI 図7）。これには一七四〇—一八三七年の約百年間にわたる買付量と東インド会社の卸売価格が茶の品目別に示されている。東インド会社のあつかい以外に、密輸入がさかんに行なわれていたから（それが独占貿易から自由貿易への切りかえの要求にもなっていた）、これがすべてではない。同資料にも数値があがっているが、確認できないと記されている。それでも、全体の傾向を示すには十分である。第一の輸入増加期の茶を品目別にグラフにした図7をみると、紅茶がもちろん圧倒的に多いが、そのなかでは大衆茶のボヒー（武夷）のかわりに一八世紀末から中級茶のコングー（工夫）が急速に伸びている。緑茶、ウーロン茶は、相対的に少ないうえに、減少がいちじるしい。この傾向は、砂糖もミルクも入れない喫茶という上流階級むけの風習が、ある限度以上にのびず、かわりにミルクをいれた紅茶（イングリッシュ・ティー）が圧倒的多数をしめたことを示す。紅茶が大衆化したのである。いちばん安い銘柄にかわって、中級紅茶が定着した。

中級紅茶のコングーと大衆紅茶のボヒーとの値段の差はどのくらいあったのか。小売値については資料がない。東インド会社がインド・ハウスで競売にふしたが、その時の卸値の平均についてみると（B.P.P.1845 XLVI）、はじめは倍以上の価格差があったが、両者とも値段がさがっていくうちに、両者の価格差がちぢまっていく。一七六〇年の安い紅茶の値まで中級紅茶の値が近づくのは、約三〇年後、つまり一七九〇年である（図7）。

.....

茶といえば紅茶が主流であることは、右にみたとおりである。この紅茶の輸入は、のちにいっそう急増する（図6）。第一の急増期が前述の一八世紀末で、第二の急増期は一八四〇—一七〇年代である。第一の急増期は、一七八五年にピット首相が茶にたいする課税率を一一九%から一挙に一二・五%に下げたことに原因がある。もっともすぐにまた引きあげられる（D. Forrest, 1973）のだが。一八七〇年代からはインド・セイロン産の紅茶の登場が、この急増をささえた最大の要因である。税率の低下ばかりでなく、卸売価格そのものの低下が、需要をふやした。遠く中国やインドから運ぶ運賃コストも低下したが、最大の要因は中国から安く茶を買いつけられるようになったこと（加藤祐三、1979）、インド・セイロンでは入植イギリス人の所有になる茶園で安く生産できるようにな

ったこと、この二つである。

値が高く、まだまだ貴重品で、舶来の珍品であった一八世紀には密輸が流行し、密輸によっても入手が困難ならば、まがいもの、混ぜものの茶が現われた（密輸というのはイギリス東インド会社の独占以外の輸出入という意味で、東インド会社による独占の正統性は、このさい問わないことにする）。混ぜものの茶については傑作がある。似ていて非なるもの、それも豊富な安い原料から作るのが、このまがいもの真骨頂であろう。それを禁止する法律も、きわめて具体的である。

一七二五年の法令にいう。「茶商人あるいは茶の製造業者あるいは茶の着色業者で、テラ・ジャボニカあるいは他の薬品を用いて偽造しようとする者、また茶の葉以外の葉を混ぜて茶にしようとする者……彼らは合計一〇〇ポンドの罰金を課せられる」（D. Forrest, 1973）。

茶の代用品あるいはまがいものを作るほうも、またなかなかのものである。一七八四年に茶商のトウニング家の一人に送られてきた製造の方法は、こんなふうである（D. Forrest, 1973）。

トネリコの葉を紅茶にまぜたスマウチの製法について

トネリコの葉を集めたら、まず太陽で乾かし、煎る。それを床にひろげて、葉が小さくなるまで踏みつける。これを緑糞りよくぼんと羊の糞をまぜた液体に浸す。これを乾燥させれば、利用に適する。

スマウチは「不正行為をする」「だます」という動詞から転じたもの。トネリコはアッシュという大樹で、イギリスにはふんだんにある。羊の糞をまぜるのは問題として、原料は安くつくし、完成品は紅茶と区別がつかなかったのであろう。味や香りは保証のかぎりではない。これだけで駄目なら、本物の紅茶に混ぜればいい。こう考えたにちがいない。

茶と綿布とアヘン

さて舞台は東へ移る。イギリスは中国から茶を買っていた。支払いは銀である。西から東行するイギリスの商船は銀塊（シルバー・ブリオン）を積んでいった。中国（一八四二年の南京条約による五港の開港いぜんは広東が中心）で買った茶を、今度は西へはこぶ。一八三四年までは、この茶貿易をイギリス東インド会社が独占していた。主な消費市場はヨーロッパとアメリカである。アメリカの独立（一七七六年）までは、アメリカへ行く茶は、一度はロンドンに到着してから、大西洋経由で動く。地球を四分の三廻りしていたことになる。その量も馬鹿にならない。一七六〇年、イギリスの国内消費量が約一、七五〇トンで、アメリカへイギリスから再輸出されたものが、その約四分の一の量である。植民地アメリカにとっては必需品の茶輸入を宗主国にまかせてはおけないといので、独立への意識が高まったほどである。アメリカ独立後、太平洋航路によるアメリカ商船の茶貿易が増えてくる。

茶の需要は高まる一方なのに、イギリスから中国へ売る商品がなかなかみつからない。イギリスにとっては一方的な入超で、銀が流出するばかりである。本当は、イギリスの産業革命を先導した綿工業の産物を最大の目玉商品として輸出したい。ところが、それが思うにまかせない。インドにたいしては、関税率をいじることで、これまでのインド綿布（とくにキャラコ）の輸入という「東から西へ」の流れを、「西から東へ」と変えてしまった。イギリスの機械工場のできる綿布が、とうとうとインドへ流れこみ始めた。イギリスのインド貿易については、東インド会社の独占が一八一三年にくずれた。自由貿易の開始もかかわって、西から東への綿布の動きが強まった。東インド会社のあつかいだけでみても、この西から東への逆転は、一八二〇年前後に完了した。中国からの茶輸入、インドからの絹・綿布輸入という二つの輸入のうち、後者にたいしてはイギリスは輸出商品を確認したのである。

だが注意してみると、これ以前にイギリスは、もう一つの輸出商品をすでに開発していた。それはイギリス国内のできる商品ではなかった。インドで栽培し精製したアヘンを中国へ輸出することである。一七五七年のブラッシーの戦争によって、イギリス東インド会社はベンガルからガンジス

川ぞいの土地の直接支配にのりだした。イギリス東インド会社は国王（または女王）の名で認可を受け、それを更新して継続してきた国策会社である。議会にも政府にも強力なロビーイストができていいる。東インド会社は軍隊をもち、インドの領土的支配を始めると、その経費をどこから確保しなければならない。土地税が最大の眼目であったが、それだけでは十分でない。そこでケシの認可栽培とケシからとれるアヘンの専売とを開始した。すでに中国でアヘンの需要があることはわかっていいた。イギリス東インド会社によるアヘン専売が始まるのは、一七七三年のことである（B.P.P. 1783 VI.H.B. Morse, 1912, vol.I）。イギリスばかりでなく、デンマーク、オランダ、フランスの東インド会社が、アヘンをインドで買いあさるためにトラブルがおき、イギリスの東インド会社がこれを専売制にあらためたのであった。一七九〇年には、広東へ輸出されたアヘンは四、〇五四 Chest（箱）であり、専売開始の七三年の約一、〇〇〇箱にくらべると約二〇年間で四倍にふえている。

イギリスへの茶の輸入の第一回急増期も、一七八〇年代からだったことを想起してみたい。茶の輸入にたいして、インドからアヘンを輸出するという方式が、ここですすでに萌芽をみせている。そうすれば、東インド会社は、茶の購入によって失う銀を、アヘンの輸出によって取りもどすことができる。イギリス下院に作られた特別委員会が、一七八三年に報告書を提出しており（B.P.P. 1783 VI）、その一つがアヘンにかんするものである。

国際的に認められた最初の専売が、アヘンの専売である。……混ぜものを防止すること、この有害な薬品のインドでの過度の消費を防止すること、過剰供給によって外国市場をおびやかしている過度の競争を中止させること、ケシ栽培者が資本の欠如によって経費のかかるケシ栽培を続けられないこと、個人商人では栽培者に十分な資本を供給しえないこと、これらの理由が専売制度を支持した。……

こうして東インド会社のアヘン専売が始まる。それは会社領における栽培から精製・販売を独占するばかりでなく、やがて会社領いがいの土地でできるアヘンを、輸出の段階で押さえることになった。会社領のビハール州とベナーレス州のアヘンはカルカッタから輸出され、ベンガル・アヘンと呼ばれた（中国名では公班土、喇莊土）。もう一つの栽培地はまだ会社領でない中央インドであり、そこでは栽培・精製の段階での独占を行ないえない。ボンベイまできて、そこから輸出された。これをマルワ・アヘンと呼ぶ（中国名は白波土）。マルワにたいしては、出港地のボンベイで課税し、買上げ量・輸出量を調整したのである。アヘン輸出とアヘン栽培の実態については、次章でふれたい。

中国→イギリスの茶貿易が、すでに一八世紀初頭には確立し、一七八〇年代に急速に伸びる。これにたいするインド→中国のアヘン貿易が一七七三年に専売制となり、一七九〇年代には相当の量に伸びる。イギリス綿布の輸出構造ができる以前に、この二つの商品の貿易構造ができあがっていた。そこにイギリス綿布が、イギリス→インドを結ぶことになる。それは遅れて一八二〇年前後のことである。

すでに気がつかれたであろうが、これが一九世紀のアジア（最大人口をほこる中国とインド）とイギリスを結ぶ三角貿易の原型である。一八二五年の段階をとって、この三角貿易の概念図を示しておく（図8）。インドから中国への綿花輸出は、中国での土布（家内工業でつくられる土着の綿布）の原料である。これは量は減少していくが、二〇世紀まで継続する。

（Ⅱ 19世紀のアジア三角貿易／第4章 紅茶と綿布）

——以上、ながながと「茶の歴史」ないし「茶の文化誌」に関わる諸事項の解説や紹介に努めてきたが、もしも『為さずもがな』の補注の行為に墮していたとしたならば、どうかお許し頂きたいとねがう。しかし、注釈者本人としては、牧口地理学思想を公平かつ正確に理解するためには、最小限、これぐらいの知識を踏まえておくのが『読者の義務』ではなからうかと判断して採

扱した処置である、というふうと考えて筆を進めたのであり、これすらも思い上がりや信じ込みに過ぎないとするならば、二重三重に陳謝申しあげなければならない。ただ、若き牧口常三郎が『人生地理学』を書いた当時の日本国（偉そうに、大日本帝国、なんぞと自称して、世界および自国内民衆に向かい威張ってみせていたのであるが）にとつての大事な《外貨獲得》用の目玉商品のNo. 2に当たるものこそまさに茶（緑茶）であり、この貿易上の重要事実について牧口が極めて鋭い関心を示していたことに注意を払う注釈者としては、やはり、いかに五月蠅くおもわれようとも、必要最小限の論及を試みておきたかったのである。「第十三章海洋、第一節現勢に於ける海洋」の冒頭部分を想起されたい。日露開戦を頻りに待望する同時代世論に抗して、平和主義貿易立国の理想を唱える牧口は、次のごとき主張を敢ておこなったのである。「夫の経済学者が『国』なる語に代ふるに『通商団躰』なる術語を用ふるも、畢竟此意味を表はさんとするもの。此点に於て文明国と云ひ、未開国と云ふ、単に上級の製造品を販売すると、下級の粗製品を販売するとの差のみ、行商と居商との別のみ。されば我大日本帝国の如きも此経済上の大市場に於ては、僅に大海洋通り北二十一条より五十一条に、東百二十丁目より百五十六丁目に跨る、二万七千余坪の凸凹多き細長き場所に、見すばらしき商店を構へたる、而して端坐店頭火鉢を守り、呑気に煙草を薫らして来客を待つ、四千万の番頭を有する桜印の濃簾下げたる生糸屋、御茶屋兼雑貨商店たるに過ぎずなれり。然り而して海洋は実に此の市場に於ける至便の通路たり、唯一の公道たり。世界の大市場も畢竟此通路の開通によりて生ぜしなり」（初版本二七五～六ページ／本全集第一卷二一八～九ページ）。大日本帝国なんぞと威張り散らしてはみるものの、現代国際貿易世界においてわが日本が場所を占めているのはせいぜいのところ「生糸屋、御茶屋兼雑貨商店たるに過ぎ」ないのであるから、われわれ日本人たる者、あまり横柄驕慢な態度を執るべきではないと、そう牧口は主張している。そして、この反時代的主張は、反時代的であるがゆえに却って一九九〇年代の今日にむかって正当性や合法性を保持しつづけていると言うべきである。この「第二十章植物、第二節栽培植物と人生及地」のセクションにおいて「工芸製造用植物」のひとつに「茶」を選び上げて記述を始め、かつ「本邦に於ける重要輸出品の一にして、全国に於ける産額八百五十万貫目に達し、其輸出額は八百万円に上れり。其販路の主要なる北米合衆国及び加奈陀地方なり」との言及に差し掛かったとき、若き牧口の脳裏には、世界貿易史のなかで茶（紅茶）が演じた役割の「光彩と闇黒、との鮮やかな対照が思い描かれてあったのではなかったか、と推臆される。この点で、わが牧口常三郎は厳正なる歴史科学者であると同時に、未来を見透す能力に恵まれた冷徹な予言者でもあった。本補注執筆者が敢てながながと中国古代・中世およびイギリス近世・近代を中心とする「茶の歴史」を準る試みを辞そうとしなかった所以である。なにとぞ御諒解を賜わりたく、重ねてお願い申し上げる。

30 煙草（九二ページ、注1） 脚注において言及したとおり、「たばこ」（烟草・煙草・萁）という単語およびこれに係る語彙（煙草入れ・煙草盆・煙草銭など）は、日本では夙に近世初頭（十六世紀半ば）から使用されていた。もちろん、こんな事実はちっとも自慢にならないけれ

ど、しかし、事実は事実として、やはり、客観的に正しい知識を^{たしか}検め且つ習得するほうが望ましい。以下に、秀れた文化史家加茂儀一が執筆したコラム^{ふう}風小文章「喫煙の歴史」(小学館版『万有百科大事典 19・植物』〈一九七二年十月刊〉所載)のなかの必要個処を引いておこう。――

喫煙の歴史

古代エジプト人は太陽や火を崇拜し、その火によって芳香のある種子や葉をくゆらし、その煙を神聖視し、その煙を吸引したり、患部にあてたりして治療にも用いた。ギリシア人もその煙でぜんそくをなおしていた。

タバコによる喫煙は古代メキシコにその起原を發し、西暦紀元の初めごろには、太陽崇拜のマヤ文明では僧侶が原産のタバコの葉をパイプでくゆらし、その煙で祭壇をきよめ、その葉の汁を治療に用い、すでにかぎタバコ、かみタバコ、葉巻タバコも利用されていた。そして喫煙の風習はそこから北米南部や西インド諸島へも広まった。

一四九二年コロンブスの一行が西インド諸島に上陸し、土人から喫煙のもてなしを受けたのが旧世界人がタバコと喫煙とを知った最初である。そして一行の海員や、その後の渡来者がその葉と喫煙をヨーロッパに紹介し、苗は一五六〇年代にスペインやポルトガルにもたらされた。最初はタバコの木はその花の觀賞のために栽培され、また葉やその汁は医薬として用いられたが、海員の間では、喫煙や、かぎタバコや、かみタバコが広がっていた。

一六世紀の中ごろにリスボンからフランスへタバコの葉が初めて移入され、医薬として用いられたが、その後ここでは喫煙は無作法として貴族社会ではきらわれ、ルイ十四世の宮廷でもかぎタバコが流行し、その容器が工芸品として發達した。フランスより数年おくれて、イギリスに新大陸から海員を通じてパイプタバコが伝えられたが、一六世紀末では喫煙はまだ珍しかった。一七世紀になって喫煙が流行し、タバコ店が方々にできたが、タバコの値が高く、そのために国民が浪費した。それを不愉快に思ったジェームズ一世(在位一六〇三～二五)は、「喫煙への挑戦」の勅令を布告して、喫煙を野蛮人や悪魔の行為として大反対しタバコに重税を課したが、喫煙の風習はかえって盛んとなり、ことに一六六五年の疫病流行のとき、喫煙者がそれにかからなかったという伝えが、この風習をさらに助長した。以来アメリカのバージニアから盛んにタバコが移入され、喫煙クラブができ、そこが社交の中心となった。

.....

東洋では日本に最も早く、新大陸から直接、喫煙がもたらされた。その移入者はポルトガル人あるいはスペイン人であり、移入の時代は天文年間(一五三二～五五)あるいは天正年間(一五七三～九二)といわれている。喫煙は直ちに全国的に普及し、一七世紀初めには婦女子もその風習に染まっていた。日本では最初からきざみタバコだけをうい、これをきせるで吸っていた。幕府は火災の原因であるとしてたびたび禁煙令を出し、その栽培をも禁じたが、効果なく、かえって粋をこらしたタバコ入れやタバコ盆がつくれ、良質のきざみタバコを産出し、「想思草」「糸煙」「反魂煙」という名で売り出され、大奥をはじめ、花柳界、演劇界にも普及し、喫煙は日本人の日常生活に密着した。朝鮮へは文禄、慶長の役(一五九二～九八)のとき日本からきせるによる喫煙が伝えられた。

中国へは一五六九年メキシコからスペイン人によってルソン島へもたらされたタバコが一七世紀の初め福建省を経て入ってきた。最初ここではタバコは医薬用であったが、喫煙がマラリアの予防にきくとされた結果、一七世紀前半には全国的に広まった。ここでも禁煙令がたびたび出たが、その効果はなかった。そして一七一五年にはヤソ会の宣教師によって清朝にフランスのかぎタバコが献上されて以来、上流社会に広まり、さらに一八世紀の初めごろにはペルシアからインドを経て中国へ水ぎせるが移入され、各地へ広まった。一方、中国のタバコは一七世紀末以来東部シベリアに

進出したが、そのころシベリアに西方から進出してきたイギリス商人のタバコと市場において出会い、競争した。その結果、ロシアは中国タバコの販売を禁止した。しかしこの東西からのタバコの進出の出会い、一四九二年に新世界においてヨーロッパ人によってタバコが初めて知られて以来、一五〇年余りで世界を一周したことを意味している。 (加茂 儀一)

じつに興味深いエッセイであり、これを読み進めれば、近世日本社会がアジアのどの文化圏にも^{さきが}魁けて煙草を輸入し且つ独自の喫煙文化を創出した事実を跡づけ得るし、一方また、近世中国商人とイギリス貿易商とが東部シベリアで熾烈な市場競争を演じたことにより《タバコの世界一周》が実現された事実をも^{なぞ}準り得るはずである。茲まで知り得たら、日本上陸後の煙草の普及プロセスのありさまを概観しておきたい気持ちに誘われる。そこで、朝倉治彦・安藤菊二・樋口秀雄・丸山信共編『事物起源辞典—衣食住編—』(一九七〇年三月、東京堂出版刊)の必要項目に当たってみたと、斯う見える。——

わが国に紹介されたのは、天文一八年(一五四九)、フランシスコ・ザビエル渡日に始まるといわれ、栽培は天正年間と称されているが、記録では慶長一〇年長崎桜馬場に植え、のち山城の花山、大和の吉野に移植、鹿児島では慶長初年指宿に^{いぶすき}植えはじめ、その種を島津氏が近衛家に贈り、それを花山に植えたとされている。慶長四・五年ころ、葉たばこ一枚銀三匁ほどであったという(『長沢聞書』)。秀吉は慶長一二年・一四年には厳重な禁令を出し、以後家康・秀忠も禁煙令を出したが、しだいに普及し、寛永末期には禁令を解除した。このころの喫煙法は、葉を巻き、のみ口に紙を巻いたり、竹の筒を使用したりしていた。天和三年ころの産地としては、上野国の高崎・岩崎・石原、甲斐国的小松葉袋、信濃国の生坂・井上、陸奥国の田代・仙東・白石、常陸国の赤土、大和国の吉野、丹波国の笹山・福知山などが有名であった。享和に入り、諸藩で財政窮乏を助けるため、栽培を奨励し、寛永年間日本橋付近に八軒あった問屋は二七軒に増加した。

徳川時代のたばこは、もっぱら刻みたばこであるが、それに伴って、^{きせる}、^{きせる}入れ、煙草盆などに意匠をこらしたものが作られた。

維新後は明治二年(一八六九)にはじめて、東京麴町の上田安五郎がつくった国産紙巻タバコがお目見えした。

その後岩谷商會が口付の金天狗・銀天狗・赤天狗などの製造をはじめ、二三年には千葉商會の牡丹たばこ、二四年ごろは京都の村井商會がアメリカ産の葉で、ヒーローという両切を売り、同商會はピンヘッド、サンライズなどの名で、口付たばこをも売り出した。たばこ税は九年一月から実施され、三一年一月専売局が創設され、爾後専売制がしかれた。

官製の口付きタバコは「敷島」「山桜」「朝日」「大和」などいずれも二〇本入れであった。戦前にはおなじみの「ゴールデン・バット」が明治三九年九月一日から発売された。(安藤 菊二)

——タバコの文化誌を知ったあとは、この補注の^{めく}めくりとして^{かた}型どおり、の植物学的解説記事を書き列ねておく。タバコは、学名 *Nicotiana tabacum* L. で、ナス科の草木。原産地の熱帯アメリカでは多年生(二年～三年生)であるが、温帯では一年生となる。草丈は二メートルにも達し、全株にねばねばした腺毛を密生する。葉は、初めは根出葉のみであるが、夏に茎が伸びて高さ一・五～二メートルになるとその上に葉を互生する。この葉は楕円形または卵形をしており、鋸歯は無く、長さ三〇センチメートルぐらい。葉柄は全く無いかあるいは短く、もとの部分で半

ば葉を抱く形態をとる。花は、茎のさきで分枝して、淡紅色の、狭い漏斗状^{ろうとじょう}の筒形花を多数咲かせるが、夏のあいだ、昼間だけ開いて夜は閉じてしまう。萼片^{がくへん}は五個あって短い。花冠の頂端部は五裂し、裂片は平たく広がって先端が尖っておりこの尖った部分はより濃厚な紅色を呈する。花の筒は長さ三〜四センチメートル、その中に五本の雄蕊^{おしべ}と一本の雌蕊^{めしべ}とを擁する。果実は卵形の蒴果^{さくか}であり、萼の中に包まれて、微細な種子を多数生じる。種類について触れると、タバコ属は五〇種ぐらい（学者によっては、一〇〇種以上あると主張しているが）を含み、その大部分がアメリカ熱帯地方の原産で、二〜三種がマレー諸島およびオーストラリアに自生する。このうち、喫煙料にするために栽培されているのは、ニコチアナ・タバクム *Nicotiana tabacum* L. とニコチアナ・ルスチカ *Nicotiana rustica* L. との二種類で、この両種とも南アメリカのアンデス山脈高地地方の産であるとされる。亜熱帯の気候を示す地域の野生種を起原とし、細胞遺伝学的研究によれば、二つの野生種からなる異質倍数体であるとされるから、したがって、栽培タバコの起源はこの付近であり、タバコが亜熱帯または暖帯の作物としての特徴をもつこともよく理解し得られる。ニコチアナ・タバクムは古くからいろいろに分類され、葉巻用として葉幅の広い品種がトルコ・キューバ・フィリピンなどに多く栽培され、巻き煙草用として葉幅の狭い品種が世界各地で栽培される。なお、ニコチンのもつ有害性については昔から常識になっていたが、最近では添加物との関わりから発癌の危険性が注意されるようになった。そして、一九七〇年代以降の全世界的傾向として「タバコ公害」や「嫌煙権」が市民運動の一翼として取り上げられるようになったこと、一方で成人女性喫煙者の増加や未成年喫煙が新たな社会問題となりつつあること、などの諸事項にも、是非とも触れておかなければならないであろう。

31 藍（九二ページ、注2） アイ（藍）といえば、ふつう、タデアイ（蓼藍）*Persicaria tinctoria* (Aiton) Gross をさす。タデ科の一年草。日本にも古く大宝年間（七〇一〜四）に中国から輸入されたとされ、染料植物として盛んに栽培された記録も残るが、原産地を尋ねていくと中国よりはむしろインドシナ、すなわち、こんにちひろく東南アジアと呼んでいる地域全体にまで遡ることになるという。草丈は六〇〜八〇cmで、一見イヌタデに酷似しているが、それよりも大形である。茎はまるくて赤味を帯び、上のほうに枝が出る。葉は長楕円形をしており、全縁、無毛で、短い柄があり、互生する。この葉を傷つけると藍色に変色したり、刈り取って乾燥すると暗藍色^{あんらんしよく}を呈したりするので、他と区別する目印になる。夏になると穂状花序をつくって開花し、薄紅^{うすあか}い小さい花がたくさん咲くが花弁は無く、五枚の萼片^{がくへん}があり、六〜八本の雄蕊^{おしべ}をもつ。果実は三稜^{りよう}を有する長さ二mmほどの卵形で、これが成熟すると黒褐色になる。さて、染色法だが、これには葉を乾かし、積み上げて二、三ヵ月発酵させて作った藍玉^{あいだま}というものを使う。小学館版『万有百科大事典・19植物』の第一ページをひらくと、こう見える。「【藍染め】アイの葉はインドキシルの配糖体インジカンを含む。これを温水で抽出し、放置しておくとおレンジ色のインドキシとなる。さらに空気を吹き込んで酸化させるとインジゴ indigo（藍）が沈澱する。インジゴは水に溶けないので、生葉中にはインジカンとして含まれ、染色の際には還元して水溶性にする。

藍染めの工程は、まず葉を採集して細かにきざみ、室内に積み重ねて発酵させると二～三か月で黒い泥状の藍玉（^{あいだま}玉藍）ができる。これは二～一〇%のインジゴを含むが、木炭と石炭とふすまを混ぜ、水を加えてかき回すと、ふすまのでんぷんが糖化して乳酸発酵を起こし、インジゴを還元して水溶性のインドキシルとなる。この液の中に布地を何回も浸してからよくしぼって空気中で乾燥すると、インドキシルが酸化されてインジゴとなり、染色が完了し、水洗しても色が抜けない。一九世紀末にインジゴが化学的に合成されるようになってから天然藍の需要は減少したが、耐久力が強く色調が優雅なため、今日でも高級品の染色に用いられる。〈佐藤正己〉と。

——以上で、アイないシタデアイに関する概略的知識を得ることが出来たが、もうひとつ、どうしても言及せずに済ますことの^{かな}能わぬ事項が残っている。すなわち、天然藍の原料には、タデアイのほかに、リュウキュウアイ（別名をキアイ〔木藍〕と称して、タデアイをクサアイ〔草藍〕と呼ぶのに対比させる）*Strobilanthes flaccidifolium* Neesというキツネノマゴ科の木本（正しくは、多年生の草木）も用いられた、という点に触れたくおもう。大井次三郎著『新日本植物誌・顕花篇』に当たったところ、キツネノマゴ科イセハナビ属の項に「リュウキュウアイ——多年草、乾けば黒緑色となる。茎は高さ三〇—七〇cm、やや太く、少し分枝し、鈍稜あり、幼時は褐色の微軟毛がある。葉は倒卵長楕円形または卵状長楕円形、長さ一一二cmの柄とともに八一—二〇cm、幅三一—六cm、急鋭頭で微鈍端をなし、基部はしだいに細まり、凸点の低鋸歯または波状歯あり、上面は無毛、明らかでない結晶線あり、下面は幼時の脈上に褐色の微軟毛を疎生し、側脈は五一—六対。花は枝頂にまばらな花穂をなし、無梗、苞は葉状で小形、早落する。萼は一一—四cm、一裂片はときには他より大きい。花冠は長さ四・五一—五・五cmで、淡紫色をなす。——VIII - IX——九州（南半）、沖縄にはえる。——台湾、中国、インドシナ、インド。」とみえ、純粹なる科学的記述を旨とするこの著書に相応しく応用面の^{こと}事柄には何も触れられていないが、この植物の枝葉を刈り取って加熱法または発酵法で処理するとインジゴの浸出に成功することは昔から知られていた。ひるがえって、『人生地理学』第二十章植物の、ここの段落の第六行目に眼を遣ると、「本邦に於けるものは、^{ひび}蓼藍及び^{かきわ}山藍と名くる二種にして、^{ちよう}山藍は薩南群島及び琉球諸島に産し、^こ蓼藍は阿波国、吉野川沿岸の平野を主として、中国、九州及び関東地方に多く産す」と叙されたセンテンスに出会う。茲に謂うところのヤマアイ（山藍）は前掲リュウキュウアイをさすのではないかと愚考する。というのは、同じく『新日本植物誌・顕花篇』に徴するに、ヤマアイはトウダイグサ科ヤマアイ属に含められる植物で、ぜんぜん別の種だからである。「1. *Mercurialis leiocarpa* Sieb. et Zucc. / ヤマアイ——ほとんど無毛の多年草、根茎は長く伸長する。茎は直立、単一で数対の葉を対生し、基部の節二—三個は葉をつけない。葉は各対、やや大小あり、卵状長楕円形、薄質、鈍鋸歯があり、鋭頭、基部は円形、上面および下面脈上にしばしば粗毛が散生し、長さ七一—二cm、幅二・五一—五cm、柄は長さ一・五一—三cm、托葉は離生、やや宿存し、披針形、反曲し、長さ三一—四mm、膜質。穂状花序は腋生、有梗、数個ずつ束状につき、雄花を疎着し、雌花序は上部の葉腋にあり、少数の花をつける。雄花は多数の雄蕊がある。蒴果は二個に分れ、各々球形、径約四mm、さらに二片に裂開し、蒴片は少数の硬突起がある。——IV - VII——本州、四国、

九州、沖縄の山地、樹林中にはえる。——台湾、朝鮮、中国、インドシナ。」トウダイグサ（燈台草）は草丈三〇cm内外の越年草で、これを傷つけると白い乳のような汁を出すのが特徴で、形態からしてもリュウキュウアイとは全く異なる。藍染めの原料となるのがアイでなければならぬから、牧口がここで言及している「山藍」とは、やはり、リュウキュウアイをさすと考えるのが無理ない推論だとおもうが如何。本補注担当者は、もちろん、自説に拘泥したりはしない。自分の考えが誤っていたら、いつでも撤回すべきだとおもっている。

ところが、さらにもうひとつ、困ったことには（事態を混乱させることには、と言い替えるべきか）「キアイ（木藍）」の名で総称される植物のなかにマメ科コマツナギ属の幾つかが含まれるので、木藍と山藍とは同一植物だなどと単純な扱い方は出来ない。『万有百科大事典・19植物』の「キアイ [木藍]」の見出しを読み辿っていくと、その最終記事に「インドアイまたはキアイと総称されている天然藍の原料植物は、マメ科のコマツナギ属 *Indigofera* に属する数種で、最も古い歴史を有するキアイは、インド北部に産する *I. articulata* Gouan で、紀元前二〇〇〇年ごろからエジプトで染色に用いられた。その後インド南部からタイワンコマツナギ *I. tinctoria* L. が発見され、染色に利用された。〈佐藤正己〉」とある。キアイと呼ばれる植物には、前述のものとは別に、マメ科コマツナギがあるとわかってみれば、三たび『新日本植物誌・顕花篇』を^{はん}検しなければならなくなった。「1. *Indigofera pseudo-tinctoria* Matsum. /コマツナギ——伏毛がある。高さ三〇—一五〇cmの亜低木、枝は数が多い。葉は七—九個の小葉からなり、長さ四—八cm、やや短い柄がある。小葉は長楕円形、両面はまばらに伏毛があり、下面は粉白色、長さ八—一二五mm、幅五—一二mm。托葉は微小、針状、早落、小托葉は微小。花序は短梗があり、梗とともに長さ四—一〇cm、やや密に花をつける。花は長さ約四mm、淡紅色または白色。萼は白伏毛あり、長さ約二mm。莢果は狭円筒形、真直、やや下垂、長さ二五—三〇mm、幅二・五—三mm、短伏毛がある。種子は数個、楕円形、緑黄色。——VII - IX——本州（中部以西）、四国、九州の原野に最も普通にはえる。——中国。」とあるのは、すくなくとも、牧口記述の謂う「^{せつぜん}蓼藍及び^あ山藍と名くる二種」と異なる種たることを截然と明かしている。

最後に、その牧口記述の段落末尾を^{しめくく}め括るところの「蓼藍は阿波国、吉野川沿岸の平野を主として、中国、九州及び関東地方に多く産す。年々凡そ二千万貫を産すれども全国の需用に不足なれば年々印度より凡五六十万円価の輸入を仰げり」というセンテンスについて考えねばならない。これについても詳述したいのはやまやまでであるが、すでに余白が無い。江戸時代に最も広く使われた「^{そめぐさ}染草」（染色原料）は藍と^{べにばな}紅花との二つであるが、このうち、藍は阿波国（徳島県）を中心に生産され、このほか筑後・山城・摂津・武州・信州などにも藍作が発達した。阿波藍は、江戸末期までに殆ど全国的に普及し、^{こんぞめ}紺染には欠かすことの出来ない染料として重んじられた。藍作りの工程は、^{はしゆ}播種→間引き→本畑への移植→管理→刈り取り→藍切り→葉茎の選別→乾燥という順序ですすめられ、こうして得られた葉藍が俵に詰められて売りに出されるのである。この葉藍を^{すくも}発酵させて染というものをつくるが、ふつう葉藍百貫につき薬五十貫を製造できる割合になっていたという。阿波藩が一種の^あ藍専売、(厳密にはそう断定するのは正しくないのだが)

をつうじて藩・民ぐるみの独占利潤を獲得した事情に関しては、後藤捷一の筆に成る児玉幸多編『体系日本史叢書 11・産業史Ⅱ』（一九六五年四月、山川出版社刊）所収「第九章織織業、第二節染料、I 藍／阿波藩の藍政概略」を参考にしたいとおもう。「阿波の藍作は天正十三（一五八五）年、蜂須賀家政入部以前すでに存在していたが、蜂須賀領となって以来、漸次発展を示した。藩の奨励・保護は時代とともに耕作栽培から藍玉製造はもちろん、魚肥・藍砂・搬送・移出・販売の最末端まで微に入り細を穿ち、網の目のように張りめぐらされた。阿波藩庁執政の手もとに、藍方が創置されたのが寛文二（一六六二）年といわれているが、享保十八（一七三三）年、藍方御用場（藍方役所と通称）が独立し、明和四（一七六七）年、藍方代官所と改称され、以来幕末にいたるまで阿波藍生産・販売の統制本部を形成していた。その前後から江戸藩邸と幕府との折衝が緊密化し、のち文化十二（一八一五）年大阪市場において、蔵物、の資格を容認されて以来、大阪蔵屋敷（阿波役所と称した）が出先機関としての任務を強化した。それはともかく御用場設置とともに、藍作耕地の調査栽培ならびに売買税、製藍者の調査および藍玉抜け荷・葉藍為改役などの制度を設け、元文四（一七三九）年前後には藍玉口銀所や移出向け売人の調査が行なわれ、無届けの売人を禁止した。こうして寛保元（一七四一）年には御用場自体の経済は独立するにいたり、宝暦四（一七五四）年、玉師株、を制定して冥加銀を徴収しようとして、同六年、藍玉一揆の勃発にあい、統制事業はしばらく後退を余儀なくされた。越えて明和三（一七六六）年、いうところの明和の中興は、一面大坂問屋資本の制圧を排除するにあったが、他面玉師株・藍種子制道役・寝床改役・抜荷制道役などの実施によって、統制は本格的に軌道にのったのである。」

阿波国の吉野川流域に阿波藍の耕作栽培が盛んとなった理由は、もともと気候や土壌が適していたうえに、しばしば起こった吉野川の氾濫が諸種雑多な有機物を含有した細土を沖積したことが与って力があった、と見るべきである。ただし、藍の栽培はもっぱら麦との間作仕法に拠っており、この地方の封建領主である蜂須賀氏からすれば何よりも食糧確保が第一目標であったことも見落としてはならない。土地本位の経済システムを揺るがして、やがて、都市を中心に貨幣本位の経済システムが発達する段階に至ると、蜂須賀藩為政者は、次第に台頭しはじめた領内富農や豪商たちの蓄積資本と巧みに連携するよう明敏なる政策転換をおこない、藍作りという地場産業に力を注いだため、幕末から明治期にかけては旧藩政当事者も中小農民層も一体になって相当程度に富裕な経済圏を形成することに成功した。そして、その経済的繁栄は大正期前半（第一次世界大戦直後という言い方をしてもよいが）まで続くのであるが、ついに、日本の染織業界全体を直撃したヨーロッパ化学染料技術の進出の刃を受けて阿波藍の没落する日がやって来る。じっさいに、徳島県の藍製造は、大正期後半、化学染料の出現により潰滅してしまった。

しかし、植物からとる染色原料が没落の日を迎えなければならなかったのは、世界的な規模で一九〇〇年前後に生じた社会経済現象ないし科学技術文化的傾向であるに過ぎない。歴史的必然の法則（ただし、現在では、斯様な言い方は流行らないが）に遵って来るものが来たというに過ぎない。左に示すのは、育種学＝農業技術理論の立場から《藍の没落》に言及した山口彦之（東京大学農学部教授）の力作『作物改良に挑む』（一九八二年十一月、岩波新書版）からの抜萃である。

同著「Ⅱ作物の生い立ち／消えてしまった作物」のセクションにきけ。

インジゴの没落 また、科学の進歩に伴い、化学工業によって安価に合成できるようになって、姿を消した工芸作物がある。染料を生産する樹木や草本があり、割合と最近まで染色用色素の大部分は植物からとられていた。おそらく葉、花卉、漿果しょうかに触れて偶然に着色したことから、色素を使うことが始まったにちがいない。

インジゴという暗青色染料をとる植物は羽状の葉と暗赤紫色の花をつけるマメ科植物で、アジアでは四〇〇〇年以上も前から知られている。英国がインドを植民地としていた頃には、インジゴの貿易は東インド会社の商業活動の一つとして重要であった。インジゴを含む植物として、日本や中国ではタデ科のアイが古くから栽培されていた。

ドイツの化学者ホフマンは、コールタールから抽出した物質の一つがインジゴから取れる物質と同じものであることを証明した。この物質は、青いものを意味するアラビア語「アン・ニル」から名をとってアニリンと名づけられた。ホフマンの実験助手であったパーキンは、後にロンドンの王立化学学校の教授となり、コールタールから合成キニーネ（抗マラリア剤）をつくることを試みた。アニリンの硫酸塩を試験管に少量入れて重クロム酸カリで処理した。黒い沈殿が生じたが、その大部分はアルコールに溶けて美しい紫色の液体となった。パーキンは、これをモーブと呼んだが、これは現在のモーベインという物質である。この美しい液体は染料の性質をもっていた。これがアニリン染料の始まりである。

この後、新しい染料が次々につくり出され、長い間使われてきた天然染料に完全に取って替わってしまった。人造インジゴがきわめて大規模に安価に製造されるようになったために、インドからのインジゴ輸出は止まり、インジゴの農園で働いていた何万人ものインド農民はたちまち失業してしまった。

アリザリンという人造染料もコールタールからつくられて、アカネの根からとれる天然染料に取って替わり、そのためにヨーロッパでアカネ栽培たづさに携わってきた農民は収入の多い作物を失ってしまった。アリザリンはアカネを意味するアラビア語の「ラザリ」または「アラザリ」に由来し、アカネの正統継承者であることを公言している。

紅花 日本でも古くから数多くの植物色素を用いてきた。その中で主なものを挙げると、赤い色素の茜（アカネ）、紅花（ベニバナ）、黄色の色素の紅花、黄柏（キハダ）、青い色素の藍（アイ）、露草（ツユクサ）、紫根（ムラサキ）などである。とくに徳島の藍、山形の紅花はその代表的なものであろう。アイは葉から暗青色の染料をとったが、ベニバナは花卉から紅色または黄色の色素をとる。

植物染料の藍（蓼藍）が没落せざるを得なかった歴史的推移を知っているわれわれとは異なり、牧口『人生地理学』が書かれた一九〇三年ごろの日本知識人すべてにとって、徳島県の特産品である藍に「突然の没落、がやって来ようなどという予見＝予想もなし得なかった。牧口自身も、全国総生産高を挙げて「年々凡そ二千万貫を産すれども全国の需用に不足なれば年々印度より凡五六十万円価の輸入を仰げり」というふうに、この地場産業の将来を楽観的に optimistically 展望し、まさか息の根を止められる日が近く到来しようなどとは思ってもみない書き方をしている。しかし、これは、牧口の過あやまちでもなんでもない。いや、はじめから誰かが過ちを犯したとか誰かが良い悪いかといった性質の事柄に属する話ではない。むしろ、誰ひとり予想も為し得なかった《技術革新》 technological innovation が生起するからこそ、社会全体が大変動に巻き込まれ、予

想も付かない新時代に突入してゆくのである。新時代といえば、『人生地理学』公刊後およそ十数年経た一九一〇年代末になると、アニリン染料をめぐる世界規模での熾烈なる技術戦争および貿易摩擦が現出しはじめるのである。第一次世界大戦後に日本染料業界全体が直面した大変動の嵐^{あらし}について、有沢広巳監修／山口和雄・中村隆英ほか編集『日本産業百年史・上』（一九六七年四月、日本経済新聞社刊）の叙述に聞こう。「大戦の終了と同時にアニリン染料は約半年間に価格が四分の一に暴落した。そのきっかけは第一に大戦中日本の市場から締め出されたドイツの合成染料業界に代わって進出していたアメリカのデュポンの攻勢である。デュポンは戦後世界市場からドイツ染料業界の巻き返しにあって撤退を余儀なくされ、そのホコ先をようやく誕生したばかりのわが国の染料工業に向けた。そのために大戦終了の年には工場数九七、最高生産量七二〇〇トンに及んだ染料業界は大正九年の恐慌直後には生産でも工場数でも半分に収縮してしまった。戦時中法律をもって設立された『日本染料会社』と三井鉱山らの保護下に育った『三池焦焙工場』を除けば大部分はほんの小規模な工場であり、そうした小工場の大部分がこのとき潰れたのである。／政府はこの情勢をみて、関税面からの保護に乗り出し、大正九年合成染料に対する従量税を従価税に改め税率を三五％（従来は一二％）に引き上げた。効果はただちに現われてアメリカからの染料輸入量は四分の一に減った。しかしきびすを接してこんどはドイツ染料の攻勢が始まり、大正十三年には国内消費量の約八割をドイツ品で占めるようになった。国内同業者は同じ年、大阪と東京にそれぞれ『染料製造業者懇話会』を政府の行政指導のもとに結成した。／同会はもっぱらドイツ染料の輸入制限のための圧力団体として活動し、大正十五年に東西合併して『日本染料工業会』となった。大正十三年、政府はようやく農商務省令で合成染料およびその中間物の輸入を許可制としたが、これに伴って輸入量は四分の一に減った。こうした傾向は世界各国でもみられ、ドイツ染料業界も戦後不況の乗り切りと世界制覇の力を強めるためバディッシュ・アニリン・ソーダ会社、ヘキスト社、バイエル社など八つの化学工業会社が一九二五年イー・ゲー染料株式会社へと大合同をとげ、世界最大の化学工業会社の一つを形づくったのである」（第Ⅲ編動乱の時代、各論・化学——花開く内外の技術）。タデアイ（蓼藍）に取って代わった日本のアニリン染料工業ですら、国際経済の秩序^{オーダー}の中で自由競争の圧力^きに曝らされたのである。日本の植物染料は「伝統工芸、ないし「趣味、の範疇^{カテゴリー}で生き残りを期するほかなくなり、じじつ、その方面で素晴らしい成果を挙げることとなった。

32 綿（九三ページ、注4）アオイ科ワタ属に入る植物の総称。英 cotton, 仏 coton, 独 Watte、学名 Gossypium。多くは一年生草本であるが、なかには背の低い木本性のものもあり、約四十種で構成されている。世界の熱帯地方および温帯地方に自生するけれど、長い栽培の歴史のなかで原生種の間で交雑がおこなわれたために、それぞれの種や品種の境界を明らかにすることは実際^{じつさいじょう}上きわめて困難である。ただし、ごく近年になって細胞遺伝学や栽培植物起源学の秀れた研究報告が出され、こんにち最重要の繊維植物として世界じゅうで栽培されている有用品種はすべて新大陸ワタを起源とするという「目の醒めるような、新事実が明らかになった。繊維とし

て利用されるのは、種子に生じた毛の部分で、殆ど純粹にセルロースから出来ている中空な単細胞であり、その長さは種類によってたいへん違いがあり、九～五一mmの変異がある。また、その性質も、ねじれ易くて紡績用に向くものと、ねじれの度合いが小さくて脱脂綿や詰綿^{つめわた}に利用されるものと、両者のあいだに際立った差異が見られる。それら最も有用な品種であるアジア棉・海島棉・陸地綿・南京棉などなどについては後述するとして、そのまゝに形態学的説明を済ませておこう。ワタは、ふつう、高さ六〇～八〇cmほどになり、直立する茎から疎^{まぼら}に枝分かれして長い柄を有する掌状葉を互生する。葉柄の基部には小型の托葉を左右に一個ずつ有する。また、葉の裏面には、中央の一～三個の葉脈の基部に沿って蜜腺^{みつせん}（葉腺）のあるのが見出される。花は、茎の上に、葉の付着点とは反対の側に出て咲き、ふつう黄色・白色・紅色を呈し、大形である。品種によっては花底に紫褐色または紫紅色の斑点を有するものがある。一日花で、朝開いて夕べに閉じてしまうが、澗^{しほ}むさいには黄色の花も白色の花も紅紫色に変ずる性質を持つ。花梗の上端に、花に接して大形の包葉が三個あり、広卵形で底部はハート型をなし、先端に鋸齒を有し、内面または外面に一個の蜜腺を有することがある。花の中には単体雄蕊^{ゆうずい}の筒とそれを貫く^{めしべ}とがあり、花柱は雄蕊の筒の上に出て三～五裂する。蒴果は包葉につつまれ、尖頭卵形をなし、俗に「モモ」と呼ばれるが、これは色と形とがズバイモモの果実に似ているからだろうと考えられる。この蒴果が成熟して乾くと、三～五片^{さくかい}に裂開し、有毛の種子をはみ出させる。種子の表面には、「綿毛」Floss と呼ばれる純白色の長い繊維のものと、これとはべつに「地毛」Fuzz と呼ばれる同じく白色ではあるが短い繊維のものと、この二種類の毛が生えている。この二種類の毛は、種類によって、種子の全面を覆っているものもあれば一部分しか覆っていないものもあり、稀れに野生種のなかには種子の表面を毛が全然覆っていないものさえあり、また種類によって綿毛が種子から剥脱し易いものとこれとは反対に容易に剥脱し難いものがあり、綿毛の品質や長さや色光沢に至ってはそれこそ千差万別といった観を呈する。綿毛は、いわゆる綿（綿糸紡績をも含む）の原料で、単一の表皮毛であり、乾燥すると平たくなって多少よじれ、顕微鏡でのぞくと繊維がテープ状になっているの見える。なお、種子の地毛は、紡績用にはならないが、填充物^{あてもの}とか、フェルト用の混綿とかに使われる。種子から採れる油、すなわち綿実油 cotton seed oil は半乾性油で、マーガリンや石鹼などの原料とする。

そこで、いよいよ、種類別の記述に入らなければならない。(一) アジアメン（亜細亜棉）*Gossypium herbaceum* Oliver は、最古の時代からインドで栽培されていた東洋の在来種で、低温多湿の気候に適するところから現在でもインド・東南アジア・中国・朝鮮半島などで広く栽培される。日本でも昭和戦前まで西日本から関東地方にかけて普通に栽培されていたが、これは、このアジアメンという種類が他のものに較べて早熟で、高緯度の地域でも栽培可能だからである。草本性で、葉は三～五個の裂片をもち、苞は小形でその基部に融合が見られず、欠刻も浅く且つ少数で、苞内の蜜腺はよく発達しているのに対して苞外の蜜腺は退化している。花は黄色がふつうであるが、白色や紅色もあり、花卉に斑点の有る無しによって幾つかの品種群に分けられる。蒴果は小形で、下に向いて生じ、熟すると三片に裂開する。種子も小形で、地毛は種子の全面に

密生し、いっぽう、綿毛は種子から容易には分離せず、短かく且つ太く、ねじれ度（撚曲度）がちいさいので、紡績用としては不適當であるが、そのかわり張力が強い^{つめわた}ため詰綿や脱脂綿の製造に最適である。繰綿歩合（^{くりわたぶあい}種子から剥脱した綿毛を繰綿と呼び、この繰綿の全重量〔種子の重さをも含む〕に対する割合を繰綿歩合と呼ぶ）は二五～三〇%。

(二) カイトウメン（海島棉）*Gossypium barbadense* L. [Sea island cotton] は、別名アメリカワタといわれるように、熱帯アメリカ（中米）の原産と推定される種類で、コロンブスの新大陸発見より以前に西インド諸島で盛んに栽培されていた。ただし、現在ではエジプトで最も大規模な栽培がおこなわれており、あべこべに北米カリフォルニア・アリゾナ両州に^{まくづけ}作付を試みたが^{かえ}却って不成績に終わっている事実に注意する必要がある。日本にも明治初年に輸入試作されたが、あまり成功しなかった。けっきょく、カイトウメンの栽培にとって、その生育の初期期間ちゅう相当の温度と湿度とを不可欠とし、しかも果実の成熟時に一転して乾燥した空気を不可欠とするところからエジプトのような気候条件がいちばん適しているということになる。一年生の草本で、^{くさたけ}草丈は二mにも達し、茎葉ともに殆ど無毛、葉は三～五裂。苞葉は大形で欠刻が深く尖って基部は融合せず、花は鮮黄色の花弁をもち、花底に紫斑を有する。蒴果は熟すると三片に裂開する。種子には地毛を欠き、綿毛のみ付ける。この綿毛が分離＝剥脱しやすく且つ白色の光沢を有し、まさに品質優良と称すべきであるが、収穫量の点でやや劣る。^{まきいと}捲糸用・紡織用に適している。

(三) リクチメン（陸地棉）*Gossypium hirsutum* L. [Upland cotton] は、古くからペルーやメキシコで栽培されていた晩生種で、現在では北アメリカにおいて最も普通に栽培される。草本性で、生育期間ちゅう多量の太陽光線と高温度とを必要とする。したがって、アメリカ南部の棉作地帯において、紡績機械の発明に対応すべき大規模な企業栽培を推進するためには歴大な労働力がますます必要となり、ついにアフリカから大量の黒人奴隷を無理矢理に拉致するという非人道的手段さえ取られ、これがこんにちアメリカ合衆国の恥部ともなっている《黒人差別》の出発点となっていることは周知のとおりである。さて、リクチメンの植物形態学的記述をつづけると、^{はばひろ}葉は幅広のハート形で三～五片に深く裂けており、苞葉は大形で十個ぐらいの深い欠刻があり、表面には黒色の油点があり基部が互いに融合し、苞外の蜜腺はよく発達しているけれど苞外の蜜腺は退化してしまっている。花は大形で、花弁は白色または淡黄色。蒴果もこれまた大形で、上向して生じ、熟すると、四～五片に裂開する。種子もまた大形、地毛が全面に密生し、綿毛は長くて白く撚曲度が高いにもかかわらず張力が弱く、種子から剥脱し易い。繰綿歩合は三〇～四〇%と高く、紡績原料に用いられる。この種類も明治初年に日本に輸入試作されたが失敗に終わり、^{かえ}却ってそれより遅れて輸入した朝鮮半島や南満州において広地域の栽培に成功したが、さらに中国全土にも広く普及した。斯くの如くして、このリクチメンは現在では東アジアに広まったが、これはリクチメンのなかの早熟品種に限られており、在来種のアジアメンに比較した場合にはなお^{もつ}以て晩熟である、ということを見落とさないようにしたい。

(四) ナンキンメン（南京棉）*Gossypium Nanking Meyen* は、原産地がはっきりしないし、また野生種がいかなるものであるか不明であるけれど、東アジアから東南アジアを経てインド・中

中央アジア・アフリカに到るまで広い範囲で栽培されている。一年生草本で、葉は三～五裂し、稀に七裂するものもあり、裂片は先端が円くなっていて、裏面をみると有毛で小黑点のあるのがわかる。苞葉にも剛い毛が生えていて、五～七個の鋸齒を有する。花弁は黄色をしており、基部には紅紫色の斑点がある。種子には地毛が全面にあり、白色またはカーキー色をしている綿毛が剥脱し難い状態で付いている。この綿毛が脱脂綿や詰綿の原料として利用されるのである。

(五) このほかにも、ペルーメン（ペルー棉）*Gossypium peruvianum Cav.*、別名をアンデス棉と呼ばれる品種がある。ブラジルメン（ブラジル棉）*Gossypium brasiliense Cav.*（別名、カラボニカ棉）とかメキシコメン（メキシコ棉）*Gossypium mexicanum Tod.*とか、それぞれの地域に適した種類も多く知られている。

——如上の種類別記述をおこなった範囲のみにても、ワタと人類文明生活との関わりの緊密さ（あるいは、深刻さと言い直すべきか）、および合理性（あるいは、科学的法則性と言改めべきか）に、いやでも想到せざるを得なくなる。なにしろ、紡績機械の開発によって棉花の需要が急激に高まったことが導火線となってアメリカ合衆国南部に大量の黒人奴隷が強制拉致されるという人道上の問題が惹起したのである。また、それより以前、コロンブスの新大陸発見のこのかたアメリカ起原の多くの栽培植物（その代表的なものを列挙すれば、ジャガイモ・サツマイモ・トウモロコシ・カボチャ・インゲンマメ・トマト・トウガラシ・タバコ・ラッカセイなど）が旧大陸ヨーロッパ・アジア・アフリカへ持ち運ばれたが、それらに混ざって同じように旧大陸に移植栽培されたワタは、なんと驚くべきことに、各旧大陸の在来種を圧倒し去って奪ってこれに取って代わる推移を辿っていったのである。誇張でなしに、ワタ栽培史は、このままで直ちに人類精神文明の歴史と重なり合うと見ることが可能である。

この論題に関して、もうすこし、補足説明を付け加えたい。茲に、アメリカ起原のワタがどんな過程で亦たどんな生物学的根拠にもとづいてアジアやアフリカへ船載され試作され栽培され、けっきょく大成功を齎すこととなったか、という客観的事実を明らかにした素晴らしい書物が在る。京都大学農学部教授で、栽培植物起原学という珍しい部門を専攻する田中正武の『栽培植物の起原』（一九七五年十二月、NHKブックス）がそれである。著者自身の問題意識は、新大陸発見という稀有の（しかも、幸運なる）出来事によって新しい栽培植物が旧大陸に導入されたことにより、それまで不毛とされていた地域を農業生産地帯に変えるのに成功し、世界の食糧問題・人口問題を解決し得たが、今後はそうそう楽観的に構えてばかりはいられなくなった、遺伝子銀行の設置などの有効な方策を採るべきである、との方向を凝視して冴えわたる。しかし、当面、ワタが原産地たる中南米から船に載せられて海を渡り奪って旧大陸の在来種ワタに取って代わった人類文明史のプロセス（栽培とか品種改良とかの人類史の行為は、人間理性の自然に対する協力の成果である）を指で準るようによく明に追い求める田中の栽培学記述のほうにのみ、われわれの注意を向けねばならない。

同書「4 新大陸起原の栽培植物／五 ワタ」を抄出しよう。——

五 ワタ *…起原の解明は、大陸移動論、に有力な証拠を提供した…*

ワタのすべての種はアオイ科のワタ属に属し、二倍種と四倍種がある。

すでに述べたように、衣の原料として重要な位置を占め、現在世界で広く栽培されているワタは、新大陸起源の四倍性のワタである。細胞学的研究から、四倍性のワタは、一三対の大きな染色体と一三対の小さな染色体から構成されており、その大きな染色体は古くからアジアで栽培されている二倍性ワタと、小さな染色体は新大陸に自生する二倍性ワタとそれぞれ同型であることが判明した。従ってそれらの二倍性のアジアワタと新大陸ワタが交雑し、続いて染色体数の倍加が起こって四倍性ワタが生じたと推定された。ゲノム分析の結果はこの推定を証明した。

すなわち二倍種のアジアワタは、AA、二倍種のアメリカワタはDD、四倍種のワタはAADDゲノム型である。実際に一九四〇年にベースレイ (Beasley) とハーランド (Harland) が、同時に人為的にこれらの二倍種間の交雑を行ない、その染色体倍加によって四倍種の合成に成功し、既存の四倍性ワタと交雑した。その雑種の成熟分裂は細胞学的に正常を示し、それらの二倍種が四倍種の祖先種であることを実証した。しかしAゲノムを有する種は二つあり、またDゲノムは北米から南米の太平洋岸に一〇以上の種が自生している。従ってゲノム分析法では、どの種がその起原に関与したかを決定することは不可能である。

その後、米国のフィリップス (Philips) は、興味ある方法を用いてそれらを決定した。ゲノム分析法によって同じゲノム型とみなされても、必ずしもそれぞれの染色体に座位する遺伝子が全く同じとはいえない。この点に着目して、いくつかの形質を用いて四倍種ワタのAゲノムおよびDゲノムの染色体と全く同じ染色体に座位しているかどうか、その一致率を調べ、その頻度の高いものを祖先種とした。例えば、ある形質に関与する遺伝子が四倍種ワタのDゲノムの第一染色体に座位しているばあい、二倍種のDゲノムにおいても第一染色体に座位しているかどうかを調べ、多数の遺伝子に関して一致した頻度が高いほど、その二倍種が四倍種の起原に関与した確率が高いという推定を行なう。

このような分析を進めた結果、Aゲノムの由来した二倍種はヘルバセウム (*Gossypium herbaceum*)、Dゲノムのそれはライモンディ (*G. raimondii*) であるとの結論に達した、ヘルバセウムはアジアで古くから栽培しているワタで、アフリカ起原のもので、その野生型はアフリカ南部に自生している。一方、ライモンディはペルーに自生している。

AゲノムをもつアフリカのヘルバセウムとDゲノムをもつ南米のライモンディとが交雑した理由は、先に大陸移動論によって説明したとおりである。再び要約しておく、ワタ属の中心地はアフリカである。大陸が陸続きの時代にアフリカから各地に伝播し、AとDの両ゲノム種も現在の南米に分布していた。Aゲノム種が南米まで分布していたという証拠は、アフリカと南米の両大陸間に介在するケープ・フェルデ群島のサント・ファゴ島には、Aゲノム種に近い野生種が分布していることである。

新大陸の四倍種の栽培ワタは現在二つの種が知られている。それは、陸地棉、というメキシコおよびグアテマラを中心とする種ヒルスウトウム (*G. hirsutum*) と、ペルー棉、またはこの棉はその後西インド諸島まで伝播し旧大陸に導入されたので、海島棉、として知られているペルー、ボリビアを中心とする種バルバデンス (*G. barbadense*) である。両種とも旧大陸の栽培二倍種が一年生であるのに対し、一年生と多年生が存在している。筆者もペルーやボリビアの農家の庭先や路傍で、喬木を呈したワタの木をしばしば見た。

さてつぎに、この四倍種は同一起原のものか、別々に起原されたものが問題となるが、細胞遺伝学的研究は同一起原を示唆した。すなわちDゲノムをもつ種の中からライモンディを祖先種として決定したのと同一方法で、ペルー棉と陸地棉に対して、北米に分布するツルベリイ (*G. thurberi*)

と南米のライモンディをそれぞれ用いたばあいの遺伝子の座位する染色体の一致率を比較した。その結果、ツルベリイはいずれの四倍種に対しても祖先種の可能性を示す一致率がえられず、それに反し、ライモンディは両四倍種に対して全く同じ祖先種としての一致率を示した。このことは、ペルー棉と陸地棉は、ともにライモンディを祖先種とする同一起原種の可能性を示す。従って、ライモンディの自生地のパルーにおいて、四倍種が起原されたと考えられる。

考古学的資料によれば、メキシコのコスカトラン期（紀元前五、八〇〇年）の洞窟から陸地棉の蒴果が発掘され、それは明らかに栽培種という。ペルー海岸では、紀元前二、五〇〇年を境としてワタに関する資料が多数発掘されている。そのことからペルー海岸の初期の農耕の発達過程は、棉以前（プレ・コットン）と棉以後（ポスト・コットン）の二つの時期に分けられているほどである。このように考古学的資料は別々に起原されたことを示唆していることや、また陸地棉の野生種の豊富なことなどから、別々の祖先種から起原したとする説を唱える人もいる。

しかし生物学的研究の結果からみて、むしろ考古学的資料も、前述のように四倍種の同一野生種からそれぞれの地域で別個に栽培化された事実をよく説明しているとみることができる。ペルーよりも古い農耕文化をもつメキシコにおいて、ワタの栽培化を示す資料が早い時代に発掘されているのは当然であろう。

一方、織物が初めて出現した時期は必ずしも正確にはわかっていないが、旧大陸において最も古い織物は、Aゲノムをもつもう一つの栽培種アルボレウム (*G. arboreum*) の綿毛で織られたもので、古代インドのインダス溪谷のモヘンジョダロの遺跡から発掘された紀元前二、五〇〇年の銀の花びんの頸部にまかれている。新大陸では、ペルーの北部海岸のワカ・プリエッタの遺跡から発掘された同じく紀元前二、五〇〇年の蝶模様の美しいレースの一片が出土されている。そうすると四、五〇〇年前には古代インド人やペルーのインディオによって、ワタから織物をつくる技術が別々に発達していたとみてよい。

しかし、プレ・コロンブス時代に両大陸間に交流があったとする説の人々は、この織物の出現の同時性をその証拠としている。ワタは蒴果として知られる果実の中に種子を生じ、その種皮に毛をもっている。この毛は種子の自然撒布の役目をもつと考えられている。野生種は毛が短い、この毛に人間が着目して栽培の過程で明らかに織物を使う目的で長毛をもつものが選ばれたとみてよい。この綿毛は乾くとねじれる性質があるから、綿毛で糸を紡ぐことを考えたことは容易に想像できる。綿毛を使つての織物は、少なくとも紀元前二、五〇〇年頃と同じ年代に、新旧両大陸において始められていたことになる。

新大陸発見後、旧大陸の二倍種のアジアワタよりも毛の長い四倍種の新大陸ワタが導入され、アジアワタにおきかえられた。陸地棉の毛はペルー棉よりやや短い、温帯から寒帯に適応性があるために北米、ソ連をはじめとしてアジアではアジア棉におきかわって北中国、満州などの大生産地をきざいた。乾燥に適応性をもつペルー綿は西アフリカに導入され、その後スーダンやエジプトにおいてアジア棉とおきかわってエジプト棉やスーダン棉としての大生産地を確立した。アジア棉は多湿な気候帯に適応しているため、現在でも低緯度のインドなどのアジアの南方地域で栽培されている。

——よく考えてみれば、現在アジアに広く普及しているワタの種類も、現在アフリカにひろく栽培されているワタの種類も、おのおの大陸に昔から伝えられた在来種とは全く別のアメリカ起原のワタの移入だったとは、じつは、人類の知恵および努力の《凄さ》を証明する以外の何物なにものでもない。エジプト人がいつまでもアフリカ在来種より以外のワタを知らずにいたら、また、イ

インド人がいつまでもアジア在来種のワタのみに獅^し齒^がみ付^ついていたとしたら、近代産業社会の到来はもっとずっと遅れてしまったであろうし、もしかしたら、西欧社会の近代化（＝科学技術化）そのものが容易には現出しようもなかったであろうと推慮される。イギリスの綿製品技術の世界制覇を念頭に思い描くにつけても、あらためて、そのことに嘆息せざるを得ない。だが、茲^{こゝ}では深入りする余白がもう無い。

そこで、『人生地理学』の記述に戻って考えなければならないが、牧口は、まず、世界における主要産地に触れたあと、「本邦に於ては北緯三十八度以北には殆んど産せず。其最も能く産するを近畿及び中国地方とし、東海道に於ても愛知、山梨及び関東地方亦た頗る多し。全国の産額七百五十万貫に達す」と、一九〇〇年前後の日本の棉花産出に関する概略のスケッチをおこなっている。現在のもとよりのこと、明治後期にはワタの栽培を廃止してしまったので（ふつう、一八九六年〔明治二十九年〕四月の棉花輸入関税撤廃がワタ栽培農民に決定的打撃を与え、爾後、棉花はもっぱら輸入で賄うようになったと説明されている）、第二次大戦中に自給自足が叫ばれて部分的に増産された一時期を除けば、日本国内で綿畑の眺めや木綿加工^{シーン}の場を眼にすることは減多に無い。しかし、牧口が『人生地理学』を書いた時期にあつては、まだまだ、棉花栽培の図はきわめてありふれた農村風景の一部を成していたのである。日本の木綿の歴史を振り返ってみると、古く『万葉集』（七六〇～七八五年成立）巻第三所載^{きみまにげい}の沙弥満誓の綿を詠める歌一首「三三六しらぬひ筑紫の綿は身につけていまだは著^きねど暖^{あた}かに見ゆ」に出てくるのが文献的には初出だが、この綿は、繭綿^{まわた}（真綿）だろうという説や、葦^{あし}の穂^ほだろうという説もある。『続日本紀』（七九七年成立）をひらくと、慶雲三年（七〇六年）閏正月五日のこととして『『また、民部に収め貯ふる諸国の庸^{よう}の中の軽物^{かるきもの}、繩^{あしぎぬ}・糸^{いと}・綿^{わた}らの類^{たぐひ}は、今より以後、大蔵に収めて、年料^{ねんれう}を支度して、民部に分ち充てよ』とのたまふ』という記事に出くわすが、これも本当のワタであったかどうかということになると危^{あぶ}な^なか^しいとおもう。菅原道真編『類聚国史』（八九二年成立）に延暦十八年（七九九年）のこととして昆倫^{こんろんびと}人が三河国に漂着して棉の種子を伝えたという記事の抄録も見え、だいたい、平安時代に入ってくると中国から綿製品やワタの種子などが舶載されたと想像される。ただし、その普及は鎌倉時代以降ないし室町時代まで待たねばならなかったらしく、幾つかの文献史料に散見するにとどまる。戦国期になると、ワタは貴重な商品として全国に流通するようになるが、ワタ製品が兎にも角にも民衆生活のすみずみまで普及するのは江戸中期ごろだったと見てよい。江戸初期の農学者宮崎安貞の『農業全書』（一六九七年〔元禄十年〕成立）に紹介されているごとく、河内・和泉・摂津・播磨・備後は日本の五大綿産地として夙^とうに有名になっていた。江戸中期になると地方綿織業の興隆にともなう地域間分業も大幅に進行し、やがて織機を使って問屋制家内工業を推進する地方産地として伊勢・下野・伯耆・因幡・尾張・武蔵・甲斐などがの^のし^しが^がつ^つて^てい^いき、い^いっ^っぱ^っう、南国風の^{かすり}餅が次第に需要を伸ばして大島餅を筆頭に久留米・伊予・備後・米沢・所沢など各地の餅が人気を集めていった。だが、開港・明治維新とともに事態は一変する。古島敏雄『体系日本史叢書 12・産業史Ⅲ』（一九六六年四月、山川出版社刊）に依拠して問題整理をおこなっておこう。「わが国経済発展の最高段階を示している綿作・綿業は、

その最終生産物の商品化の高さによって、前項でみた製糸・養蚕業とは正反対の影響を開港による自由貿易からうけることになった。都市に流通する綿製品が完全な商品であるところから、価格差によって外国産の綿製品と市場で競争することになるのである。」「紡績業・織物業ともに工場制工業として確立した欧洲諸国からの輸入品の大量の輸入は国内の手工業生産に影響を与えないではおかない。その影響のあとを、幕末期について全国的に確定することはできない。やや一般的には明治二十四（一八九一）年九月刊の、大林雄也編『大日本産業事蹟』の各地の綿業地の叙述を整理することによってえられる。／国内綿業地帯への貿易の影響は大約次の三形態に分けることができる。(1) は化政天保期にかけて発達の頂点に達し、名声を博しながら、開港後販路を失ない、引きつづき明治以後にかけて衰頽を続ける地方、(2) 開港後一度衰勢に見舞われるが、輸入紡績糸を原料にとり入れて回復に向うもの、(3) 開港以後新しい事情の下に綿織物地帯となり、以後伸びていくものなどがこれである」（第一篇開港・明治維新と産業の動向、第二章開港後の産業の動向／第二節外国貿易の影響）。——以上が、日本綿業史のあらまし、ないし、ワタの産業文化史のあらましである。すなわち、『人生地理学』の「本邦に於ては北緯三十八度以北には」うんぬんのセンテンスの補注的説明に該当する。

問題は、つぎのセンテンスをどう説明すれば、正しい原典解釈たり得るか、という点にかかわる。牧口は、日本の綿業文化を概括したあとで、ずばり明言するのである。「然れども本邦の綿毛は繊維太く、且つ短かくして細糸を紡ぐに適せざるを以て、主として中入綿^{なかいれわた}として用ひられ、又た太き織糸を紡ぐに用ひらるゝのみ。二十八手以上の細糸に至りては外国綿を混するも尚ほ困難なり。之に反して外国産は廉価にして、且つ細糸を紡ぐに適するが上に、近来紡績の業、各地に勃興せしより、綿の需用は非常の多量に達したれば、輸入綿は年々其額を増し三十三年には殆んど六千万円に達せり。輸入綿の最多額は支那産にして、之れに次ぐを印度綿となす、印度綿は最も細糸を紡ぐに適す」と。日本在来種のワタからつくられる綿糸・綿布は繊維も太い粗悪品で而も値段も高いときているから、これじゃあ、インド産や中国産^{とて}に逆も太刀打ち出来ないのは当然である、近來ますます需要の多くなった紡績用原料として輸入綿の額が増加したのもあまりにも当然である、と牧口は明言するのだ。（われら日本人に生まれた以上は何時如何なる場合にも日本製品に最^{ひい}上^きして購入するように努^{つと}め、ついでに日本的なる凡^{あら}ゆる事物に盲目的礼拝を捧げるべきだ、とするショーヴィニスム chauvinisme 的信条を、牧口は、生涯にわたって、きびしく忌避した。）日本在来種のワタを原料にする綿糸では二十八手（正確には「二十八番手^{ぼんて}」と称すべきであろう。番手とは、糸の太さを表わす単位。番手制には、一定重量の糸の長さから算出する《恒重式》と、一定の長さの糸の重量から算出する《恒長式》とがあり、綿糸およびイギリス式紡績絹糸は一ポンドで八四〇ヤードというきまりになっている）以上の細糸を製造することさえ出来ず而も値段も嵩^{かさ}むというのだったら、安くて優秀な外国産との自由競争で大敗北を喫するのは《理路^{しか}》に適^{かな}っており、だれをも怨むいわれは無いじゃないか、と明言するのだ。（牧口記述によると、いちばん細糸を紡ぐに適しているはずの「印度綿」の輸入額よりも、「支那綿」の輸入額のほうが多いとあり、これでは理屈に合わないようにみえるが、これは、一九〇〇年〔明治三十三

年] 当時、日本国内での経済不況とは別に国際市場での熾烈な競争がインド綿と中国綿との間に惹起しており、殊にいったんボンベイのペスト流行で全面後退を余儀なくされたインド綿が猛然と巻き返しを図るもの^{なかなか}の却々中国綿に勝てないといった動向を、なにほどこ反映しているのではないか、と思考する。) 間違いなく、若き牧口は、綿花輸入税撤廃の請願が紡績連合会から繰り返し提出され、これに抵抗する国内綿作者の反対運動も熾烈を極めたが、結局は一八九六年になって輸入税が撤廃となった十年ほどの推移を、冷静に観察し、熟慮に熟慮を重ねていき、他方、「一国民にとっても一個人にとっても、より安く購買できるものをつくるのは愚かなことである」(アダム・スミス『諸国民の富』第四編第二章)との古典経済学の基本テーゼに謙虚に傾聴し、茲のセンテンスを書き綴ったに相違ない。これこそ真義での《地理学思考》と申すものである。

付け足しになるが、本補注の最後に、明治二十年代の日本紡績業の生産額がそれこそ恒常的に上昇しつづけていって綿糸輸入額を上回っていた動向と、一八九〇年から中国などへの綿糸の輸出が開始されると激増をつづけ逸早く一八九七年には綿糸輸出額が輸入額を上回るようになっていった推移と、——要するに、若き牧口常三郎^{がりきしか}の眼力が確と見届けたはずの明治中期日本の国際貿易力発展の具体的過程のあらましを、最新の若手経済学者の「別の視点、を借用して整理し直しておこう。次に示すのは、『日本経済史4・産業化の時代 上』(一九九〇年一月、岩波書店刊)所載の阿部武司論文「(3) 綿工業／一 紡績業、1 明治二〇年代における発展」の最重要箇所である。牧口がインド綿・中国綿に注意深い言及をおこなったとき、かれの眼差^{まなざし}には同時代紡績産業の全体像が把握されてあったはずである。

さて明治二〇年代の繁栄のなかで紡績業には二つの大きな変化が生じた。まず、大阪紡をはじめとする各社は遅くとも一八八九年頃には従来使用していたミュール精紡機に代えて最新鋭のリング精紡機を設置する意思決定を行い、ほどなくそれを実現して以後の発展の技術的基礎を固めた。一八三〇年頃に完成されたミュール紡機は牽伸・加熱工程と捲糸工程とを交互に反復する機構であり、均質で柔らかい糸を紡出するが、操作には相当の熟練が要請された。一八七〇年代に本格的に実用化されるようになったばかりのリング紡機は牽伸、加熱、捲糸の全工程を同時に連続的に進める機構であった。その操作は単純で、糸繋ぎと清掃作業のみに従事する未熟練労働力で精紡工程の運行に支障は生じなかった。なおリング紡機で生産される糸はミュール糸とは対照的に撚りの強い丈夫な糸であった。

第二の変化は、日本紡績業が輸入棉花に全面的に依存するようになったことである。紡績各社はすでに明治二〇年代初頭に中国棉花への依存度を高めていたが、一八九〇(明治二三)年からはそれに代わってインド棉花を多く用いるようになった。この転換は、インド棉花がたんに低廉であったためばかりではなく、それか太糸生産に適した国産棉花や中国棉花とは異なる長繊維であり、日本紡績業の戦略的製品となりつつあった二〇番手綿糸の生産に適合的であったために生じた。一八九三年、紡績会社を正会員、棉花商を準会員とする大日本綿糸紡績同業聯合会(一九〇二年に大日本紡績聯合会と改称。略称紡聯)と日本郵船会社との間にインド棉花積取契約が結ばれて、以後日本郵船が、インドと日本をつなぐ航路を支配していたP&O汽船会社など外国の汽船会社との激しい競争に打ち勝ち、インド棉花の輸入が促進されたエピソードは周知のことであろう。

一八九六年には、棉作農民の反対によって実現が阻まれていた棉花輸入税の撤廃も実施された。この施策によって、徳川時代以来、関東地方以南で広く作られていた重要な商品作物棉花の栽培が凋落を余儀なくされ、棉作に充てられていた畑地が桑畑に、田地が米作用の田に転換されて日本農業は大きく変貌することになったが、日本綿業がインドさらにはアメリカ合衆国などで産出された低廉な棉花に全面的に依存する体制は、明治二〇年代末に確立したといえよう。

——いよいよ明瞭になったが、明治二十年代日本綿工業が一挙に《戦術転換》をおこなってインド棉花を輸入原料とする《二〇番手》以上の細い綿糸の生産に切り替え、而もそれに成功したことがやがて明治三十年代以降の高度成長を準備する道を開いたのである。その間に、日本国内の棉作農民との激しいトラブル、輸送に当たる日本郵船と外国汽船会社との駈け引き、紡績工場に就労する女工さんたちの置かれた劣悪な労働条件、などなどの困難な問題が生じたことは、改めて説くまでもない。だが、茲ではそれら事項に触れる余裕は無い。だが、兎も角も、日本紡績業は明治三十年代後半の上昇気流に乗って発展を遂げ、ついに第一次世界大戦後の好況期には生産額で世界一にランクされるまでになっていった大勢の傾向だけは知っておく必要がある。有沢広巳監修・山口和雄ほか編集『日本産業百年史 上一開国から太平洋戦争まで一』（一九六七年四月、日本経済新聞社刊）の「第Ⅱ編近代産業の確立／各論・織物——イギリス綿布を制圧」に依拠し、明治三十年代後半以後の状況（つまり、『人生地理学』公刊のあとの日本綿工業の辿った軌跡をさす）^{なぞ}を準っておきたい。「明治前期にもわずかながら綿布が輸出されていたが、明治二十年代にはいって巨大な紡績資本による大量の広幅綿布生産はしだいに中小の在来機業を圧倒し、明治三十年代には完全に支配体制を確立した。しかし輸出綿布は日清戦争から日露戦争にかけての間、絹布におけるほど異常で急速な増大は示していない。絹織物生産の場合には原料はすべて国内産だったが、綿布原料の場合はこのころはすべて外国棉花に依存していたから国際的な相場変動の影響を受けることが多かった。日露戦争中、軍需品としての綿布需要の増大は生産技術、規模の拡大を促し、戦後の韓国・中国市場への強力な進出は兼営織布だけでなく在来機業も発展させ、また従来の綿糸輸出（原料輸出）から、綿布輸出（完成品輸出）へと転換する契機となった。こうして、明治十年以来ゆるやかに上昇しはじめた綿布輸出は、日露戦争後急激にそのテンポを早めていった。」「次に兼営織布をみよう。広幅力織機は順調にふえているが、明治三十七、八年以後、ふえ方が急ピッチである。綿糸の過剰生産対策として始まった兼営織布が、日露戦争後の市場拡大を背景にして本格的な発展を遂げる過程がうかがえよう。ことに大阪紡、三重紡、金巾製織^{かなきん}、天満紡、岡山紡などは三井物産と提携して満韓市場に進出し、明治四十年代には、同市場で外国綿布を押えるほどになった。そしてわずか四、五〇社の紡績兼営織布会社の生産高が無数の群小在来機業の生産高をしのぎ、全綿布生産高の八〇％平均を占めるにいたった。そして第一次大戦後、ついに世界市場の王座にあったイギリス綿布を制圧するほどになったのである。イギリス綿業が植民地支配と結びついて発展したのと同じように、日本綿業は工業不毛の広大な東洋市場へ軍事力を背景としながら進出することによって高度の発展を遂げた。そうした意味では、日本綿業は対外侵略の先頭に立っていた産業とみていいだろう」（執筆者は林英夫）。

牧口常三郎の「地理学思考」は、すべてこれら《全体的状況》を的確に^{おの}己が視野の中に収め、うちみたところ複雑を極める諸現象をば《科学的普遍概念》を^か藉りて単純化し、それにより理解することをめざした。そのゆえにこそ、^{こんにち}今日においても、すこしも古臭くならないばかりか、却って新しい息吹きを放射しやまないのである。

33 麻（九四ページ、注8） 狭義におけるアサは、クワ科一年草のアサ（タイマ）をさす。広義におけるアサは、タイマに類似して長い繊維材料を採る植物であるマオ（カラムシ）・コウマ（ツナソ）・アマ・マニラアサなどの総称として言う。また、狭義と広義との差異ではないが、植物をさして言う場合と、植物を原料として製品化した^{あさせんい}「麻繊維」をさして言う場合とがある。ここで牧口常三郎が使っている術語は、当然、狭義すなわち厳密に限定された意味のほうである。

さて、アサ（タイマ [大麻]、またオオアサ）*Cannabis sativa Linn.* は、クワ科（学者によってはアサ科を立てることもあるが）の一年生草本で、全体に一種の芳香を有する。草丈は一・五～三m。茎は四角柱状^{まつすく}で真直にのび、外面に縦みぞがあり、色は黄緑・濃緑・紫緑などあり、全体に細毛を生じ、その内部は空洞状^{くうどうじょう}になっている。茎中の六片の柔組織のなかに厚膜の韌皮繊維細胞^{じんぴ}があって繊維束をつくる。葉は掌状^{しょうじょう}複葉で三～一〇枚の小葉片に分かれていて、これがいわゆる^{あさ は もよう}《麻の葉模様》の原型をなす。長い葉柄を持っており、茎の下部では対生し、上部では互生となる。雌雄異株で、初夏に淡黄緑色の花を咲かせる。雄花は総状花序で梢上の葉腋に付き、五本の雄蕊^{おしべ}と五枚の萼片^{がくへん}とがあり、枝の先端に円錐形に集まって咲く。雌花は穂状^{すいじょう}花序で、一本の雌蕊^{めしべ}があり、二花柱を具える子房を有する。「一般に雌木は雄木よりも樹幹が長い繊維の品質は劣る。同一個体内でしばしば性の反転による中間性個体を出現することがある」（高嶋・傍島・村上共著『標準原色図鑑全集 13・有用植物』（一九七一年三月、保育社刊））。日本では最も古い繊維植物であり、ワタが輸入される以前から広く栽培されていたと考えられ、徳島県^{おえ}麻植郡は神武天皇の命令で栽培を始めたという言い伝えがあるが、同種の民間伝承は日本各地に残る。

アサの原産地は中央アジアないし西アジアとされるが、またインドの一部やシベリアの一部にもわたるともいう。このアサがどのようにして野生植物の段階から栽培植物の段階へと変化=変容していったかというプロセスについては、ヴァヴィロフの古典的名著における論究があるので、本補注もそれを^{なぞ}準ることになるであろう。だが、それ以前に、こんにち熱帯から温帯北部にまで（ロシアおよびイタリアが最大の生産地であり、日本では栃木県で優良品を産する）ひろく及んでいるアサの、栽培法ないし栽培条件を知っておく必要がある。これに関する一般向け解説記事としては、平凡社版『世界大百科事典1・アーア』（一九七七年版）登載のものが最も客観的であり周到であり且つ最も高い水準にある。「【栽培法】種類によって、環境や栽培法は必ずしも一樣ではないが、次のような点はアサの全般にわたって通ずるものである。（1）茎の伸長をはかり、繊維の発育をうながすために、温度の急激な変化がなく、生育期間中降雨がかなりあり、空気湿度の高いところがよい。（2）茎が倒れたり折れたりすると繊維の品質をおとし、収量も減ずるので、強風のないところを選ぶ。（3）繊維細胞膜の肥厚がうながされ、かつ収穫後の調製、乾

燥のために生育の後期から収穫期にかけては晴天の多い方がよい。(4) 土壌は砂質よりも有機質に富んだ排水のよい壤土ないし植壤土が適する。(5) 茎わかれを避けるために密植する。(6) 急速な生育を避け、茎の伸長が徐々にしかも斉一に行われるように肥料の種類や施肥法を考慮する。このためには化学肥料よりも自給肥料を主にし、生育の途中で肥料ぎれがしないように施肥する。(7) 収穫が早すぎれば繊維の収量が少なくて弱く、おそすぎると繊維が粗剛となるから、適期を厳守すること。(8) 収穫後茎は浸水精練されねばならぬので、水が豊富で、便利なところがよい。(9) コストをやすくつけるため土地、労賃のやすい地方を栽培地に選ぶ。」(執筆者は太田英蔵・西川五郎)。

これだけの基礎知識を獲得したあと、ヴァヴィロフ『栽培植物の発祥中心地』Вавилов, Н.И.: Центры происхождения культурных растений, 1926. 所載の「第五章 栽培アサの発祥と一次作物群の栽培の成立」に眼を転じなければならない。だが、やはり、それ以前に、著者ヴァヴィロフについて知っておく必要がある。『岩波生物学辞典・第3版』の「ヴァヴィロフ」の項目をひらくと、こう見える。「(Vavilov, Nikolai Ivanovich) 1887.11.25 ~ 1943.1.26 ソ連の植物育種学者、遺伝学者。一九一三年イギリスに留学し、John-Innes 園芸研究所および Cambridge 大学において遺伝学を研究した。帰国後 Moskva 大学教授 (一九一四) から Saratov 大学教授に転じ (一九一七)、ついで Leningrad 応用植物研究所長に就任した (一九二〇)。この間、数回各地を探検して、栽培植物の起源をたずねた。ソ連科学アカデミー会員、遺伝研究所長、ソ連農業科学アカデミー総裁 (一九二九~三九)。主要な研究は植物の耐病性ならびに免疫に関するものと、遺伝学の原理を農業および分類学に応用し、さらに栽培植物の起原の問題に適用したものである。野生および栽培植物の変異に関して、相同系列の法則をたてた。T.D. Lysenko の出現により失脚し、一九四〇年逮捕、翌年死刑の判決を受ける。しかし執行はされず、Saratov 刑務所内で病死。」ここに触れられているルイセンコ事件については、本来ならば詳論すべきであるが、枚数の余白が無い。前記ヴァヴィロフ論文の訳者である中村英司の好文章 (後述の訳書『栽培植物発祥地の研究』の巻末解説「ニコライ・イワノヴィチ・ヴァヴィロフの生涯」の一部) を引いておく「T・D・ルイセンコのヴァヴィロフに対する攻撃は当初から正常な学問上の対応を許さない性質のものであったが、人間の歴史のすべてがしばしばそうであるように、その後、急速に恐るべき破壊的な様相を帯びてきた。先に書いたように、ヴァヴィロフを会長として一九三七年八月、モスクワで開催が予定されていた第七回国際遺伝学会は阻止され、二年延期ののち、やはりヴァヴィロフを会長とするという予定のもとでエジンバラで開かれた。しかし、ヴァヴィロフ会長のスコットランドへの渡航許可はついに下りず、またその他のソヴェト学者の参加も行なわれなかった。／この一九三七年、ルイセンコが編集する雑誌『ヤロヴィザーツィヤ』はついにヴァヴィロフを人民の敵ときめつける非難文をかかげた。これに先立つ一九三五年六月、ヴァヴィロフは全ソ農学アカデミー総裁を解任されているが、その後も所長として留まっていた全ソ植物栽培研究所の仕事そのものも激しい非難と中傷にさらされ、研究費の割当ては急速に減っていった。／ルイセンコは一九三八年二月より全ソ農学アカデミーの総裁となったが、その命令によつ

て、この年の九月には植物栽培研究所の研究員が多数罷免された。ヴァヴィロフはこれらの不当な圧迫に対し毅然として対処し、研究所があげつつある多くの輝かしい実際的な業績を引証しつつ一歩も譲らず反論した。／一九四〇年八月六日、ウクライナ共和国西部のチェルノフツイで植物の採集と調査をしていたヴァヴィロフはモスクワからやってきた内務人民委員部の係員によって逮捕された。／その二年半後、一九四三年一月二六日、おそらくサラトフ刑務所において、この偉大な農学者は燃えさかる炎のようなその五五年の生涯を終えた。」——斯くのごとく、何ひとつ悪事も為さず誤謬も犯していないこの偉大な農学者＝思想家は、邪険兇暴なスターリン主義権力者の陰謀によって生命を殞す運命に追い込まれた。（ほぼ同じ時期、日本では、何ひとつ罪も犯さず過ちにも墮することのなかった偉大な地理学者・思想家、牧口常三郎が巢鴨刑務所においてその七十二年の生涯を終えた。ヴァヴィロフの無辜の死と、牧口常三郎の無辜の死とを、長大悠久なる人類思想史の流れに沿って比較してみる試みは、きわめて深い意義を持つと考えられる。本補注が敢てヴァヴィロフの業績に少々詳細に論究する所以である。）

このヴァヴィロフ論著『栽培植物の発祥中心地』の全訳が、上述のごとく、中村英司訳『栽培植物発祥地の研究』（一九八〇年二月、八坂書房刊）のなかに、他の幾つかの重要論文とともに収められていることは、われわれにとって、まことに幸運である。夙くから世界各地から集めたムギ類の膨大なる標本を綿密に調査した結果、一九一〇年代の後半、すでに、ヴァヴィロフは、種または変種というものが単なる寄り合い地帯に似た多様性を示すのではなくして、必ず或る系列的な構成を形づくっていること、しかも「近縁の属、種、変種同士において、その品種の構成が規則正しく繰返されている」ことを発見した。たとえばコムギのうち $2n = 42$ のグループに属するパンコムギは「有芒、無芒、半有芒、膨曲芒」、「白色穂、赤色穂、灰色穂、黒色穂」、「有毛穎、平滑穎」、「白色粒、赤色粒」、「冬型、夏型」といった形質で区分される品種群を持つが、同じグループに入るクラブコムギ、スペルタコムギ、マカコムギなども全く同様の品種群を持っている。別のグループ ($2n = 28$, $2n = 14$) においても酷似した品種構成を示す種が大多数である。また、この相同性は、形態上の形質においてのみならず、生理的な面においても現われる。「この事実は一九二〇年という早い時点で第三回ロシア育種学会で公表され、翌一九二一年、アメリカの国際農学会での講演を経て、一九二二年、Journal of Genetics によって世界的に知られるようになり、センセーションを呼んだ。この『相同系列の法則』はたんに一つの学説として意義深いだけでなく、ある種や変種の持つ系統や品種のうち、相同的に当然存在すべき形質を持った系統や品質が未発見の場合、それを発祥中心地において集中的に探索するという方法によって育種素材の発見を合理化するという面をも持っていた。」（中村英司訳前掲書巻末解説「ニコライ・イワノヴィチ・ヴァヴィロフの生涯）。その後、みずから世界各地の探検に赴き、共同研究者とともに大規模な栽培植物のコレクションをおこない、それと同時にそれらの分布地域をからめて研究を進めながら種の内部構成を細かく洗う必要性に答えるべく「微分的植物地理学」（または植物地理的微分法）という手法——すなわち、一つの種や変種が内蔵する多様な形質を細分しつつ、その分布する地域にはりつけてゆく手法——に想到し、植物形態学・植物分類学を超え

て生理学・細胞学・生化学・免疫学などの専門家の協力体制を得て作業を続けるうちに、一步すすんで次の重要事実を発見した。「それは一つの種が持つ多様な品種群がとくにある場所に著しく局在集中している様相の多いことであった。はじめ、かれにとって、このような地球上の場所はたんに育種素材の宝庫であり、遺伝子の集中地と映ったことであろうが、まもなく、このような場所がその種の変異形成中心地、つまり発祥中心地であろうという考えにつき当たった。／かくて一九二六年、『栽培植物の発祥中心地』が発表されたが、その中において、全世界に五つの栽培植物の発祥中心地を設定した。このうちとくに、中央アメリカや南アメリカの発祥地は新しい大きな発見であった。のちに『育種の植物地理学的基礎』（一九三五年）を発表し、これを八大中心地として整理し直したが、さらに一九四〇年の『ダーウィン以後における栽培植物の発祥に関する学説』において七大中心地にとりまとめた。／この発祥中心地について語るべきことは多い。例えば一つの発祥中心地にはしばしば、非常に多くの作物が集中していることや、一次中心地と二次中心地のあること、一次中心地には優性形質が多いが、二次中心地には劣性形質も多いこと、これらの地域は砂漠、山岳などで隣接地域と隔てられている場所が多いことなどである」（中村英司訳前掲書巻末解説）。そこで、^{そじょう}祖上にのぼっている論文『栽培植物の発祥中心地』の思想主題（＝科学的命題）をいっそう明確化しておくのがよいとおもうが、そのためには、まず同論文の「まえがき」に当たる必要がある。冒頭第一段落に「筆者らが栽培植物の品種構成について研究しているうちに、リンネが分類した種や属の内部において、さまざまな型の形成にはきちんとした体系が存在することを確認するようになった（ヴァヴィロフ、一九二〇、一九二二）。詳しく調べてみると、遺伝的な型や品種の多様性が、じつは整然たる一つの体系に従っていることが分ってきた。各方面の研究者が行なった、すべての科にわたる主要農作物の合同研究の結果、変種と系統の体系、つまり遺伝的変異の構成の筋道を明らかにすることができるようになったのである」と見え、つぎに、「そもそも、この栽培植物の発祥問題はド・カンドル（De Candolle, 1855）やダーウィン以来、多くの研究者の関心を惹きつけてきた。また植物学者に劣らず、歴史学者、考古学者、生理学者、農学者もこの問題に手を染めており、栽培植物の発祥に関して今までにすでに膨大な文献が発表されている。その中でも独自の地位を占めているのがド・カンドルの古典的大著、『栽培植物の起源』（L'origine des plantes cultivées. De Candolle, 1883：まず要約版が一八八二年に出版された）である。ド・カンドルの論文のうちでは、いくつかのグループの植物についてやや不十分な点があるが、これはその後の新しい歴史的、考古学的資料と多くの植物学、遺伝学上の発見によって大幅に補充された。〈中略〉ところが、栽培植物の構成、品種や種への分化に関する知見を拡大してゆくに連れ、栽培植物の発祥という問題自体がド・カンドルの時代に考えられていたよりもはるかに複雑なものであることが分ってきた。と同時に、この問題の具体的な解明によって、栽培植物の進化の様相とリンネ種の変異形成過程が理解できるようになり、またこれらの植物を取扱う育種家たちのきわめて実際的な仕事もそれと大きなかかわりがあることが明瞭になった。さらに、栽培植物の発祥中心地を具体的に、また正確に把握することにより、豊かな品種素材の源泉を発見するというかたちで、発祥中心地を実際的に利用する大

きな可能性が眼前にひらけてくることも確かとなった。」と見える。——このような思想主題から、コムギ・パンコムギ・クラブの発祥中心地が追求され、ついでオオムギ・栽培エンバク・栽培ライムギの変異形成地がつぎつぎに明かされてゆくのである。そして、いよいよ、「第五章 栽培アサの発祥と一次作物群の栽培の成立」のチャプターに入ることになる。一般的にいうと、野生の植物と、栽培されるようになった植物との、両者のつながりを突き止めることは困難であり、われわれがげんに見ているのは数千年に亙る淘汰の結果だけであり、それらの歴史的経過を多少とも事実ケースに即した姿で復元するなどということはまず夢のような話である。ところが、例外的な事例も無いわけではない。アサの場合がそれである、とヴァヴィロフは言う。アサに関するかぎり、「事情は必ずしも絶望的ではない。ここでは、行き過ぎた想像に走ることなく、歴史の実質的な過程を辿ることが可能なように見える。／筆者らがソヴェトのヨーロッパ地域南東部およびアジアでのアサの植物学的な構成を研究しているさい、この植物の発祥問題にも手を染めることになった。もっとも、アサがいつごろ栽培されるようになったか、それはどの地方でどんな民族によって行なわれたかといったことは何も分っていなかったが、アサ栽培の発祥過程そのものを研究対象として詳しく調べることが分ったのである。おそらく、古くからある植物のうち、その栽培化の過程をアサについてほど明確に辿りうるものはないだろう。」と。まず、ヴァヴィロフおよびその調査グループは、一九二〇年にサラトフおよびアストラハン両州の栽培アサを調査したさい、そこでの野生の、または野生し、あるいは雑草化したアサにも注意深い観察の眼を向け、謂うところの《栽培化の過程》を鋭く捕捉してゆくのである。その報告リポートに傾聴しよう。

野生アサ、雑草アサ、および栽培アサの生態

栽培植物のうちでも、アサは肥沃な土壌に対する要求がとりわけ強い作物である。じっさい、アサほど畑の土を弱らせる植物はない。畑にアサを播く前に、アサが畑の施肥の違いにどれほど敏感に反応する植物であるかということを十分に呑みこんでおくのがいいだろう。肥料不足はひどく生育を弱め、葉や茎の緑色を薄くする。反対に、十分な施肥により茎葉はすくすくと伸びてゆく。

アサ栽培の実際では、十分に厩肥を施したアサ栽培用の畑をしつらえて種子を播く。アサはとくに加里の要求が強い。自らの持つ生物学的特性によるのだが、アサは肥沃な土壌に育つ植物であるといえる。

肥料気のない土を好む点では、真の野生アサや雑草アサとてもまったく同じである。筆者らの観察によると、アジアやソヴェトのヨーロッパ地域では、野生アサも雑草アサも、ほとんど畦間、溝、低地、村落近くや家のまわりのごみすて場、畑の近くで雑草に覆われていない肥沃な土の所などに住みついている。また、野生アサや雑草アサの繁茂地に関するたくさんの報告を調べてみても、かれらが肥えた土壌を選ぶ能力を持っており、腐植が堆積している場所や、厩肥などが施されている所ならどこへでも拡がってゆくことが分る。

ヴォルガ河下流地域やアルタイ地方でも、アサがさかんに生育している典型的な場所は遊牧民の居留地であるが、ここでは冬の間にか畜がその排泄物で土壌を肥沃にするわけである。また、雑草アサは畑地においてとりわけ繁茂する。アストラハン州の村落に近づく、ごみすて場、住居の裏手、藪のまわりなどに雑草アサの茂みのあるのが遠くからでも分る。アルタイ地方や北部コーカサスでは、雑草アサが村落から遠く離れた人の近づかないような谷間にもはいりこんでいることがあるが、

そんな所は、腐植や野生動物の糞尿がたまる低地や溝が主である。いわば、これらは自然に堆肥が施用されたような場所なのである（シンスカヤ、一九二五）。

野生アサと雑草アサの生態的な様相は、これらが養分が多く、ふっくらとしていて、雑草で固められていない土壌を選んで住みつくとのことである。アサは典型的な「ごみすて場の植物」なのだ。

栽培アサの成立

このように、遊牧民の居留地には野生アサや雑草アサがつきものなのが普通である。自らの持つ生物学的特性のゆえに、野生アサは人間についてまわり、人間の意志にはおかまいなく、その居住地にいっしょにやってきて、ごみすて場や厩肥に富んだ場所に根をおろすのだ。

ここにあげたいいろいろの事実と、野生アサ、雑草アサの多様な型とを考え合えると、栽培アサの発祥過程そのものがじつに明白になってくる。

野生のアサは形態的・生理的なさまざまな型の混合物であり、花被と馬蹄状の張り出しとを持ち、果実は小粒で発芽の遅い真の野生型から、果実が大粒で果皮が薄く、発芽の早い非脱落性の典型的な栽培型のものにいたる多彩な型を含んでいるが、人間が旧大陸のあちこちに移り住むとき、人間とともにその居留地についてきたものである。アサは旧大陸の最初の居住地たちのあとを追って、その住居のまわりに住みつき、やがてかれらの目にとまるようになり、自らは人間の役に立つようになった。

飢饉の年に、人間は植物の種子や果実の採集に頼ることになるが、この場合、アサについても、果実が大きく非脱落性の系統を選ぶようになるのはあたりまえのことである。当然、野生アサの混合集団の中から、脱落性が弱く油分の多い、つまりまさに「栽培型」のものが無意識のうちに注意の対象となったわけで、人間の意図とかかわりなく、このような筋道を経て栽培アサが生じてきたのである。

アサがこのようにして次第に栽培化されてゆく様相は、今日でもアルタイ地方で詳しく見ることができる。E・N・シンスカヤ（一九二五）の観察によると、今日でも次のような状況が見られるという。（一）野生状態の植物、（二）おそらく、この野生アサの発祥中心地から人間の居住地のまわりに出てきたばかりの植物、（三）人間によって利用されている雑草アサ、（四）栽培されているアサ。

アルタイ地方の人々がアサを播種するとき、まずは自分たちの畑のアサから種子を集めるわけだが、足りない場合は、雑草アサからも種子をとってくる。このように、時には今日でも、アサが栽培化される最初の契機を見てとることができる。

こんな風にして種子用のアサの栽培が始まったが、栽培化の過程は自然に起ったもので、人間の意図によるものではない。ところが、これに対し繊維用のアサの栽培化はもっと複雑であるが、さりとてそのために、何か特別な才覚や工夫を必要としたわけではない。トルキスタンやヒビニのオアシス地帯でアサの茎から繊維の束を取出すのを見る機会があったが、それは茎をあらかじめ水に浸したりせず、乾いた茎のまま強くもむという簡単なやり方であった。

ハシシュ〔アサからとれる麻薬〕のためにアサを利用するのに、人間の側からのとくに独創的な努力を必要としなかった。茎や葉を焚き木として燃やしたとき、アサが一種の酔わせるような作用を持つことに古代の人たちは気づいたわけである。麻酔性の物質の含有量は南へ行くほど多くなり、ハシシュを採るためのアサの利用も南方地域に集中することになる。

油を採るためのアサの利用は比較のおそい時代に始まったものと見られるが、これとてとくに苦心の末の発見ではなかった。野生アサはさまざまな遺伝形質の混合物であり、みずからの中に、赤道地帯から北極圏にまで広く人間とともに散らばってゆく素質を秘めていた。アサの雑種後代の分離を観察すると分るが、花被がなく、それに伴って果皮が薄くなること、馬蹄形の張り出しがない

ことなど、「栽培」アサが持つ特性は劣性形質であるが、栽培の過程において、無意識のうちに、これらの形質が選り出され強められていったのである。

いつ頃アサの栽培が始まったのか、それを始めたのはどういう民族か、を明らかにするのは非常にむずかしい、古代エジプトにおいてアサは知られていなかったし、ナイル河谷でのアサ栽培については客観的な資料がまったくなく (Buschan, 1895)、古代エジプトの織物を調べてみても、アサの繊維が使われた形跡がない。また、聖書の中にもアサについての記事は見当たらない。現在までのあらゆる歴史的、植物学的な性質の資料の示すところによれば、アサはアジアから来た植物であるということになる。上述したような東アフガニスタンの土着の野生アサが持つさまざまな独特の形質を含め、アサが示すあらゆる多様性はアジアに集中している。大粒性で晩生の系統は、かつての満州、また極東地方と中国に固有のものである。また、中国とインドの古代においてはアサが知られており、サンスクリットの中にはアサを意味する言葉がいくつもある。

ド・カンドルは遊牧民族のスキタイ人がアサをエジプトに持ってきたのだと考えたが、これはありえないことではない。ヘロドトス (紀元前五世紀) は、アサが紀元前四八四年までは古代ギリシア・ローマ世界には知られていなかったと述べている。しかし、パロ、コルメラ、プリニウス、ディオスコリデスあたりになると、繊維用のアサ栽培について書いている。

おそらく、アサ栽培はいくつかの地域で同時に、しかしお互いに無関係に起ったものと思われる。栽培アサの地理的な型がきわめて豊富であること、アルタイ地方とコーカサス北部ではアサが栽培化されてゆく様子を目のあたりに見ることができると、またとりわけ、人間が移動してゆく際に、その随伴者となるというアサの持つ生態的特性などが、このことを教えてくれるのである。

——じつに興味深い記述であり、遺伝的多様性の中心地が必ず栽培植物の発祥地であるとするヴァヴィロフ理論の一端を読み取り得るけれど、それについては、もうこれ以上の言及を差し控えることとしたい。

——このあとは、小学館版『万有百科大事典19・植物』に拠って、アサの利用法そのほかの事項を確かめることにする。「【利用】アサの茎の^{じんび}韌皮繊維はじょうぶなので、これを取り出して麻糸とし、それを織って麻布をつくり、衣料とする。また麻糸は麻ひもとし、^{げた はな おしん}下駄の鼻緒の芯としたり、ロープをつくったりする。アサの繊維をとるには、土用のころに全草を抜きとり、根と葉を取り除き、熱湯にひたしてから皮をはぎとる。これをアルカリで処理して精製し、不純物を取り除く。果実は麻の実とよばれ、香辛料 (七味とうがらし) の原料となる。漢法では果実を^ま麻子仁といい、緩下剤にする。〈佐藤正己執筆〉 / アサには、テトラ・ヒドロ・カンナビノール (THC) を主成分とする麻酔性の物質が含まれているが、この成分は産地や栽培法によって含有量が大幅に変動するといわれる。この麻酔性は薬品に利用されるが、幻覚剤として悪用されることもある。インド産のインドタイマソウは、植物学的には日本で栽培されるアサと同種であるが、THCを多量に含む。インドではこれをバンガ bhang、ガンジャ ganja などといい、アラビア、トルコではハシーシ hashish (hasheesh) といって、ともに吸煙、吸飲したり食物に混ぜて食べたりされる。またメキシコ産のものをマリファナ marihuana (marijuana) といい、アメリカでおもに用いられ、国連の麻薬委員会でも問題にしている。日本産のアサは THC はごく少ないが、大麻取締法で栽培が規定されている。〈長沢元夫執筆〉」。

34 黄麻 (九四ページ、注10) 植物辞典や植物図鑑で「コウマ」を引いても載っていない場合があるが、そのときには「ツナソ」という見出し語を探せばよい。以下に引くのは、小学館版『万有百科大事典 19・植物』所載の記事である。「コウマ【黄麻】[㊦] *Corchorus capsularis* L. シナノキ科の多年草。作物としては一年草とされる。ツナソ、ジュート jute などともいう。インド原産といわれ、繊維作物として熱帯各地に栽培されるが、インドのベンガル地方が全世界の耕作面積の九〇%以上を占めている。草丈は二～四m、茎は円筒状で多く分枝する。葉は披針形^{ひしん}で互生し、葉縁には浅い鋸歯^{きょし}がある。先端部は細く線状にとがり、基部には針状の長い突起を生ずる。葉柄の基部には針状の托葉^{たくよう}を左右に生ずる。花は両性花で、五、六個が集まって短い花序をつくって咲く。花弁は黄色く、長さ七mm、幅三mmで五個あり、卵形で先端がへこむ。雄しべは二〇数本で子房を囲む。雌しべは一本で、柱頭は星状に五裂し、子房は卵形である。一つの花序の中の花はそれぞれ開花期が違い、順々に開花し結実する。果実は、円筒状で長楕円形の蒴果^{ちようだえん}で、外面に一〇個の溝^{みぞ}があり、中は数室に分かれ、一室に一〇数個の種子を生ずる。種子は小さく扁平^{へんぺい}で、濃褐色^{のうかつ}を呈する。種子が完熟すると果実は上方から五裂し、種子はこぼれ出る。／開花後一〇～一四日過ぎに全草を採取し、皮をはぎとって繊維を取り出し、糸撚機^{いとより}にかけて糸にした後、布地に織る。これで作った袋は南京袋またはガニー・バッグ gunny bag とよばれ、米、麦、綿花、コーヒー、チリ硝石などを入れるのに用い、畳の経糸^{たていと}としても使われる。〈佐藤正己執筆〉」。これに付け加えることは無いが、敢て記載するとすれば、コウマの繊維は漂白がむずかしく、また水に弱い、なにしろ製造法・紡績法が容易で廉価であるため、各種の作物の荷造り用粗布として使われ、各種の敷物やロープに用いられる、ということになるうか。

35 苧麻 (九四ページ、注11) 『人生地理学』が発刊された明治三十六年ごろの文化状況を考慮に入れて「チョマ」と訓^よんでおいたが、あるいは、当時から既に「カラムシ」「マオ」という訓み方^よをしていたのかも知れぬともおもう。現在では「カラムシ」が普通の訓み方である。

カラムシを植物辞典や植物図鑑で引くと、この見出し語^{ヘッドワード}のもとに種としてのカラムシ *Boehmeria nipononivea* Koidz. を掲げている場合と、イラクサ科 URTICACEAE カラムシ属 *BOEHMERIA* Jacq. (このなかには、ナンバンカラムシ *B.nivea*、カラムシ *B.nipononivea*、コアカソ *B.spicata*、アカソ *B.tricuspis*、タイワントリアシ *B.formosana*、ナガバヤブマオ *B.sieboldiana*、ラセイタソウ *B.biloba*、ツクシヤブマオ *B.kiusiana*、サイカイヤブマオ *B.pannosa*、オニヤブマオ *B.holosericea*、ヤブマオ *B.longispica*、メヤブマオ *B.platanifolia* が包含される) を掲げている場合とがある。辞書や図鑑には当然ながら一冊 (数冊にわたっていても同じだが) を構成し秩序づけている《思想》(立場とか流儀とか呼んだほうがわかりやすいかも知れないが) が存立しているはずだから、われわれ門外漢が偉そうな顔をして何方が妥当であるの適切であるのといった評言^{さしはき}を挿^さむのは間違っている。牧口『人生地理学』叙述は、ここでは「人類の直接利用に供する植物」のうちの「二、工業製造用植物」のひとつたる「麻」を俎上に据えて論じているのであるから、やはり、主として《有用植物》という観点=視座より補注を作

成するのが無難かとおもう。高嶋四郎・傍島善次・村上道夫共著『標準原色図鑑全集13・有用植物』（一九七一年三月、保育社刊）をみると、こうある。「カラムシ *ramie*, *Chinagrass* / 学名: *Boehmeria nivea* HOOKER et ARNOTT. / 来歴: 原産地はアジア東部であるが、栽培の起源は明らかでない。日本での栽培は古く、織物として各地で生産利用されてきた。/ 形態: 宿根性草本。地下の根株から多数の茎をだし草丈一五〇～三〇〇cmに達し、茎は枝を生ずることは少ない。葉は互生し、形は心臓形、葉縁に鋸齒、葉の裏には白い軟毛を密生するもの（白苧麻）と白毛のないもの（緑苧麻）がある*。茎には繊維細胞があり、五～一〇層で、アマ繊維より軽くて美しく、二〇～二〇〇mmもありアサ類中最も長く、太くかつ強力であるが、弾力性や柔軟性に欠ける。花は小さい単性花、雌雄同株で雌花は茎の上梢の節に、雄花は下部節につく。開花は午前中。/ 適地: 分布は熱帯から温帯北部までわたるが、亜熱帯より温帯南部に適する。高温と多湿を必要とし乾燥地には適さない。土質は深い壤土がよく、地下水位の高い所は根が腐りやすい。/ 品種: 日本の主要品種は白皮種と細茎青心種である。前者は繊細の光沢がよく寒地向、後者は多収、繊維は細美で暖地向である。/ 用途: 繊維を紡績・製網とし、とくに漁網に適する。」そして、欄外には「* 白苧麻は白葉種、通常苧麻ともいわれ *B.nivea* である。緑苧麻は緑葉種、緑葉苧麻ともいわれ、*B.nivea* var. *tenacissima* である。」と見える。この記事に加うるに、小倉謙監修『増補・植物の事典』（一九六八年八月、東京堂出版刊）所載の次の記述を添えれば、われわれにとって必要な知識はほぼ満たされたことになるであろう。「韌皮繊維で織物をつくる。徳川時代から有名な越後縮、越後上布などの原料はカラムシである。ラミーは南方アジアに多量に栽培され、日本でも栽培する。カラムシより丈高く、茎や葉柄にあら毛が密生し、葉が大きくまるい。皮をはいで繊維をとるが、水にぬれても強いので、船舶用の綱または魚をとる網などに用いる。（奥山春季執筆）」。

36 亜麻（九四ページ、注12） アマは、アマ科 LINACEAE、アマ属 LINUM *Linn.* に属する一年生草本または低木。一名、ヌメゴマ。最も古い栽培植物のひとつで、原産地は小アジアまたはエジプトとされる。日本には、元禄時代に、薬用として渡来したといわれる。植物辞典や植物図鑑を引くと、種として登載されている場合もあれば、アマ科ないしアマ属の見出し語が記載されている場合もある。小学館版『万有百科大事典19・植物』には「アマ科」の見出し語のもとに次のような記事が見える。「アマ科 ——か ④ *Linaceae* 双子葉植物離弁花類。草本または低木。葉は互生または対生し単葉で全縁。托葉はときに腺質。花は両性で放射相称をなし、がく片は四～五個で覆瓦状、花弁は四～五個で回旋する。雄しべは四～五個、花弁と互生し、ときに仮雄ずいがある。花糸は基部が癒合する。子房は上位で三～五室からなり、卵子は各室に二個、花柱は離生し、糸状をなす。蒴果は胞間裂開する。温帯に分布し、世界に約六属一五〇種、日本に一属一種を産する。〈初山泰一執筆〉」。東京堂版『増補・植物の事典』には「アマ」の見出し語のもとにこう見える。「アマ 亜麻 アマ科。高さ一m以上になる一年草で、アジア西南部の原産といわれる。日本では北海道で多量に栽培される。茎は細長くて上の方で枝がわか

れ、葉は皮針形ひしんけいまたは線形で長さ二～三cm、さきがとがり、三本の脈がある。花は径けい一・五cmばかりで、あい色または白く、夏、日光をうけて開く。倒卵形の花弁は五枚で、長い五本のおしべと短い五本の仮おしべおよび五本の長い花柱がある。果実は球形で、五つの室にわかれ、それぞれの室に種子が二個ずつ入っている。アマはワタからつくる木綿が一般に使われるようになるまでは、繊維をとる重要な作物であったが、今でもリンネルと呼ばれる高級な織物がつくられ、ハンケチ、洋服地、シャツ、高級テーブルかけなどをつくる。種子からしぼりとった亜麻仁油あまにゆは乾性の油であるから、印刷用インキ、ペンキ、油絵具、リノリウムなどに用いられる。（奥山春季執筆）。——二つの植物辞典（事典）を読み較べると、まるで別々の項目を記述してあるかのごとき感をさえ誘われるけれど、二つの事典執筆者は、それぞれ独立自存の立場ないし視角に拠っているのだから、出来上がった原稿に懸隔が生じたとしても一向に不思議は無い。むしろ、両執筆者とも意識して画一的書きかたを避けようとしているのがわかり、好意を寄せたくなくらいである。それにしても、ここの段落の牧口記述に見える「リンネル製造の原料として用ひらる。殊に其最上品はレースを編むに用ひられ、其下等品は大麻と等しくヅック或は綱等に製造せらる。然れども其強サの程度は遙かに大麻に劣れり」との表現は、なんと簡にして要を得たる表現であることか。その理由を考えてみるのに、牧口地理学それ全体がペスタロッチ開発主義教授理論を paradigm に仰ぎつつ直観主義（感覚尊重や実物教授）思考を以ておのれの論理展開を進めた所せう為もあるけれど、なおそのほかに、北海道在住時代に見聞きして触れた亜麻栽培の農業的実地経験をおのれの世界のものとな為し得ていたればこそ斯かる何気ない表現のなかにも驚くべき reality が描き籠められてあると解される。なんであれ、牧口は、他人の書物からの部分的引用をおこなって事を済すますような、あの世間によくある姑息こそくでもあり卑怯ひきようでもある手段に、けっして与くみしようとはしなかった。